日南市埋蔵文化財調査報告書　第16集

平成13年度

上城跡遺跡

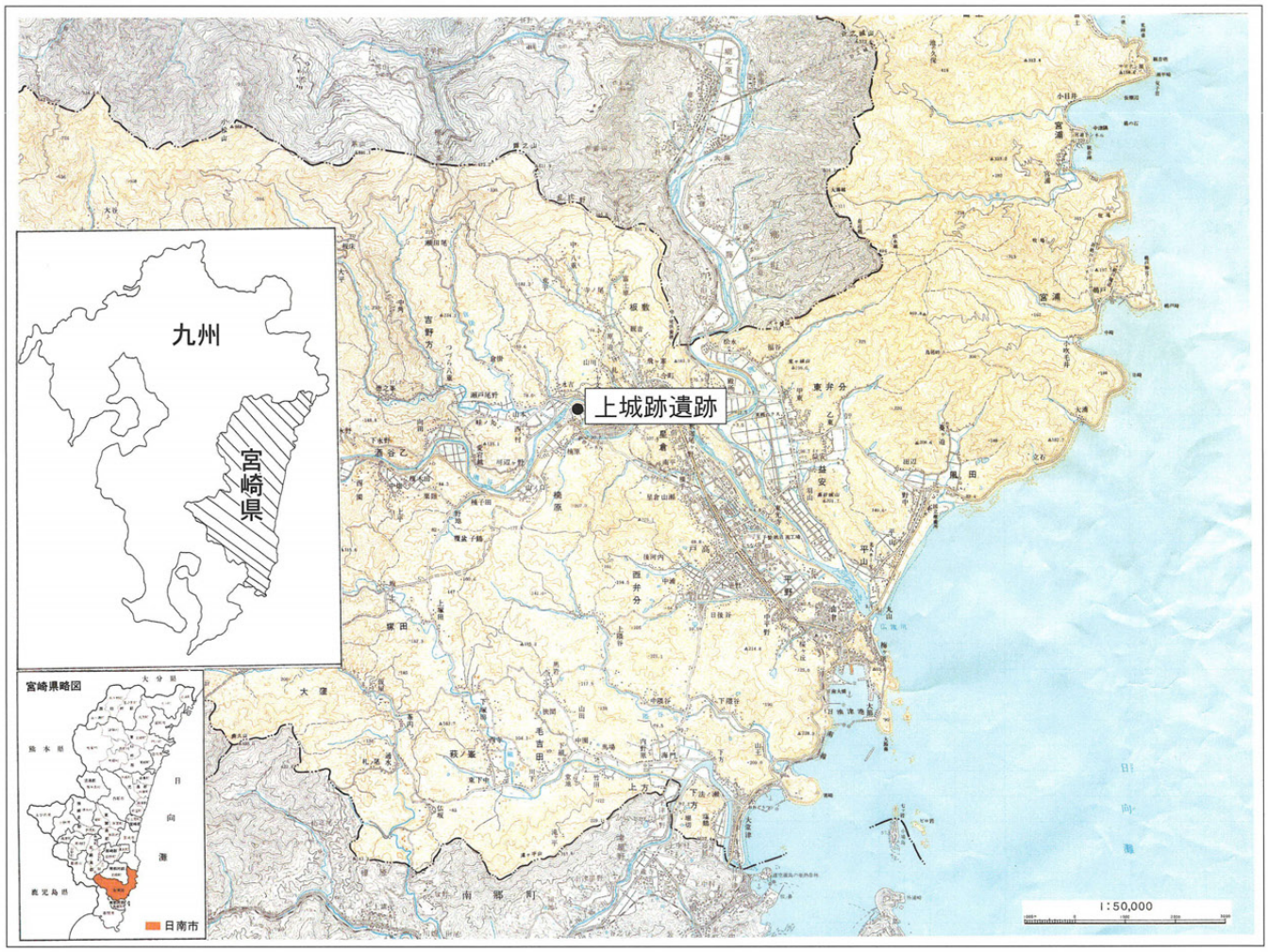
2002. 3

宮崎県日南市教育委員会

日南市埋蔵文化財調査報告書　第16集

平成13年度

上城跡遺跡（うわじょうあとい せき）



２００２．３

宮崎県日南市教育委員会

上城跡遺跡　着工後　全景

Ｇ－５グリッド出土　加栗山式円筒土器

巻頭カラー（2）

確認調査時出土　大皿

巻頭カラー（3）

序

この報告書は、平成11年度に日南市環境保健課にて実施した「上城霊園整備事業」に伴う上城跡遺跡の報告書です。本調査は、環境保健課より分任を受け日南市教育委員会において実施しました。

本市においては、平成元年及び２年に遺跡詳細分布調査を実施いたしました。その後は、遺跡詳細分布図に基づき各種開発に先立ちまして確認調査を実施してまいりました。また、周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれない地域での開発につきましても、遺跡存在の可能性がある場合には、試掘調査等も実施し文化財の保護とその啓発に努めております。

これまでの主な調査実績としては、縄文時代早期の遺跡が３箇所、弥生時代の集落遺跡が２箇所、狐塚古墳、飫肥城跡などが挙げられます。

今回の調査では、遺物の面からみると縄文時代早期の貝殻文系土器が多量に検出され、それに続く縄文時代後期の市来式土器も多く検出されました。また、攪乱層からの検出が大部分をしめましたが、中・近世の陶磁器も多数検出できました。遺構としては、縄文時代早期と思われる集石遺構が３基と中世の堀立柱建物跡が７棟検出できました。縄文時代早期の貝殻文系土器が型式的に捉えられる遺跡は、この上城跡遺跡が初めてとなります。縄文時代早期の日南市を考えていく上では、貴重な資料となることが期待できます。

この報告書が、学術資料としてはもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、生涯学習や学校教育の場、地域における公民館活動の場など幅広く活用されれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本調査にあたり格別のご指導、ご助言を賜りました宮崎県文化課、宮崎県埋蔵文化財センターの方々に厚くお礼を申し上げます。

本報告書におきましては、出土いたしました「須恵器」につきまして、胎土分析を行いました。分析にあたりましては、大谷女子大学の三辻利一氏に格別のご高配とご協力を賜りました。紙面にて誠に恐縮ですが、厚くお礼申し上げます。また、調査にご支援とご理解を賜りました関係各位、地元の方々、調査及び整理作業に従事していただいた方々にも重ねてお礼を申し上げます。

平成14年３月

日南市教育長　松　田　惟　怒

例　言

1．本書は、「上城霊園整備事業」に伴い1999年に実施された埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、日南市環境保健課にて予算化され、日南市教育委員会が分任を受け行った。
3．調査の体制

〔平成11年度〕（発掘調査を実施）

調査主体	日南市教育委員会	
	教育長	倉山　久信
	社会教育課長	柳田　功
	課長補佐兼文化係長	岡本　武憲
庶務担当	教育総務課主事	崎田　弘子
調査担当	文化係主事	的場　丈明
	調査補助員	鎌田留次郎、鎌田和枝、黒木正男、黒木カヨ、田畑フミ子、前田マサ子、福田スエ、大田原俊太郎、岩永良典、谷口キヨ子、長友ヤツミ　杉元早苗、杉元香代、金丸恵美子、平川フミオ、倉元ハツエ、山室　光（福岡大学学生）他

〔平成12年度〕（整理作業）

調査主体	日南市教育委員会	
	教育長	倉山　久信
	社会教育課長	石井　孝一
	課長補佐兼文化係長	岡本　武憲
庶務担当	教育総務課主事	古澤　ヒデ子
調査担当	文化係主事	的場　丈明
整理作業	整理作業員	貴島芳栄、谷口キヨ子、山室 光（福岡大学学生）、川瀬 真　他

〔平成13年度〕（整理作業及び報告書刊行）

調査主体	日南市教育委員会	
	前教育長	倉山　久信（平成13年９月30日　任期満了）
	教育長	松田　惟怒（平成13年10月１日　就任）
	社会教育課長	石井　孝一
	課長補佐兼文化係長	岡本　武憲
庶務担当	教育総務課主事	酒井　るみ
調査担当	文化係主事	的場　丈明
整理作業	整理作業員	貴島芳栄、谷口キヨ子　他

4．現地調査は、的場が行った。
5．現地における実測は、的場、鎌田（留）、山室、谷口が行った。
6．遺構の実測及びトレースは、的場が行った。
7．遺物の実測及びトレースは、（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
8．火山灰分析については、古環境研究所の早田勉氏に依頼し、分析を行っていただいた。
9．須恵器の胎土分析については、大谷女子大学文学部文化財学科教授の三辻利一氏に依頼し、分析を行っていただいた。
10．本書に掲載している出土遺物写真については、西大寺フォト　杉本和樹氏の撮影による。
11．空中写真撮影については、(株)スカイ・サーベイの森氏による。
12．本書における方位は真北、レベルは海抜高である。
13．出土品は、日南市教育委員会にて保管している。
14．本書の執筆編集は、的場が行った。

本　文　目　次

巻頭グラビア
巻頭カラー(1)……上城跡遺跡着工後全景
巻頭カラー(2)……Ｇ－５グリッド出土　加栗山式円筒土器
巻頭カラー(3)……確認調査時出土　大皿

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経過……3

第Ⅱ章　遺跡の概要
第１節　遺跡の立地と環境……5
１．地理的環境……5
２．歴史的環境……5
第２節　遺跡の概要……7
１．基本層序……7
２．調査区設定及び遺構……8
３．遺物……8
(1)　土器……8
(2)　石器……8

第Ⅲ章　調査
第１節　遺構……11
１．Ａ地区の遺構……11
(1)　１号堀立柱建物……19
(2)　２号堀立柱建物……19
(3)　３号堀立柱建物……19
(4)　４号堀立柱建物……19
(5)　５号堀立柱建物……19
(6)　６号堀立柱建物……24
(7)　７号堀立柱建物……24
(8)　１号集石遺構……24
(9)　２号集石遺構……24
(10)　３号集石遺構……24
(11)　その他……24
２．Ｂ地区の遺構……25
第２節　遺物……32
１．Ａ地区の遺物……32
(1)　土器……32
(2)　陶磁器……45

⑶　石器……49
2．Ｂ地区の遺物……50

第Ⅳ章　自然科学分析
第１節　火山灰分析……56
1．はじめに……56
2．屈折率測定……56
⑴　測定試料と測定方法……56
⑵　測定結果……56
第２節　古式須恵器の蛍光Ｘ線分析……59
1．はじめに……59
2．分析法……59
3．分析結果……60

第Ⅴ章　まとめにかえて
第１節　遺構……67
第２節　遺物……67

挿　図　目　次

第１図　上城跡遺跡位置図……1
第２図　上城跡遺跡トレンチ位置図……3
第３図　上城跡遺跡基本土層図……7
第４図　上城跡遺跡周辺地形図……9
第５図　上城跡遺跡調査区設定図……10
第６図　上城跡遺跡Ａ地区遺構配置図……12
第７図　上城跡遺跡Ａ地区出土遺物分布図……13
第８図　上城跡遺跡Ａ地区出土土器分布図……14
第９図　上城跡遺跡Ａ地区出土石器及び石等分布図……15
第10図　Ａ地区堀立柱建物配置図〔Ｓ＝１／200〕……16
第11図　Ａ地区堀立柱建物配置図（その１）１号、２号、５号、７号堀立柱建物〔Ｓ＝１／50〕……17
第12図　Ａ地区堀立柱建物配置図（その２）３号、４号、６号堀立柱建物〔Ｓ＝１／50〕……18
第13図　１号堀立柱建物実測図〔Ｓ＝１／40〕……20
第14図　２号堀立柱建物実測図〔Ｓ＝１／40〕……21
第15図　３号堀立柱建物実測図〔Ｓ＝１／40〕……22
第16図　４号堀立柱建物実測図〔Ｓ＝１／40〕……23
第17図　５号、６号及び７号堀立柱建物実測図〔Ｓ＝１／40〕……26
第18図　Ａ地区集石遺構配置図……27
第19図　１号、２号集石遺構実測図〔Ｓ＝１／10〕……28
第20図　３号集石遺構実測図〔Ｓ＝１／10〕……29

第21図　A地区G－5グリッド土層断面図……30
第22図　A地区出土遺物（その1）……31
第23図　A地区出土遺物（その2）……33
第24図　A地区出土遺物（その3）……34
第25図　A地区出土遺物（その4）……36
第26図　A地区出土遺物（その5）……38
第27図　A地区出土遺物（その6）……41
第28図　A地区出土遺物（その7）……42
第29図　A地区出土遺物（その8）……44
第30図　A地区出土遺物（その9）……46
第31図　A地区出土遺物（その10）……47
第32図　A地区出土遺物（その11）……51
第33図　A地区出土遺物（その12）……52
第34図　テフラ分析用試料採取地点……57
第35図　狐塚古墳出土古式須恵器の両分布図……63
第36図　狐塚古墳出土古式須恵器の判別図……64
第37図　上城跡遺跡及びその他の遺跡出土古式須恵器の両分布図……65
第38図　上城跡遺跡及びその他の遺跡出土古式須恵器の判別図……66

表　目　次

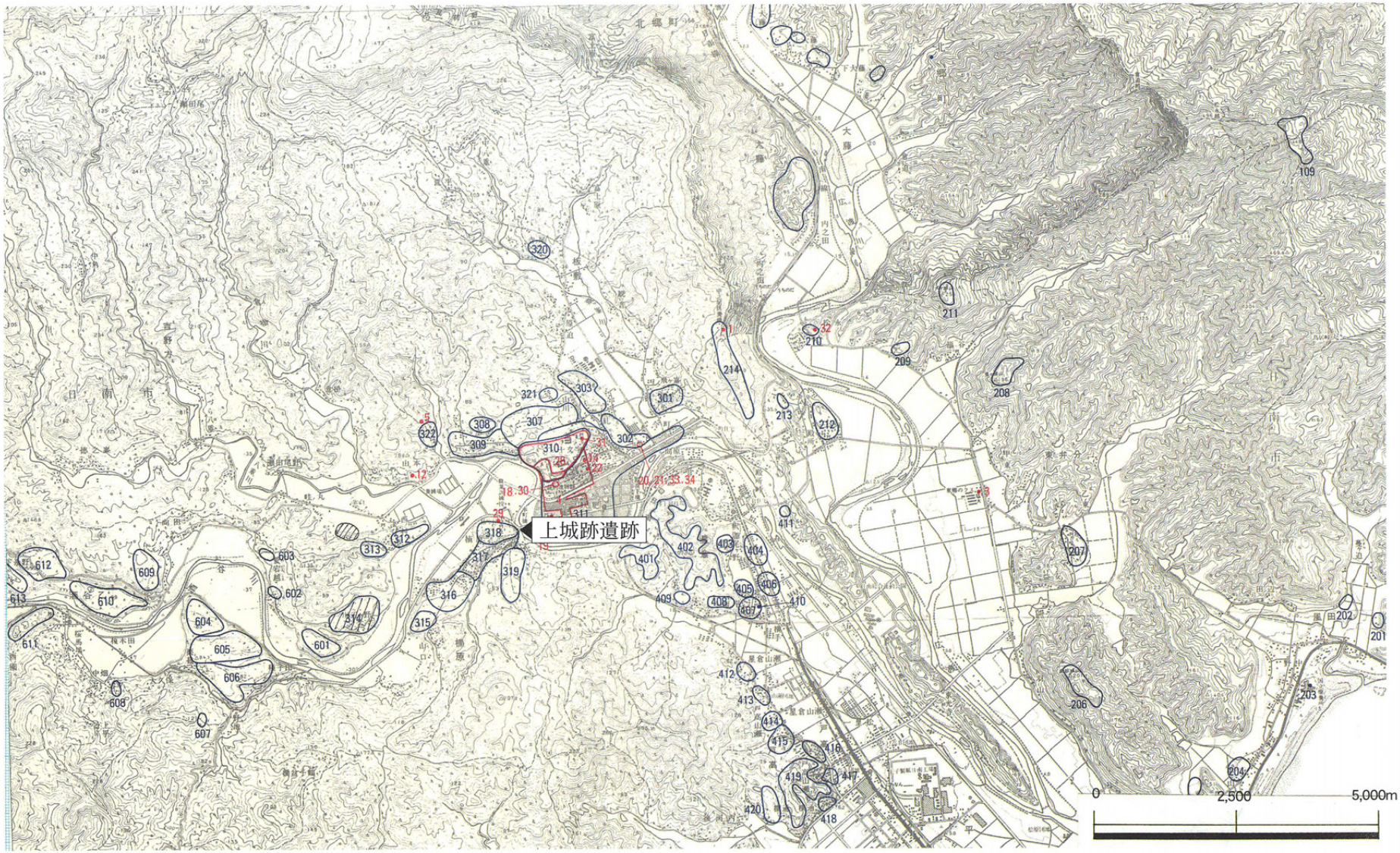
第1表　遺跡番号及び遺跡名対照表……2
第2表　堀立柱建物　一覧表……19
第3表　出土遺物観察表（土器その1）……53
第4表　出土遺物観察表（土器その2）……54
第5表　出土遺物観察表（土器その3）……55
第6表　出土遺物観察表（石器）……55
第7表　古式須恵器の分析データ　一覧表……62

図　版　目　次

図版1　大皿確認調査時出土状況……4
図版2　テフラ分析用試料採取状況……58
図版3　上城跡遺跡　着工前　全景……70
図版4　上城跡遺跡　A地区着工前……70
図版5　上城跡遺跡　着工後　全景……71
図版6　上城跡遺跡　A地区着工後……71
図版7　A地区　樹根等除去作業状況……72
図版8　B地区　遺構・遺物検出状況……73
図版9　A地区　Ⅰ層目　遺物検出状況（その1）……74

図版10　Ａ地区　Ｉ層目　遺物検出状況（その２）……75
図版11　Ａ地区　Ｉ層目　遺物検出状況（その３）……76
図版12　Ａ地区　Ｉ層目　遺物検出状況（その４）……77
図版13　Ａ地区　Ｉ層目　遺物検出状況（その５）……78
図版14　Ａ地区　ピット群検出状況……79
図版15　Ａ地区　ピット群検出作業風景……80
図版16　Ａ地区　ピット内遺物検出状況……81
図版17　Ａ地区　１号堀立柱建物及び２号堀立柱建物……82
図版18　Ａ地区　１号堀立柱建物及び２号堀立柱建物……83
図版19　Ａ地区　３号堀立柱建物及び４号堀立柱建物……84
図版20　Ａ地区　３号堀立柱建物及び４号堀立柱建物……85
図版21　Ａ地区　１号集石遺構及び２号集石遺構検出状況（その１）……86
図版22　Ａ地区　１号集石遺構及び２号集石遺構検出状況（その２）……87
図版23　Ａ地区　３号集石遺構検出状況……88
図版24　Ａ地区　Ｇ－５グリッド　遺物検出状況（その１）……89
図版25　Ａ地区　Ｇ－５グリッド　遺物検出状況（その２）……90
図版26　Ａ地区　Ｇ－５グリッド　完堀状況……91
図版27　Ａ地区　Ｇ－５グリッド　土層断面……92
図版28　Ａ地区出土遺物（その１）……93
図版29　Ａ地区出土遺物（その２）……94
図版30　Ａ地区出土遺物（その３）……95
図版31　Ａ地区出土遺物（その４）……96
図版32　Ａ地区出土遺物（その５）……97
図版33　Ａ地区出土遺物（その６）……98
図版34　Ａ地区出土遺物（その７）……99
図版35　Ａ地区出土遺物（その８）……100
図版36　Ａ地区出土遺物（その９）……101
図版37　Ａ地区出土遺物（その10）……102

上城跡遺跡位置図



第１図

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
109	貝殻城跡	大字宮浦字鬼ヶ久保	城跡	中世	401	堰ノ尾砦跡	大字星倉字栗殿城	城跡	中世
201	万ヶ迫遺跡	大字風田字万ヶ迫	散布地	平安～中世	402	新山城跡	大字星倉字本丸他	城跡	中世
202	松ノ元遺跡	大字風田字松ノ元	散布地	縄文	403	釈迦門遺跡	大字星倉字釈迦門	散布地	中世
203	狐塚古墳	大字風田字元弓場	古墳	古墳	404	釈迦尾ヶ野遺跡	大字星倉字立久保	散布地	古墳～中世
204	木場遺跡	大字平山字木場	散布地	古墳	405	前田下遺跡	大字星倉字前田下	散布地	縄文～中世
205	駒宮遺跡	大字平山字別府	散布地	弥生～中世	406	立久保遺跡	大字星倉字立久保	散布地	中世
206	高佐砦跡	大字益安字堀之内	城跡	中世	407	上講遺跡	大字星倉字上講	散布地	縄文～中世
207	前無田遺跡	大字東弁分乙字前無田	散布地	中世	408	射場遺跡	大字星倉字南原	散布地	中世
208	鬼ヶ城跡	大字字城ヶ平地	城跡	中世	409	時任遺跡	大字星倉字石ヶ嶺	散布地	中世
209	沢渡遺跡	大字松永字沢渡	散布地	中世	410	下講古墳	大字星倉字石ヶ嶺	古墳	古墳
210	陣ヶ迫遺跡	大字松永陣ヶ迫	散布地	中世	411	川向遺跡	大字星倉字上汐浦	散布地	中世
211	犬ヶ城跡	大字松永字沢渡	城跡	中世	412	下山瀬遺跡	大字星倉字下山瀬	散布地	弥生～中世
212	殿所遺跡	大字殿所字上ノ段他	散布地	縄文～中世	413	境ヶ谷北遺跡	大字戸高字境ヶ谷	散布地	中世
213	岩ヶ尾遺跡	大字殿所字岩ヶ尾	散布地	弥生～古墳	414	境ヶ谷遺跡	大字戸高字境ヶ谷	散布地	弥生～近世
214	中ノ尾砦跡	大字殿所字城ヶ平他	城跡	中世	415	境ヶ谷南遺跡	大字戸高字境ヶ谷	散布地	中世～近世
301	飛ヶ峯遺跡	大字板敷字出水ヶ尾	散布地	古墳～中世	416	野添遺跡	大字戸高字野添	散布地	縄文～中世
302	談義所遺跡	大字今町字広木田	散布地	縄文～中世	417	和田迫遺跡	大字戸高字和田迫	散布地	弥生～中世
303	糺遺跡	大字板敷字中島田	散布地	平安～中世	418	横通遺跡	大字戸高字横通	散布地	弥生～中世
307	西山寺遺跡	大字板敷字西山寺	散布地	縄文～中世	419	縣城跡	大字戸高字古城他	城跡	縄文～中世
308	上永吉遺跡	大字吉野方字楠木原	散布地	中世	420	城之下遺跡	大字戸高字城之下他	散布地	弥生～近世
309	片平遺跡	大字吉野方字片平	散布地	縄文～中世	601	酒谷上床遺跡	大字酒谷乙字上床	散布地	縄文
310	飫肥城跡	大字楠原字舞鶴跡	城跡	中世～近世	602	鎌ヶ倉遺跡	大字酒谷乙字鎌ヶ倉	散布地	縄文～近世
311	飫肥城下町	大字楠原字板敷他	城下町	近世	603	愛宕越遺跡	大字酒谷乙字愛宕越	散布地	中世
312	篠ヶ城遺跡	大字吉野方字篠ヶ城	城跡	縄文～中世	604	宮下遺跡	大字酒谷乙字宮下	散布地	縄文～近世
313	上ノ原遺跡	大字吉野方字上ノ原	散布地	縄文～中世	605	宮ノ原遺跡	大字酒谷乙字宮ノ原	散布地	縄文～近世
314	川辺ヶ野遺跡	大字吉野方字川辺ヶ野	散布地	縄文～中世	606	種子田遺跡	大字酒谷乙字種子田	散布地	縄文～近世
315	八幡原遺跡	大字楠原字八幡原	散布地	中世	607	野地遺跡	大字酒谷乙字野地	散布地	近世
316	楠原坂ノ上遺跡	大字楠原字原坂ノ上	散布地	縄文～中世	608	下村遺跡	大字酒谷乙字下村	散布地	縄文～近世
317	諏訪ノ馬場遺跡	大字楠原字諏訪ノ馬場	散布地	縄文～中世	609	鵜戸谷遺跡	大字酒谷乙字鵜戸谷	散布地	縄文～近世
318	上城跡	大字楠原字上城	城跡	中世	610	蜂久保遺跡	大字酒谷乙字蜂久保	散布地	弥生～近世
319	大原道遺跡	大字楠原字大原道	散布地	中世	611	酒谷城跡	大字酒谷乙字城ノ下	城跡	中世
320	寺ノ尾遺跡	大字板敷字寺ノ尾	散布地	弥生～中世	612	下永野遺跡	大字酒谷乙字下永野	散布地	縄文～近世
321	堂之元遺跡	大字吉野方字堂之元	散布地	中世	613	迫間遺跡	大字酒谷乙字迫間	散布地	縄文～中世

第1表　遺跡番号及び遺跡名対照表

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経過

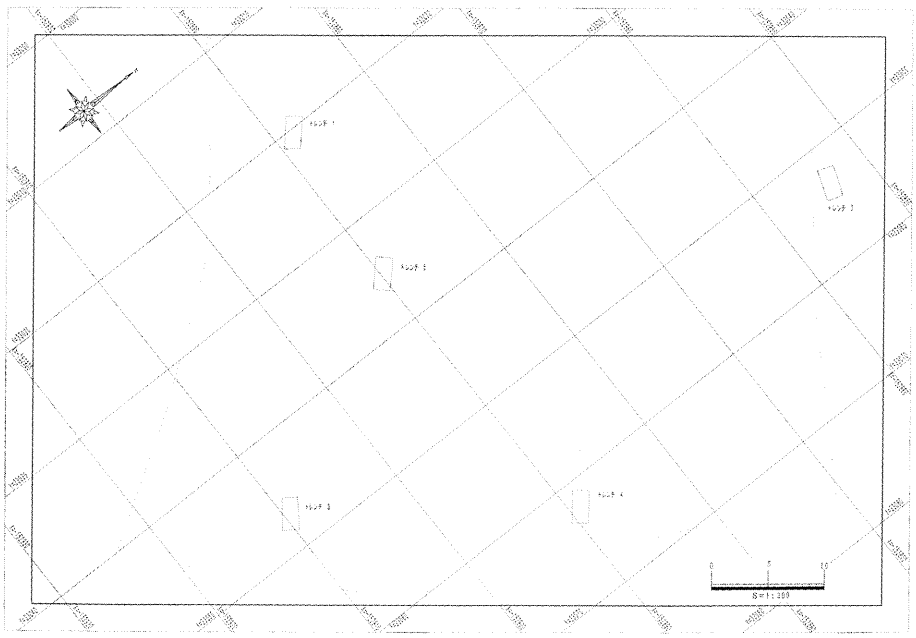
日南市においては、これまで墓地整備事業を行ってきているが、その需要が供給に追いつかない状況が続いている。こういった中、既に墓地として使用されている上城霊園の北西側の平坦地が、空地となっていたため新たに墓地を拡充整備することとなった。

今回墓地造成をすることとなった上城跡遺跡は日南市大字楠原字北平に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地318番にあたる中世の城跡である。残されている文献では、平部嶠南の「日向地誌」にその記述が見ることができる。その中では、飫肥藩伊東家の初代藩主伊東祐兵が父義祐を塔も弔うために建立した昭眼寺や安心寺などが、存在したことが伺える。安心寺は、もともとは吉野方に存在した曹洞宗安心軒を真宗に改めて建立した寺であるとの記述が残されている。また、「日向記」によると文明17年伊東祐國が１万６千の兵を率いて飫肥に出馬し、島津氏の領せし飫肥城攻めを行う際に上城に本営と築いたとの記述もある。その後も伊東氏は、島津氏と飫肥城を巡って攻防を繰り返すが、飫肥城攻めの際には上城を本営としたとの記録が残っている。

墓地造成に先だっては、遺跡の存在が充分に予想されたので、関係各課等との遺跡の保護に関する協議を行うこととした。

協議を実施するにあたり、遺跡の性格とその詳細な範囲を特定するために確認調査を行うこととした。確認調査は、平成11年４月15日～５月31日の間で実施した。調査対象地は、現状では雑木林で以前は杉林として利用されていたようである。間伐材などが切り倒され、そのまま放置されており伐採したとみられる大木の樹根もそのまま残っていた。そのため、確認調査のためのトレンチを設定する場所さえない状況であった。調査においては、まず雑木の伐採等を行い確認調査のトレンチが設定できる場所を確保することから始まった。造成の対象地は、約3500㎡の平坦地と約500㎡程の平坦地の２箇所に分かれていたが、後者は既に以前実施された墓地造成の際に丘陵の裾部を削平していたところでもあったので、確認調査からは外した。主となるエリアへは、合計で５箇所のトレンチを設定することができた。（第２図参照）

上城跡遺跡トレンチ位置図



第２図

確認調査の結果、５箇所のトレンチ全てから遺物が検出された。調査対象地は、以前の墓地造成時に既にその影響を受けており、落葉樹などが混じる第Ｉ層の下部、場所によっては、その上部からも遺物が検出された。しかしながら、トレンチNO.４においては、アカホヤ火山灰層が確認され、その下層から縄文時代早期のものと思われる貝殻文系の土器が多数検出された。

確認調査の結果、開発対象地全域に本調査の必要性があるものと判断された。この確認調査結果を基に関係課と協議を行い、本調査を実施することとなった。本調査の実施については、県文化課よりご指導いただいた。墓自体については、建築物ではなく構造物であるとの見解で地下深くに存在する埋蔵文化財については、影響はないものと理解する。従って、今回の墓地造成に関しては、埋蔵文化財に影響を及ぼす第Ｉ層に限って調査を行うことが望ましいとのことであった。しかし、今後このエリアにおいて、地下深くに影響を及ぼす開発が行われる際には存在する全ての文化層に渡って本調査が必要となるとのことであった。

図版１
大皿確認調査時出土状況

県文化課との協議内容を考慮し、関係各課と協議した結果、造成によって埋蔵文化財への影響が考えられる第Ｉ層のみに関して、本調査を行うこととした。しかし、今後予想される開発に備えて、造成対象地の一部分についてアカホヤ火山灰層下部の遺跡の性格を確認するための調査を実施することとした。

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

日南市の地形は、山地・平野・海岸から構成されている。市域の大部分を占める山地は、丘陵性山形をなし、市のほぼ中央を流れる広渡川を境として西半分と東半分に分けられる。西半分は、南那珂山地の一部を除いては、なだらかな丘陵地形を形成しているのに対して、東半分は比較的急峻な一つの独立した山地を形成しており鵜戸山塊と呼ばれている。この地形の違いは、東半分が浸食に比較的強い宮崎層群からなっているのに対し、西半分が浸食に対する抵抗力の比較的弱い日南層群から形成されていることに起因しているものと思われる。しかし、日南層群地域でも、北西部や西部の奥地となると砂岩に富む比較的堅固な地層からなっているので急峻な地形を残しており、標高千メートルに近い小松山や男鈴山等の本地域の最高峰群を形成している。

日南層群は、そのほとんどが純海成層で岩層的には砂岩層、砂岩頁岩互層、頁岩層からなり頁岩層がその大部分を占めている。日南層群下層部では、150～200メートルの厚さで頁岩を主としており、中層部は流紋岩質凝灰岩をはさむ砂岩にはじまり厚い頁岩に終わる一堆積輪廻を示し、300～500メートルの厚さに達する。上層部も砂岩にはじまり頁岩に終わる一堆積輪廻を示すが、層厚は南東部で200メートルを測り、北西部に向かい減じて100メートル以下となる。

日南層群はこれまでの産出化石から新生代古代三紀に比定され、絶対年代で3300万年前～1500万年前と考えられる。また、最近酒谷川上流や殿所等からネレイテスと呼ばれる生痕化石（TRACE　FOSSILS）の一種だと推定されるものが発見されている。これは環虫類（ごかいのようなもの）がはった跡の化石のことで、環虫類の化石を指すものではなくその這った跡（生存していた状況を示す跡）そのものを示す化石をさしてこう呼称する。

今回調査を実施した上城跡遺跡は、標高約47メートル～49メートルの中世山城跡の西側に広がるテラス状の平坦地である。周知の埋蔵文化財包蔵地として認定してある地域の主たる城跡部分は、既に墓地として造成済みであった。上城跡遺跡北側に酒谷川が流れその対岸には、飫肥城が存在する。今回調査を実施した上城跡遺跡から南西へ２キロほど離れた場所に位置する楠原坂ノ上遺跡は、平成10年度に調査を実施している。また、その楠原坂ノ上遺跡の北側酒谷川を挟んだ丘陵地には、平成８年度に調査を実施した川辺ヶ野遺跡が存在する。

２．歴史的環境

日南市内の遺跡分布調査によれば、確認されている遺跡は山間部をぬって流れる広渡川、酒谷川、細田川などの河川沿いに形成された狭い平野部に隣接する形で存在する丘陵部に多く分布するようである。また、国の伝統的建造物群保存地区に指定されている飫肥地区はその城下町全域を遺跡（311）として周知の埋蔵文化財包蔵地としている。鵜戸地区やリゾート施設の並ぶ宮浦地区などの日南海岸沿いにも、丘陵上や微高地において縄文時代などの遺跡の分布が確認される。

旧石器時代については、これまで遺跡は確認されていない。

縄文時代については、市域において約60ヶ所の遺跡が確認されている。特徴としては早期と後期の遺跡が多いことである。早期の遺跡としてこれまで５遺跡について、調査済であるが、なかでも早期の竪穴式住居跡１２軒と集石遺構19基が検出された坂ノ上遺跡（717）は、県内でも最大級の集落遺跡である。このほかの縄文時代早期の遺跡では、平成８年度に調査を実施した川辺ヶ野遺跡にて貝殻文系の土器片を検出し、遺構としても集石遺構を７基検出している。なかでも７号集石遺構はその形状が舟形を呈しており、隣県の鹿

児島県内ではいくつか検出例があるものの日南市内、南那珂地域では初めての検出となり貴重な資料といえる。縄文時代後期の遺跡としては市来式土器を中心にした後期縄文土器を多量に出土した上講遺跡（407）がある。上講遺跡では、このほか土製円盤や磨石なども出土している。これらの遺跡の他、殿所遺跡（212）や川北三遺跡（433）などが縄文時代の遺跡として確認されている。

弥生時代については、これまで16ヶ所の遺跡が確認されている。平成７年度に影平遺跡の調査を実施するまでは、弥生時代の遺跡調査では、飫肥城下町遺跡や上講遺跡などで土器等が出土していたものの住居跡等の集落遺跡は、確認されていなかった。弥生時代の遺跡は日南市域においては、段丘上や山裾の丘陵地などに限られており、低地での遺跡は、平成７年度に九州電力(株)日南営業所の新社屋建設に伴う試掘調査で、非常に状態の悪い土器片を数点検出できたことをのぞいては確認されていない。

弥生時代の遺構を伴う遺跡としては、前述のとおり平成７年度に実施した影平遺跡において、弥生時代中期の集落遺跡が検出された。同遺跡では、住居跡４軒や土坑８基を検出でき、遺物も中期の山之口式土器等の遺物を中心に瀬戸内系の鋸歯紋を有する土器　や波状紋土器、円形浮紋を有する土器、石皿、磨り石、磨製石鏃など多種多様に出土している。また、これに続く時代の遺跡として平成８年度に調査を実施した「大園遺跡」があげられるが、同遺跡からは、弥生時代終末期の住居跡や土坑が３基確認されている。また、出土遺物においては、古墳時代初頭のものと思われる遺物も多数出土している。この他、平成10年度に調査を実施した楠原坂ノ上遺跡では、遺構などは検出されていないものの弥生時代後期後葉の「下那珂式土器」のほぼ一個体分の検出がされている。

古墳時代の遺跡や墳丘で市内で確認されているものでは、県指定の細田古墳（702）と東郷古墳（008）の２基を含めた５基の古墳が存在する。油津港を見下ろす丘陵上に築かれた油津山上古墳は、日南市内では最古の古墳と考えられていたが、現在は存在しない。古墳時代終末期に至っては風田の海岸に近い砂丘上に立地し、現在は国立療養所日南病院の敷地内に存在する狐塚古墳（203）がある。この古墳については、平成６年度にその規模や性格を把握するために本調査を実施し、勾玉や切り子玉・耳環などの装飾品、辻金具・雲珠・轡などの馬具、鉄鏃・刀剣などの武具、須恵器・ハソウ・横瓶などの器類と多種多様な副葬品が検出された。中でも青銅製鋺２個や青銅製鈴３個の発見は、貴重で特に鋺についてはこれまで県内で２例の出土例が報告されているのみである。石室の大半は築造当時の原形をとどめていなかったものの残存する玄室の大きさでは、国指定特別史跡「鬼の窟古墳」や同じく特別史跡「千畑古墳」の玄室より一回り大きく県内最大であることが判明した。

横穴式石室の構築方法や出土遺物の畿内色の強いことなどを考慮していくと南九州と大和朝廷との関係を研究していく上では、非常に貴重な発見となった。

一方、日南市域では地下式横穴墓は、これまで確認されていない。また、集落遺跡も確認されていない。

奈良時代から平安時代までの遺跡は、あまり確認されていない。飫肥城下町遺跡（311）の調査で、平安時代の集落が確認されている。また、狐塚古墳（203）では石室内部を転用した形での平安時代の製塩遺構の跡が確認できる。同古墳の内部からは、布目圧痕土器片が約3,000点ほど出土している。この古墳からの出土以外では、約16ヶ所の市内に存在する遺跡から採集されている。

鎌倉時代以降は、山城を中心とした中世城館の遺跡が中心となってくる。現在約13ヶ所の山城及び城館が確認されている。飫肥城跡（310）、酒谷城跡（611）、新山城跡（402）などが代表的なものとして上げられる。

近世に入ってからは、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている飫肥城下町遺跡（311）がある。飫肥城は中世より薩摩藩島津氏と伊東氏が再三合戦を行い城主が入れ替わってきたが、伊東祐兵の入城以来は、400年間にわたり伊東氏により統治されてきた。飫肥地区には、長持寺廃寺跡（321）や大迫寺廃寺（322）などの寺院跡や大龍寺跡墓碑群、歓楽寺の墓碑群などがある。

《参考文献》
⑴『日南市埋蔵文化財調査報告書　第１集　日南市遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』日南市教育委員会1990年３月
⑵『日南市埋蔵文化財調査報告書　第２集　日南市遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』日南市教育委員会1993年３月
⑶『日南市埋蔵文化財調査報告書　第３集　飫肥城跡』日南市教育委員会　1994年３月
⑷『日南市埋蔵文化財調査報告書　第４集　日南市内遺跡発掘調査概報』日南市教育委員会　1995年３月
⑸『日南市埋蔵文化財調査報告書　第５集　上講遺跡』日南市教育委員会　1995年３月
⑹『日南市埋蔵文化財調査報告書　第６集　日南市内遺跡発掘調査概報』日南市教育委員会　1997年３月
⑺『日南市埋蔵文化財調査報告書　第７集　影平遺跡』日南市教育委員会　1997年３月
⑻『日南市埋蔵文化財調査報告書　第８集　日南市内遺跡発掘調査概報』日南市教育委員会　1998年３月
⑼『日南市埋蔵文化財調査報告書　第９集　大園遺跡』日南市教育委員会　1998年３月
⑽『日南市埋蔵文化財調査報告書　第10集　日南市内遺跡発掘調査概報』日南市教育委員会　1999年３月
⑾『日南市埋蔵文化財調査報告書　第11集　川辺ヶ野遺跡・堂之元遺跡・上鶴遺跡・木落遺跡』
日南市教育委員会　1999年３月
⑿『日南市埋蔵文化財調査報告書　第12集　日南市内遺跡発掘調査概報』日南市教育委員会　2000年３月
⒀『日南市埋蔵文化財調査報告書　第13集　日南市内遺跡発掘調査概報』日南市教育委員会　2001年３月
⒁『日南市埋蔵文化財調査報告書　第14集　楠原坂ノ上遺跡』日南市教育委員会　2001年３月
⒂『日南市史』昭和53年１月30日　日南市
⒃『日本化石集　第23集　生痕化石』
⒄『日本化石図譜』
⒅『第３版　日南市の文化財』　日南市教育委員会　2000年３月
⒆『日向地誌』　平部嶠南　1977年（復刻）　青潮社

第２節　遺跡の概要

１．基本層序

上城跡遺跡は、地質学的には日南市の西部に広がる日南層群の上部に形成され、尾鈴山系の東部に派生する丘陵地上の遺跡である。

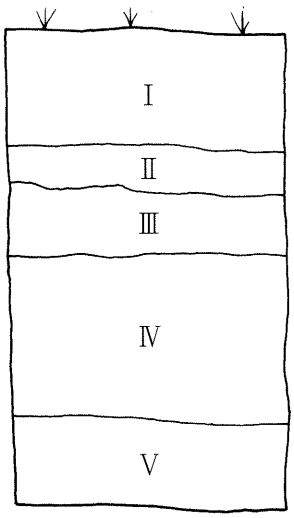
調査区は、２地区に分けられた。Ａ地区は比高差最大で約１メートル50㎝程で西側の丘陵地裾野に向かってゆるやかに傾斜する平坦地であった。確認調査では、第Ⅰ層目から遺物が出土し、20～30㎝ほどの包含層となっていた。調査場所によっては、約40～50㎝ほどの遺物包含層が確認できた。第Ⅰ層は攪乱層であったため、縄文時代後期の市来式土器、土師器、須恵器や陶磁器など多時代の遺物が同レベルで検出された。

また、その下層ではアカホヤ火山灰層も確認され、火山灰層直下の層序からも貝殻文系土器を中心とした縄文時代早期の遺物が確認された。

これに対し、Ｂ地区は既に以前の墓地造成時に削平されていたので遺物や遺構の検出は、皆無であることが予想された。

Ⅰ層：耕作土　遺物包含層　10ＹＲ　３／１　黒褐色
Ⅱ層：アカホヤ火山灰層　10ＹＲ　６／８　明黄褐色
Ⅲ層：遺物包含層　縄文時代早期　10ＹＲ　３／４　暗褐色
Ⅳ層：無遺物層　10ＹＲ　４／４　褐色　第Ⅲ層より硬い粘質土

上城跡遺跡基本土層図



第３図

Ⅴ層：粘質土　10ＹＲ　２／２　黒色

２．調査区設定及び遺構

遺跡が立地するこの丘陵地は、標高約46メートルから48メートルの間に広がる比較的フラットなエリアを持つＡ地区と一段低くなったエリアのＢ地区からなる。Ａ地区では、縄文時代の遺構として集石遺構が３基検出された。その他には、近世と思われる　堀立柱建物が７軒検出された。集石遺構は、Ｇ－５グリッド周辺に集中して検出された。１号及び２号集石遺構に関しては、検出状況からどちらかというと散石に近い形で検出された。３号集石は、構築当時の原形をとどめているものと考えられるが、１号及び２号集石遺構は、樹根などにより原型が壊された可能性が非常に高いと考えられる。（第６図参照）堀立柱建物は、Ｇ－３グリッド及びＨ－４グリッド周辺にそれぞれ集中して検出された。堀立柱建物については、遺物包含層である第Ⅰ層直下に広がる第Ⅱ層目の火山灰層（姶良入戸火山灰）上面にて検出された。結果的には、堀立柱建物として完全な形で検出されたものと不完全な形で検出したもの合わせて７軒が検出された。

Ｂ地区はＡ－３、Ｂ－２、Ｂ－３、Ｃ－２，Ｃ－３グリッドから構成される。前述したようにこのＢ地区は、以前に行われた墓地造成の際にすでに削平されており、遺構は検出されなかた。

３．遺物

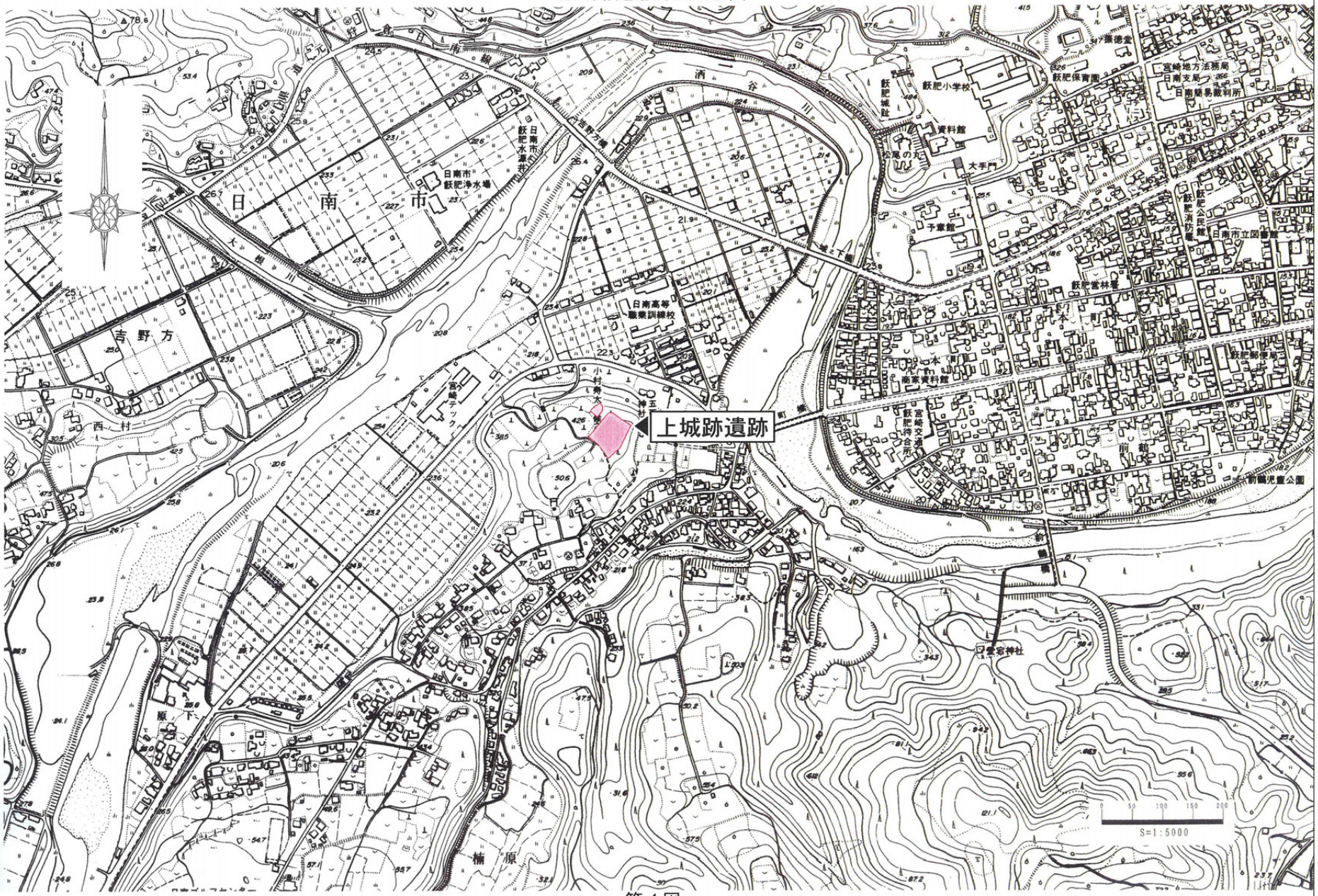
⑴　土器

上城跡遺跡では、遺物包含層の違いがもっとも明確に判別できるトレンチNO.４の土層を基本層序とした。この基本層序ではアカホヤ層の上面から中・近世の陶磁器や土師器、須恵器、縄文時代後・晩期の土器が混在して検出された。アカホヤ下位層からは、縄文時代早期の貝殻文系土器が検出された。遺物がほとんど出土しなかったＢ地区とを比較考慮すると、Ａ地区の第Ⅰ層目からは多時代の遺物が同一層から多量に検出されたこととなる。このことは、同調査地が傾斜地となっていたことと戦後の植林などに起因するのではないかと考えられる。また、上城跡遺跡は、すでにその大半が墓地として整備が終了していたため、上城跡遺跡としての城跡部分は、今回調査を実施した北西部分の一角を残すのみとなっていた。周辺の墓地区画整備の状況から推定すると調査地区自体も一部を削平され、他エリアの造成の際に、余った土砂をこのエリアへ搬入し、フラットな地形となったことが調査後の状況から容易に推定できる。従って、第Ⅰ層目に各時代の遺物が混在しているのではないかと考えられる。これに比すと第Ⅲ層目（アカホヤ火山灰層直下）では、そういった影響はないようで、検出された遺物は縄文早期の貝殻文系土器にかぎられるようである。

⑵　石器

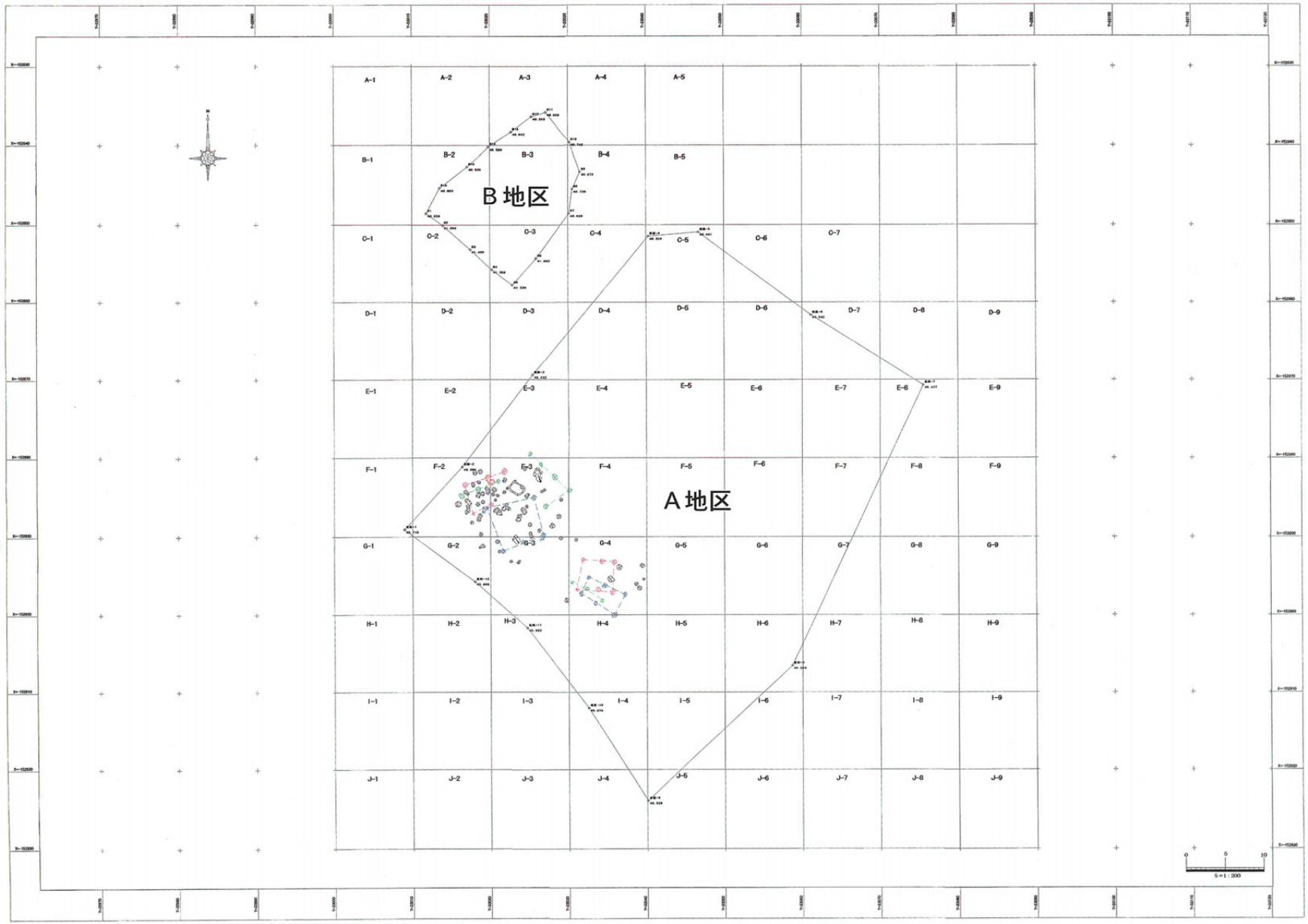
上城跡遺跡から出土した石器では、前述の土器と同様に包含層が攪乱されていたため、時代を特定するには至らなかった。主なものは、敲き石・磨石・剥片石器・石鏃未製品などである。包含層が攪乱されていたため、元位置での検出とならなかったので時代の断定は、むずかしい。が共伴している土器の大半が、縄文早期及び縄文時代後・晩期が主となっているので同様の時代であろうと考えられる。

上城跡遺跡周辺地形図



第４図

上城跡遺跡調査区設定図



第5図

第Ⅲ章　調　　査

第１節　遺構

１．Ａ地区の遺構

本調査は、平成11年６月28日から平成11年11月30日までの間で実施した。

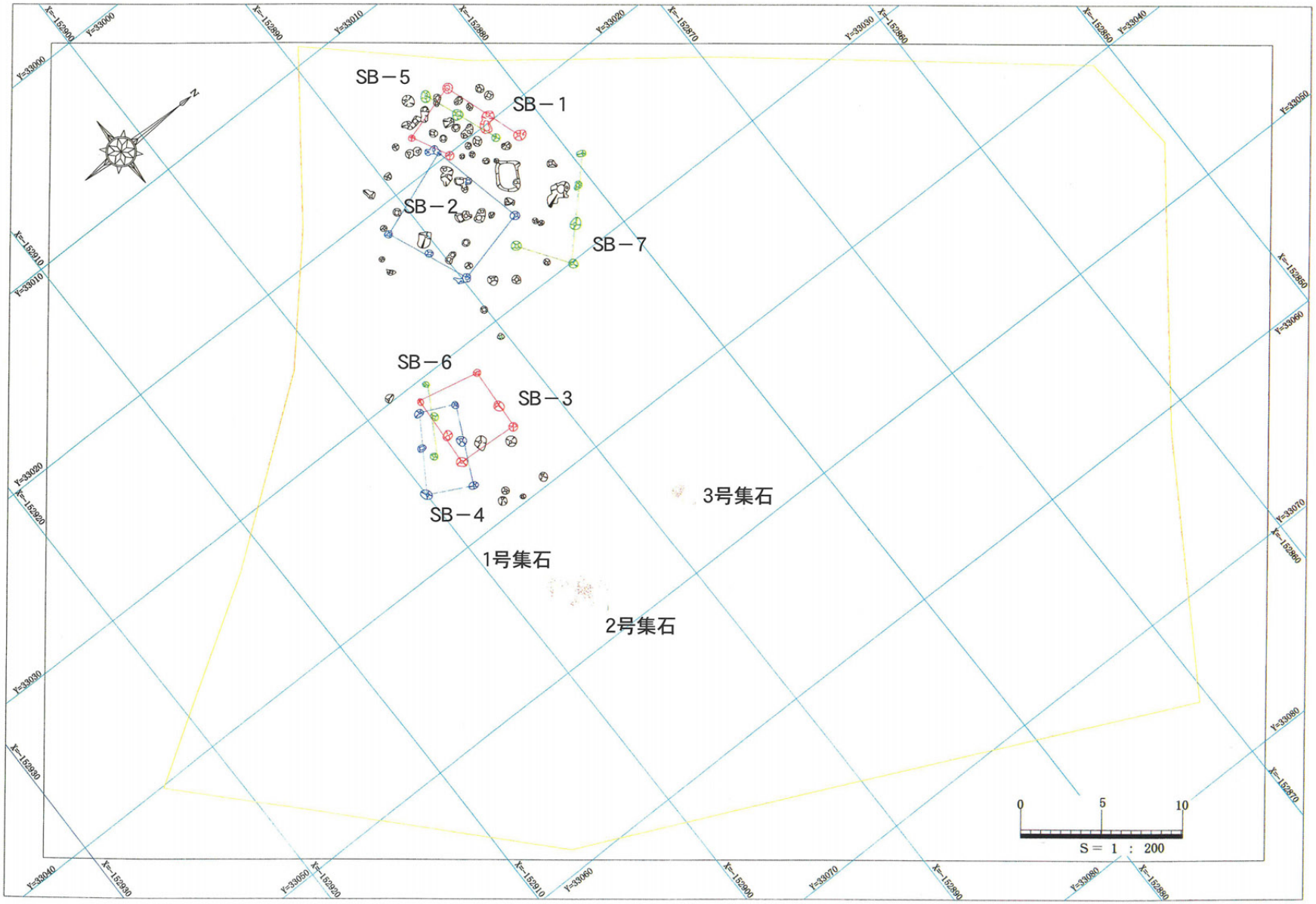
Ａ地区の調査では、先ず樹根や風倒木・雑木の撤去から始まった。風倒木や雑木の処理では、遺物包含層に影響はなかったが、杉の樹根撤去によりＡ地区の遺物包含層については、全域に渡り広範囲かつ深度に影響を及ぼされた。その状況は、後に掲載してある写真のとおりである。

この地区の杉については、耕作土の直下にやわらかい火山灰層が広がっていたため、比較的垂直方向に根を広げていたようである。調査にあたっては、杉樹根の除去を行ってからでないと調査ができない状況にあったので、重機によりすべての樹根を掘り起こす作業から始めた。残されていた樹根の大半は、樹齢40年を経過したものが多く、広く深く根を張っていた。当然、樹根と同時に掘り起こされる埋土中にも大量の遺物が包含されていた。従って、調査の次のステップとしては、樹根にまとわる埋土中の土器を検出することから始まった。樹根とともに掘り起こされた埋土中には、縄文早期の遺物から中・近世の遺物までが混在していた。

樹根除去後は、耕作土と樹根により巻き上げられた埋土が混在している状況であった。元位置ではないものが大半であったが、遺物の検出を行いつつ少しづづ掘り下げていった。調査区の南西側約半分のエリアでは、約40㎝～60㎝ほど掘り下げた時点で火山灰層が広がった。この火山灰層は、約2.4～2.5万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良入戸火砕流であることが後述の自然科学分析にて判明している。Ａ地区では、遺物包含層が攪乱層であったため、遺構はこの入戸火山灰直上にて精査し、検出することに努めた。標高約46メートル地点で、Ａ地区の南西側のみにて入戸火山灰層が検出されたことは、戦後このエリアを畑や植林地として利用するために切り土、盛り土により平坦に整地した経緯からのようである。従って、標高約46メートルで平坦に調査区を精査していくと南西側約半分のエリアで入戸火山灰が検出される。反対に同レベルにて、北東側約半分のエリアでは入戸火山灰は、検出されず46メートルより下位部に入戸火山灰が存在するようである。今回の調査では、墓地整備のため削平される部分のみの調査を実施することとした。それは、元々のグランドレベルより、約60㎝程度下がった標高約46メートル前後であったため、南西側でこの入戸火山灰が検出されたレベルまでの調査となった。よって、北東側については46メートルより深部で遺構や遺物の存在が十分予想されたものの地下の埋蔵文化財に影響を与えないという観点から調査は見合わせた。

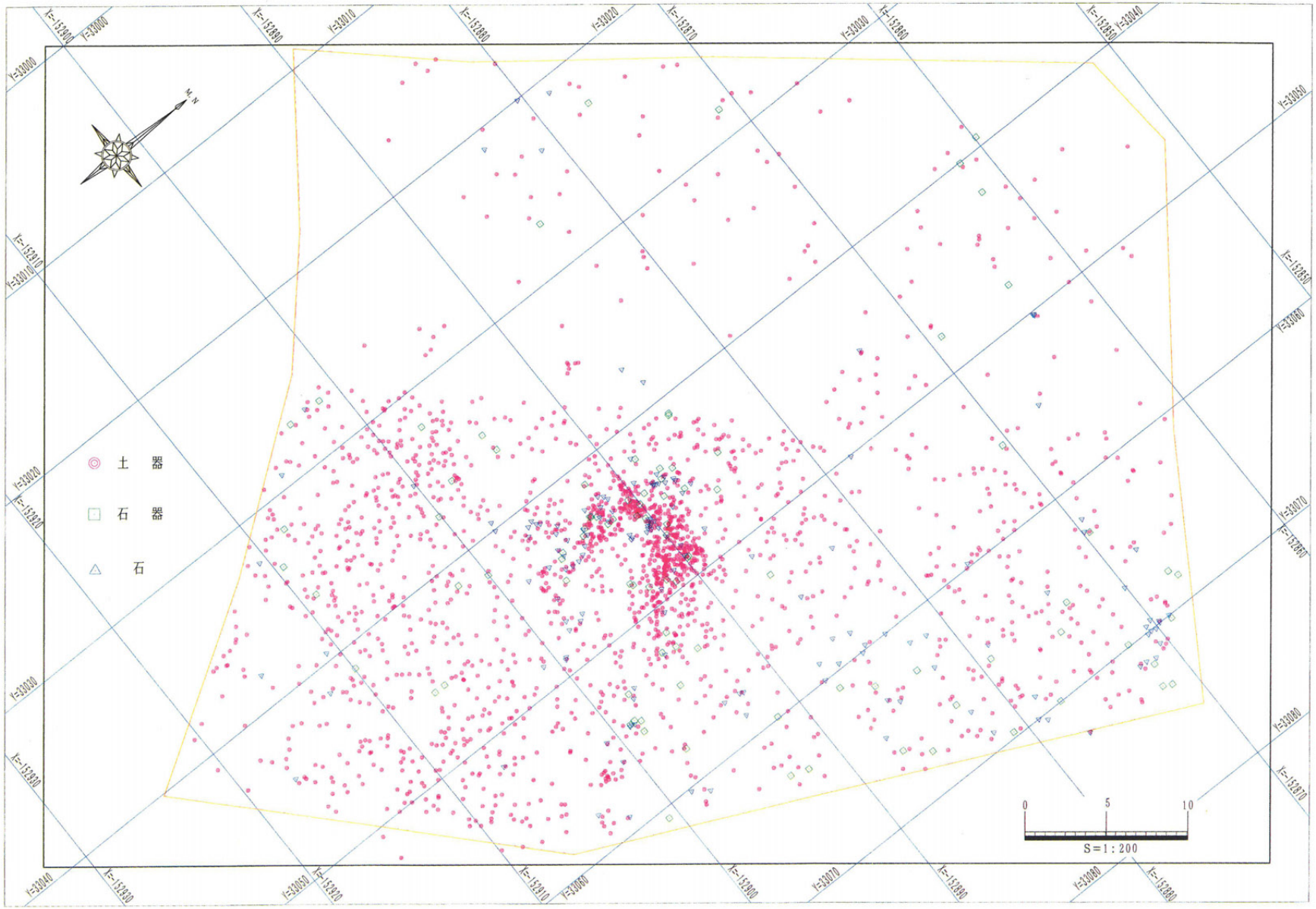
調査区の南西側では、この入戸火山灰層に堀込む状態で多数のピットを検出できた。最終的には、合計で７軒の堀立柱建物が検出された。１号堀立柱建物～４号堀立柱建物は、ピットを完全に検出できた。５号堀立柱建物～７号堀立柱建物までは、部分的な検出にとどまった。また、Ｇ－５グリッドでは３基の縄文時代早期と思われる集石遺構を検出できた。

上城跡遺跡Ａ地区遺構配置図



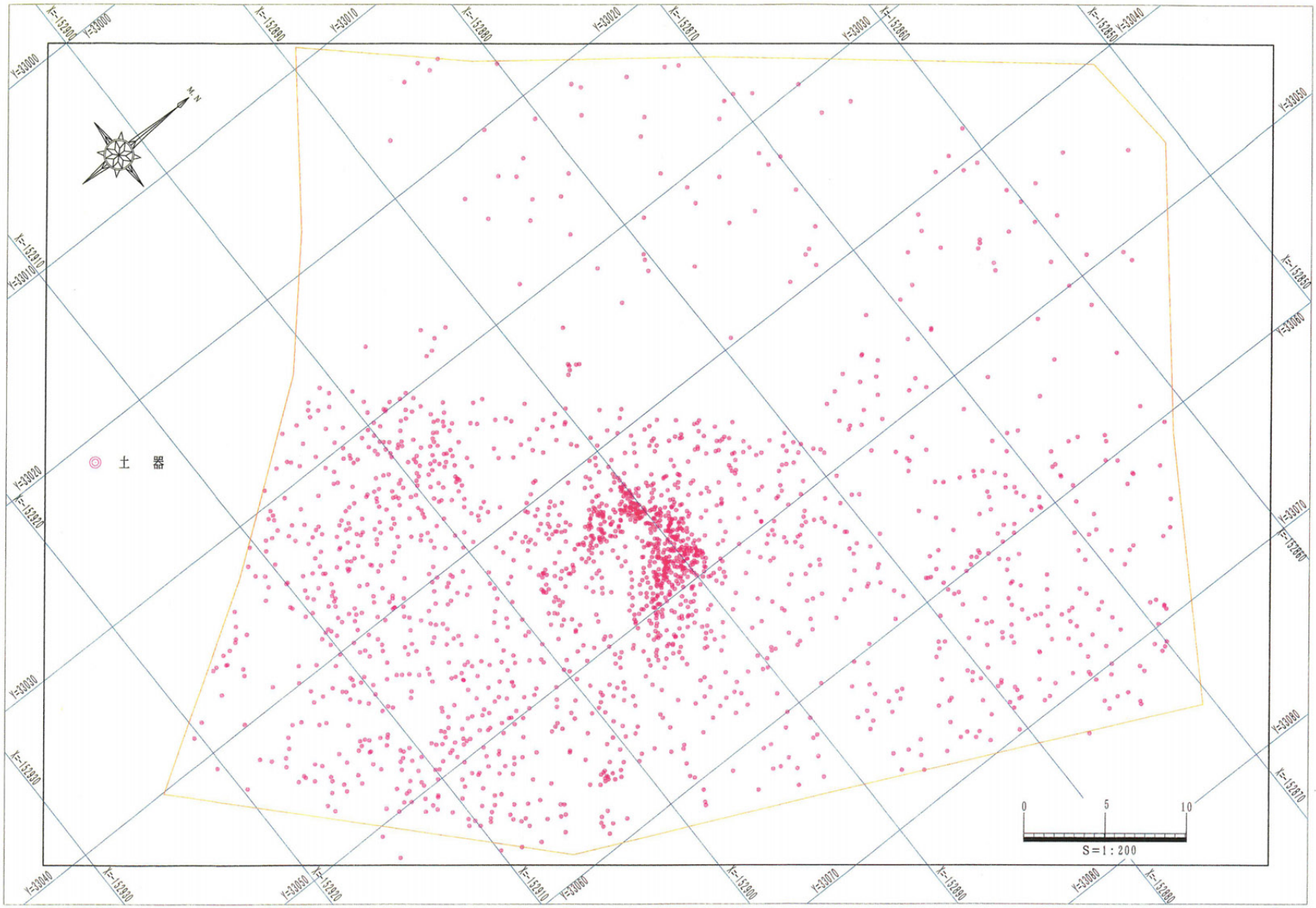
第６図

上城跡遺跡Ａ地区出土遺物分布図



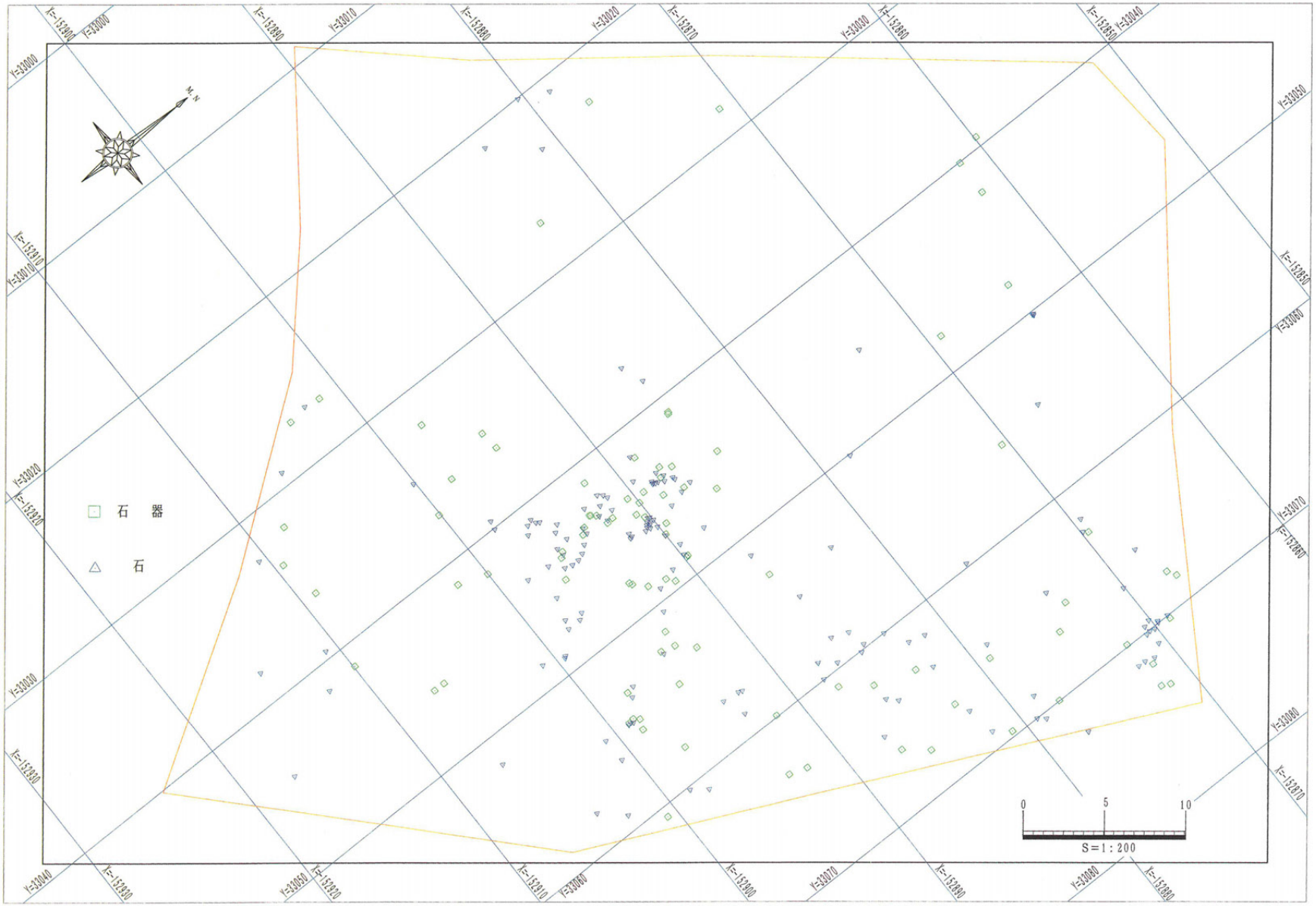
第７図

上城跡遺跡Ａ地区出土土器分布図



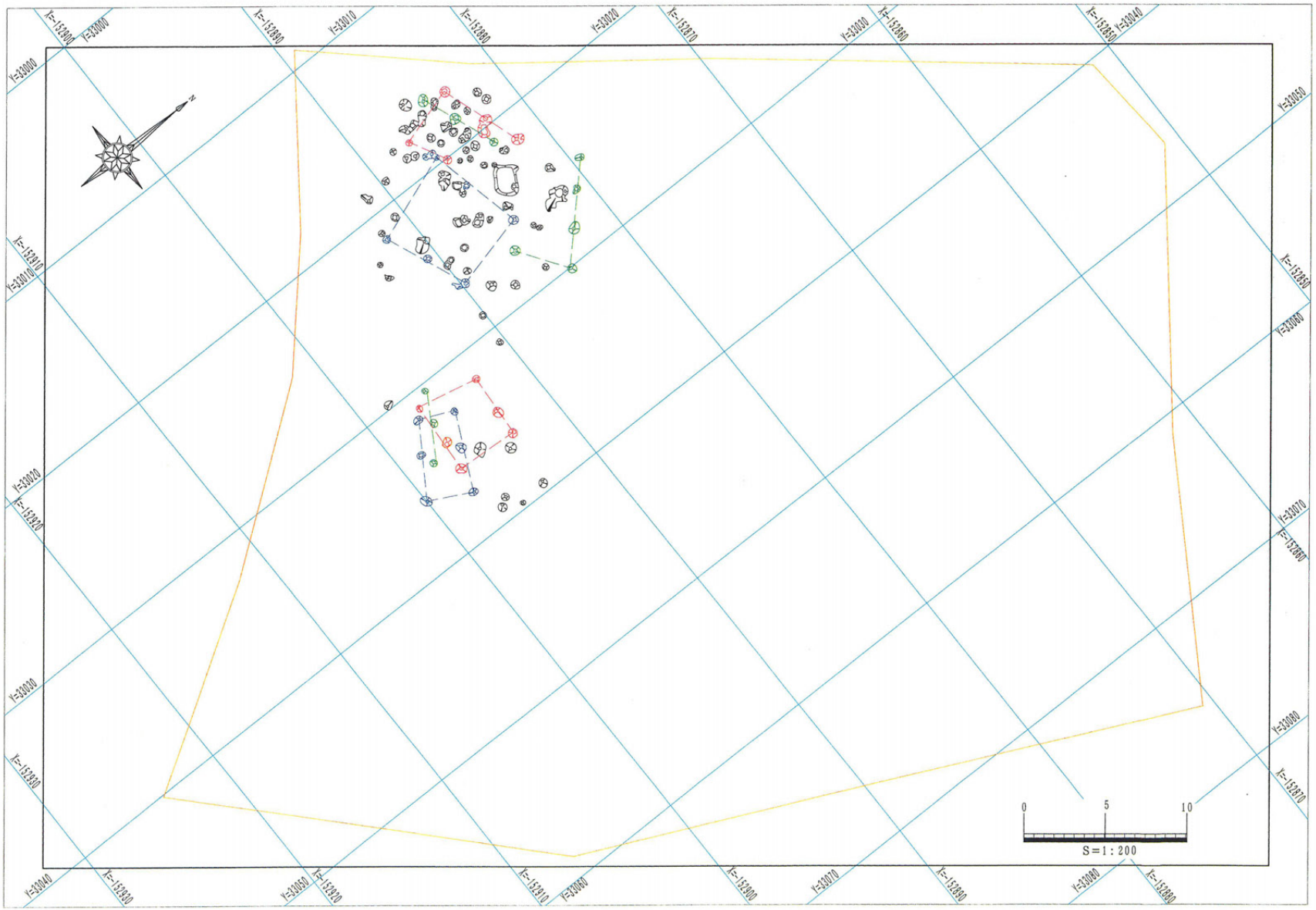
第８図

上城跡遺跡Ａ地区出土石器及び石等分布図



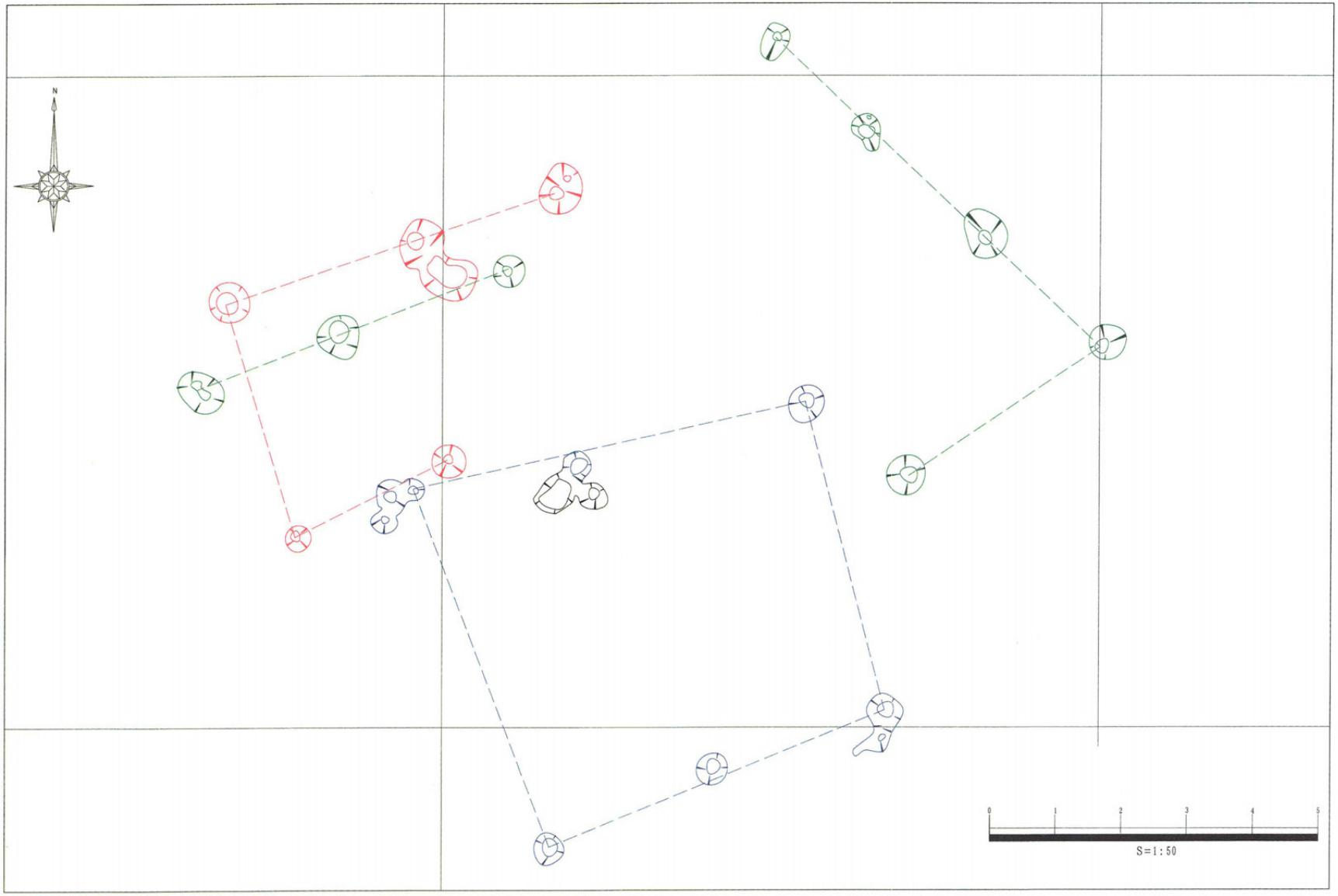
第９図

A地区堀立柱建物配置図



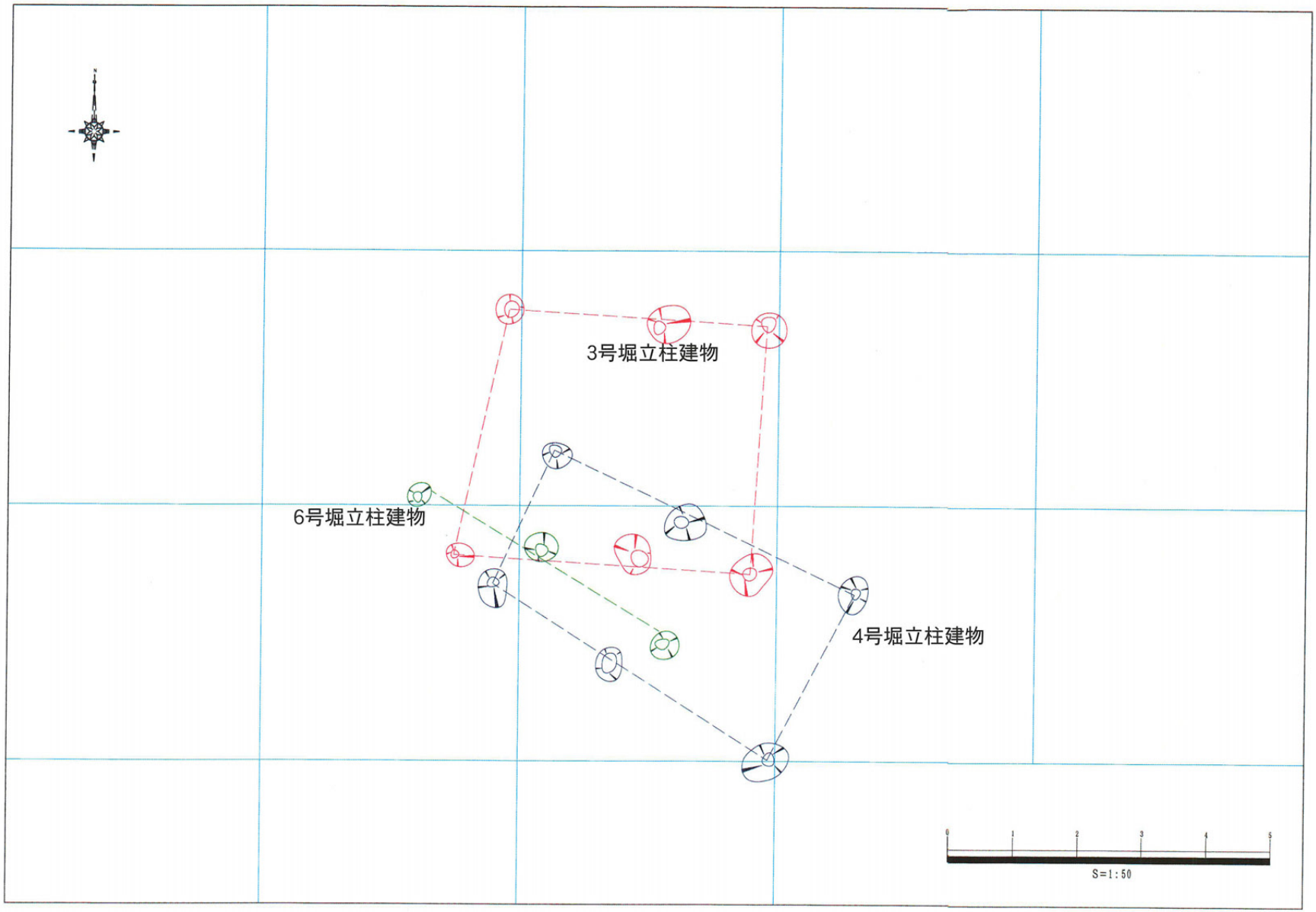
第10図

A地区堀立柱建物配置図（その１）
１号、２号、５号、７号堀立柱建物



第11図

A地区堀立柱建物配置図（その２）
３号、４号、６号堀立柱建物



第12図

(1)　1号堀立柱建物

1号堀立柱建物は、東西方向を軸棟とする1間＊2間の元来は6穴からなるであろう堀立柱建物である。南東隅に位置すべきピットについては、攪乱を受けており検出できなかった。N－71°－Eに主軸をとり桁行間5.3m、梁間3.7mを測る。柱穴は、50㎝～60㎝の円形で、深いものでも40㎝前後で、浅いものでは20㎝ほどのものも検出された。

(2)　2号堀立柱建物

2号堀立柱建物は、今回検出された堀立柱建物の中では一番規模が大きく東西方向を軸棟とする1間＊2間の堀立柱建物である。N－76°－Eに主軸をとり桁行間5.8m、梁間6.2mをを測る。6個の柱穴は、建物の規模が大きいわりには、どれも約30㎝程度のものが大半を占めた。

(3)　3号堀立柱建物

3号堀立柱建物は、東西方向を軸棟とする1間＊2間の6穴からなる堀立柱建物である。N－87°－Wに主軸をとり、桁行間4.0m、梁間4.6mを測る。柱穴の直径は、50㎝～60㎝の円形を呈し、深いものでも30㎝前後であった。

(4)　4号堀立柱建物

4号堀立柱建物は、東西方向を軸棟とする1間＊2間の6穴からなる堀立柱建物である。N－70°－Wに軸棟をとり、桁行間3.0m、梁間5.2mを測る。6個の柱穴の直径は、50㎝～65㎝程度で、その深さは浅いものは22㎝、深いものでも36㎝にとどまった。

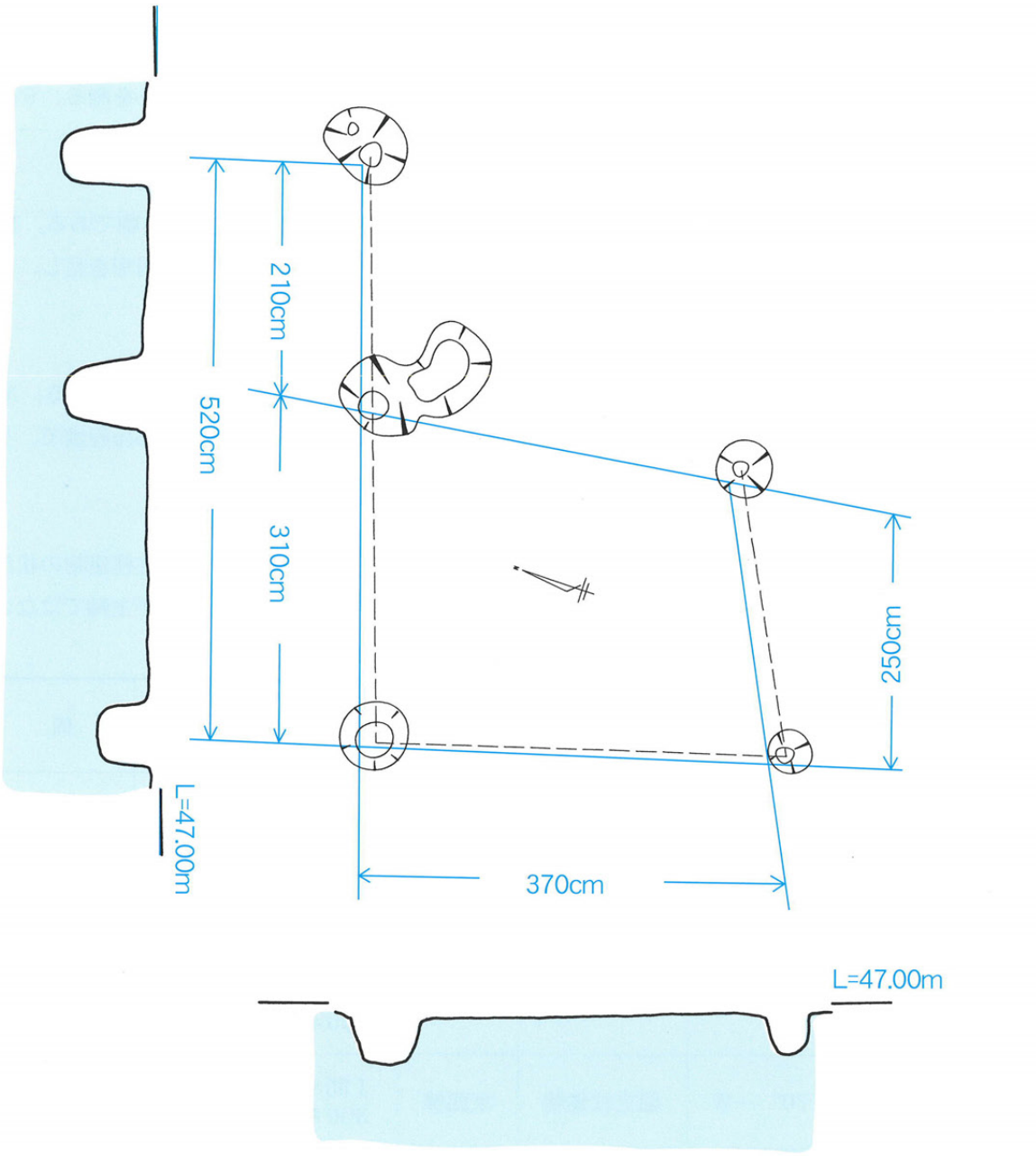
(5)　5号堀立柱建物

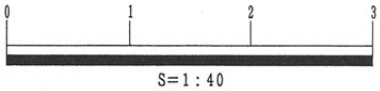
5号堀立柱建物は、建物の全容は検出できなかった。1号から4号までの堀立柱建物の状況を考えると東西方向を軸棟とするのではないかと思われる。そう仮定するとN－71°－Eが主軸ではないかと思われる。

地区	遺構番号	主　軸	種　別	形　態	規模（㎝）	分類	備　考
A	SB－1	N－71°－E	堀立柱建物	東西棟	1間＊2間 370＊530	Ⅰ型	
	SB－2	N－76°－E	堀立柱建物	東西棟	1間＊2間 580＊620	Ⅰ型	
	SB－3	N－87°－W	堀立柱建物	東西棟	1間＊2間 400＊460	Ⅰ型	
	SB－4	N－70°－W	堀立柱建物	東西棟	1間＊2間 300＊520	Ⅰ型	
	SB－5	N－71°－E	堀立柱建物	東西棟	?＊2間 ?＊500	?	
	SB－6	N－55°－W	堀立柱建物	東西棟	?＊2間 ?＊440	?	
	SB－7	N－47°－W	堀立柱建物	南北棟	1間＊3間 310＊690	Ⅱ型	

第2表　堀立柱建物　一覧表

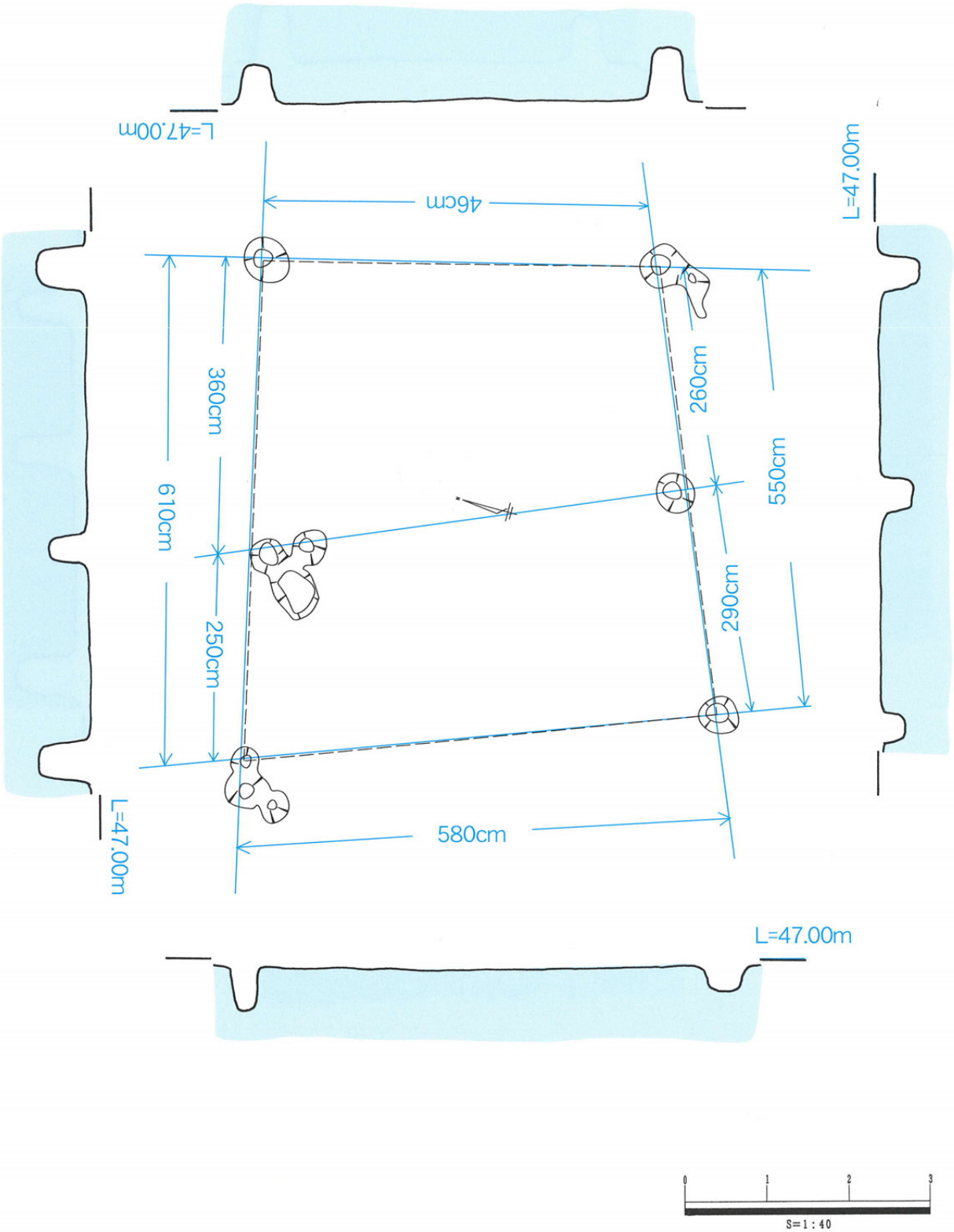
1号堀立柱建物実測図





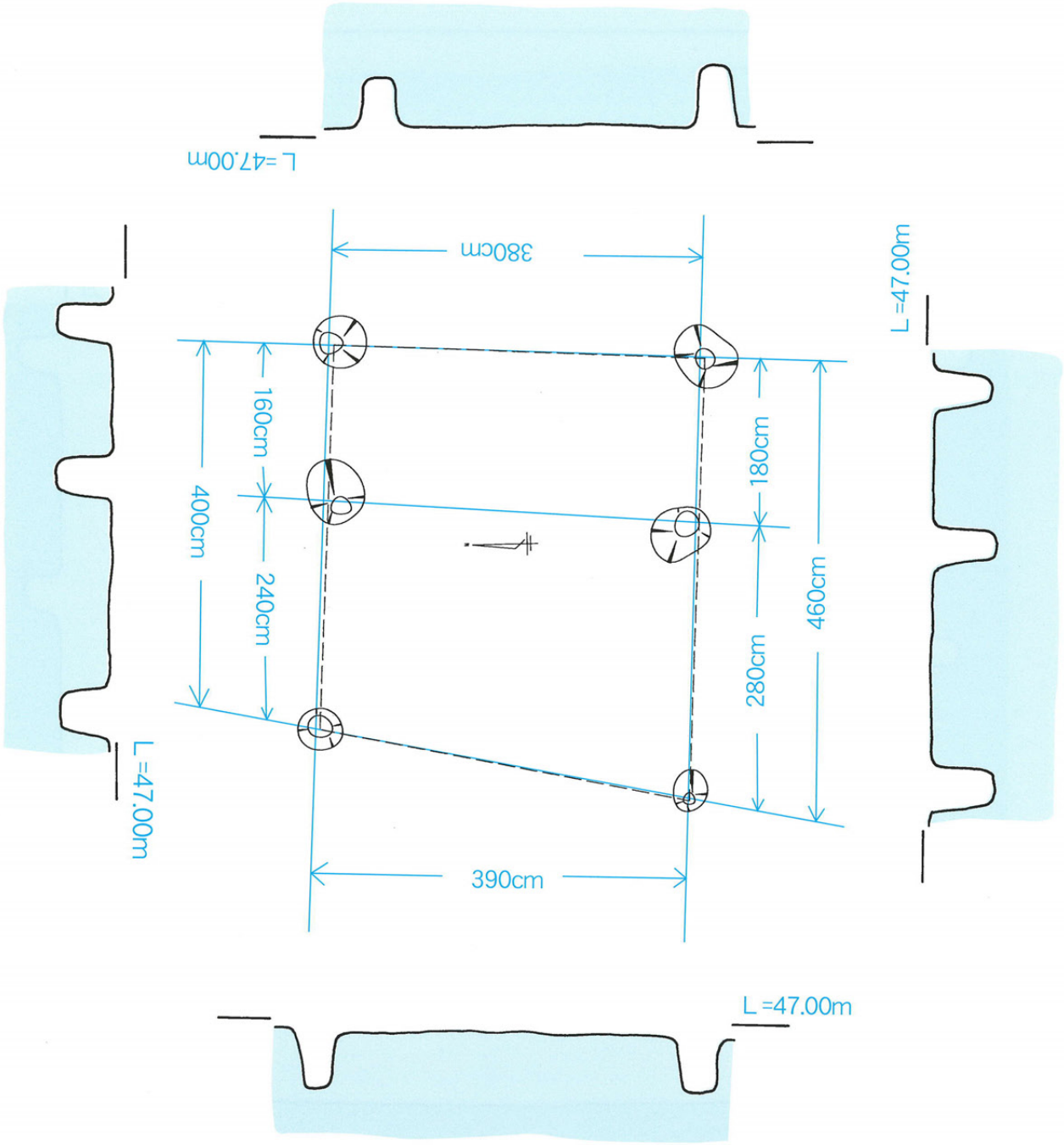
第13図

2号堀立柱建物実測図



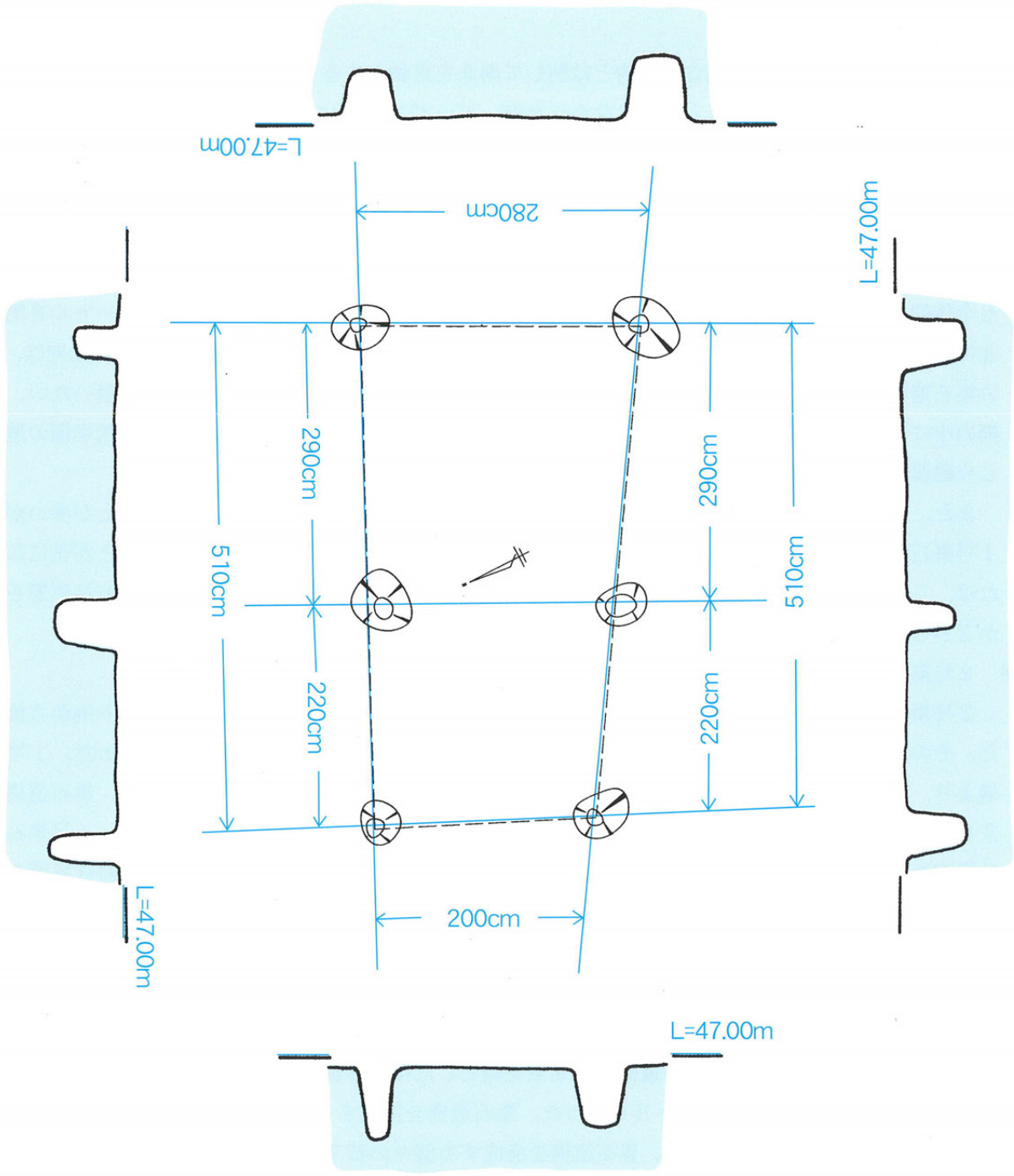
第14図

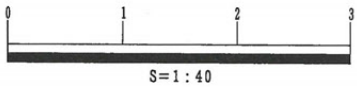
3号堀立柱建物実測図



第15図

4号堀立柱建物実測図





第16図

⑹　６号堀立柱建物

６号堀立柱建物も、５号堀立柱建物と同様に建物の全容は検出できなかった。同じく１号から４号までの堀立柱建物の状況を考えると東西方向を軸棟とするのではないかと思われる。そう仮定するとＮ－55°－Ｗが主軸ではないかと思われる。

⑺　７号堀立柱建物

７号堀立柱建物のみ他の堀立柱建物とは別して南北を東軸とする１間＊３間の形態をとる。残念ながら堀立柱建物全体を検出することはできなかったが、Ｎ－47°－Ｗに主軸をとり、桁行間6.9m、梁間3.1mを測る。柱穴の直径は、50㎝前後で深さは30㎝前後のものが大半を占めた。

⑻　１号集石遺構

１号集石遺構は、２号集石遺構と隣接する形でＡ区のＧ－５グリッドに位置する。個々の石は、おおよそ10㎝前後の大きさで火の影響による焼けた跡を推定できるものが大半を占めた。３号集石遺構と比べると全体的にまとまりはなく散石状態で検出された。その大きさは、東西に最大幅約２メートルを測り、南北に2.3メートルと楕円形を呈した。平面的には、１号集石遺構と２号集石遺構と分けたが元来は、ひとつの集石遺構であったことも推定できる。が、本報告書では、２基の集石遺構として取り扱いたい。集石遺構の中には、縄文時代早期の貝殻文系土器が数点同時に検出されている。また、縄文時代早期の遺物に混じり磁器も同レベルで検出されている。

また、３号集石遺構に比すと集石遺構は、比較的同レベルにまとまって検出されることが多いが、この１号集石遺構は、検出された個々の石についても10㎝以上のレベルのばらつきがあることが気になる。これは、この集石遺構が杉の樹根除去の際に影響を受けたか、もしくは樹根の発育の際に直接影響を受けたかどちらかによるものではないかと思われる。

⑼　２号集石遺構

２号集石遺構は、１号集石遺構のほぼ真北に位置する形でやはりＡ区のＧ－５グリッド内から検出された。その大きさは、東西に最大幅約1.3メートルを測り、南北に最大長1.5メートルを測った。１号集石遺構より、石の数はまばらで検出されたレベルも１号集石遺構と同様ばらつきがみられた。集石遺構を構成する個々の石の大きさは、最大で15㎝のものも検出されたが全体的には小振りであった。１号集石遺構と同様個々の石には焼けた痕跡を認めることができた。また、この２号集石遺構でも縄文時代早期の貝殻文系土器と磁器などが混在して検出された。

⑽　３号集石遺構

３号集石遺構は、Ａ区のＧ－５グリッド真北のＦ－５グリッドから検出された。１号、２号集石遺構と比すると原型を保った形で検出された。１号、２号集石遺構と比べると個々の石は、あまり激しく焼けた痕跡が見られなかった。３号集石遺構は、北東を軸とした楕円形を呈し、東西方向の最大幅は約60㎝で、北東を軸とする最大長は1.5メートルを測った。集石遺構を構成するここの石もほぼ同レベルで検出され、まとまった形で検出できた。また、集石遺構を構成する個々の石で大きいものでは、30㎝を越えるものもあり、全体的には15㎝から20㎝前後のもので構成されていた。共伴する遺物としては、縄文時代早期の貝殻文系土器が数点検出され、磁器などは検出されなかった。集石遺構には、敷石を有するものや堀込みを有するものなどいくつかのタイプがある。今回の調査で検出された集石遺構の中では、この３号集石遺構が一番よく原型をとどめていたが、敷石や堀込みなどは確認されなかった。

⑾　その他

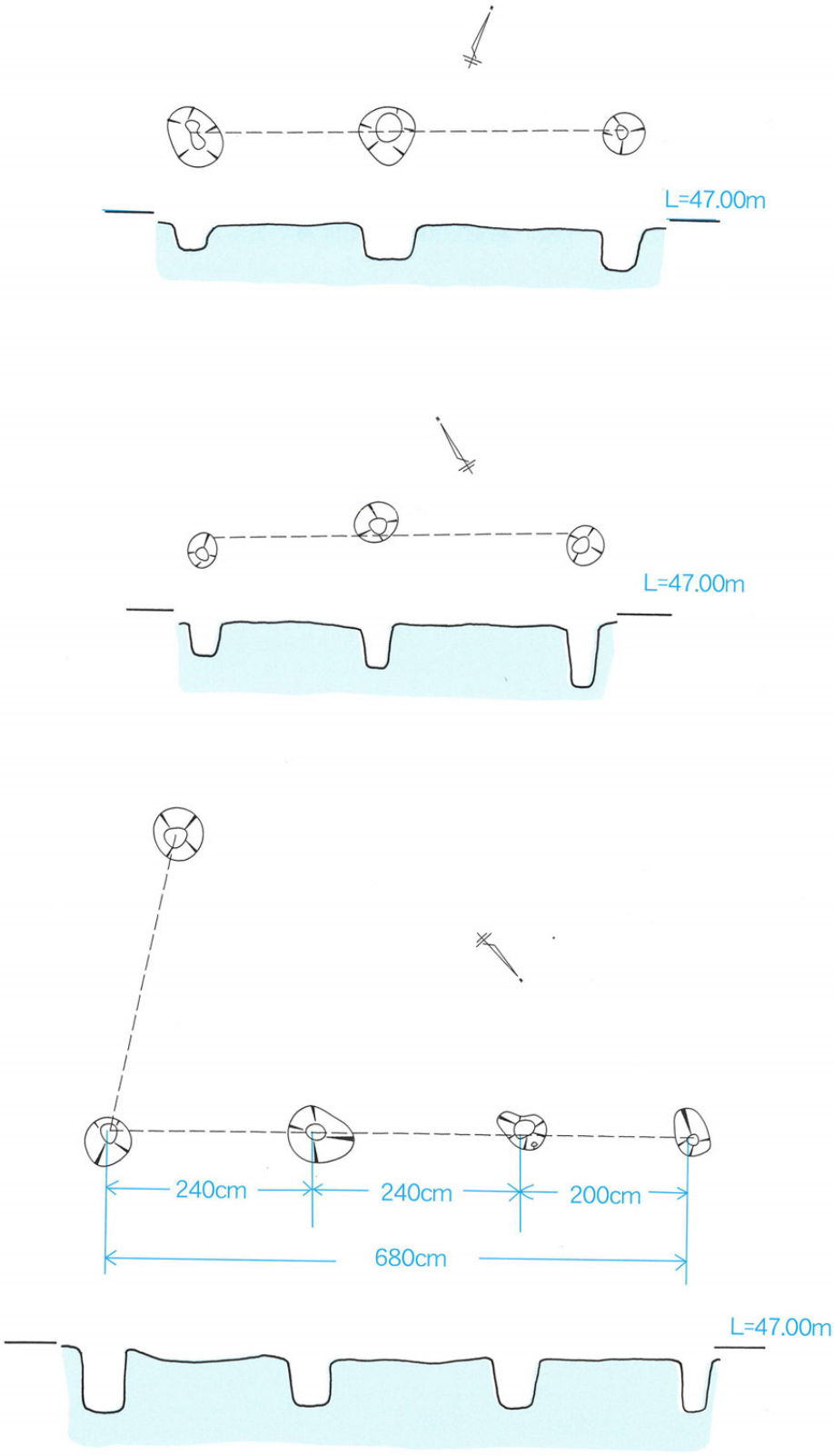
今回の上城跡遺跡調査では、中・近世の遺構や遺物の他に縄文時代後期の市来式土器や縄文時代早期の貝殻文系土器、集石遺構などが検出された。特に後者は、その内容から今後の本市の同時代の研究材料と

しては、貴重なものとなった。縄文時代の遺構・遺物については、Ｇ－５、Ｇ－６、Ｆ－５、Ｆ－６、Ｆ－７、Ｅ－６、Ｅ－７グリッドを中心として調査区の北東側（丘陵地の縁辺部）に向かって集中していた。開発により調査区全体が破壊されれば、全体を調査するところであったが墓地は、構築物であって将来的に移動が可能で、地下の埋蔵文化財に影響を及ぼすことが少ないとの観点からそれには至らなかった。しかし、将来的に埋蔵文化財に影響を及ぼすような開発が生じることを予想して、このエリアの遺跡の性格と内容を詳細に把握しておくために、一番遺物が集中して検出されたＧ－５グリッドのみ掘り下げその内容を調査した。調査の結果は、縄文時代早期の貝殻文系土器が多量に検出されたが、特に集石遺構などは他に検出されなかった。しかし、今後、墓地以外の開発行為が生じた場合は必ず本調査の必要な事は、確認できた。

２．Ｂ地区の遺構

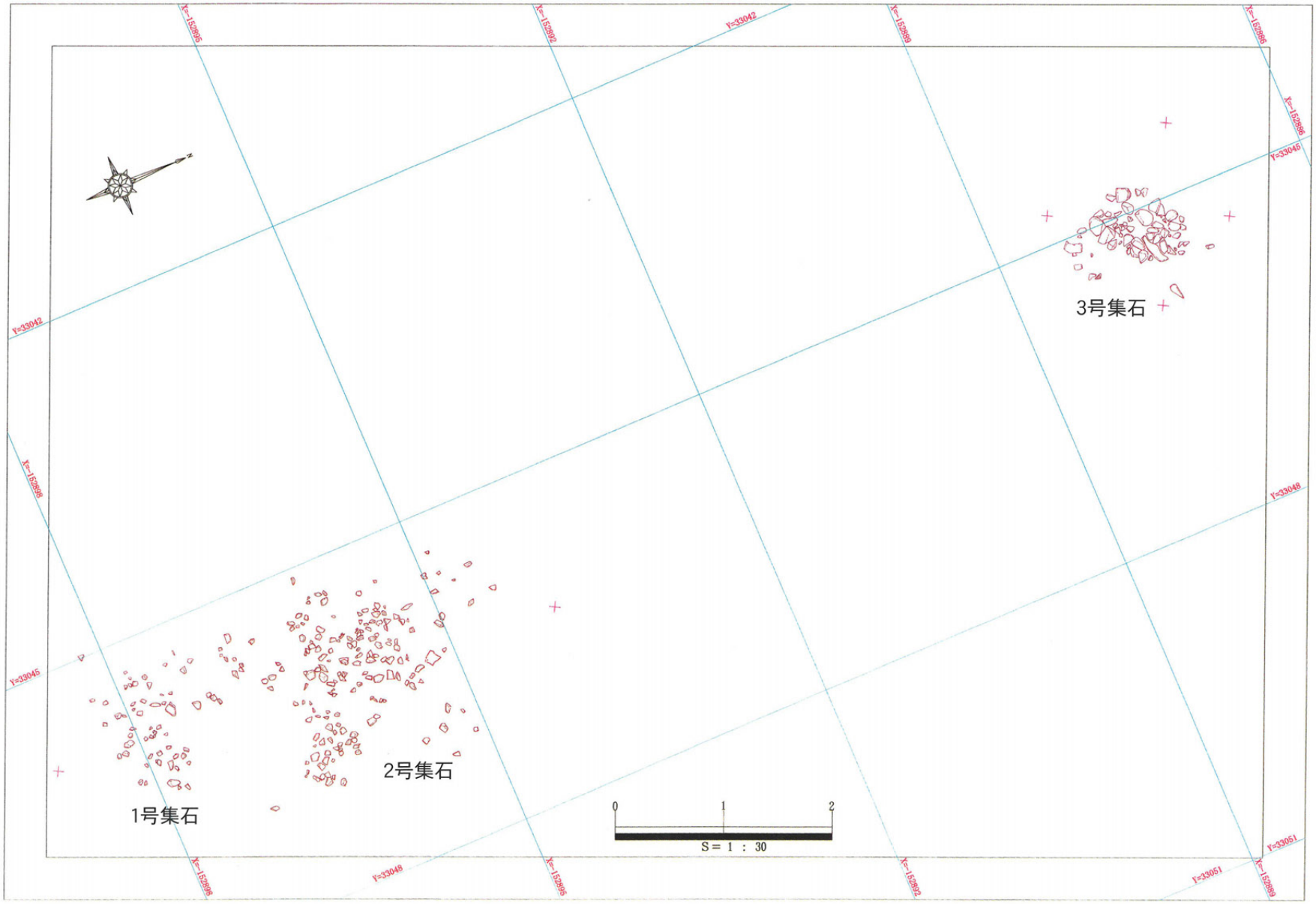
Ｂ地区での本調査では、そのほとんどが墓地造成の際に削平されていたため、遺構等は何も検出されなかった。

5号、6号及び7号堀立柱建物実測図



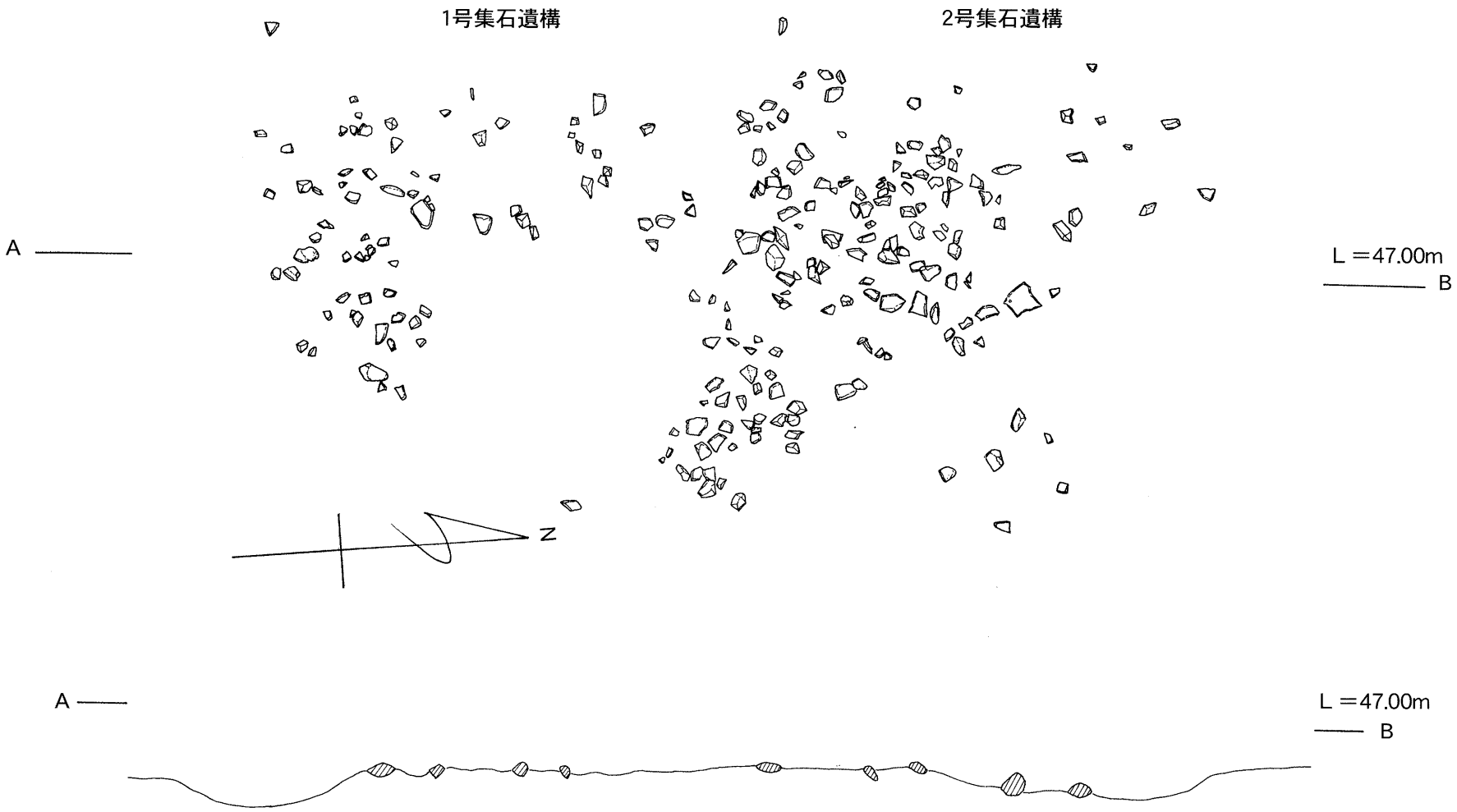
第17図

A地区集石遺構配置図



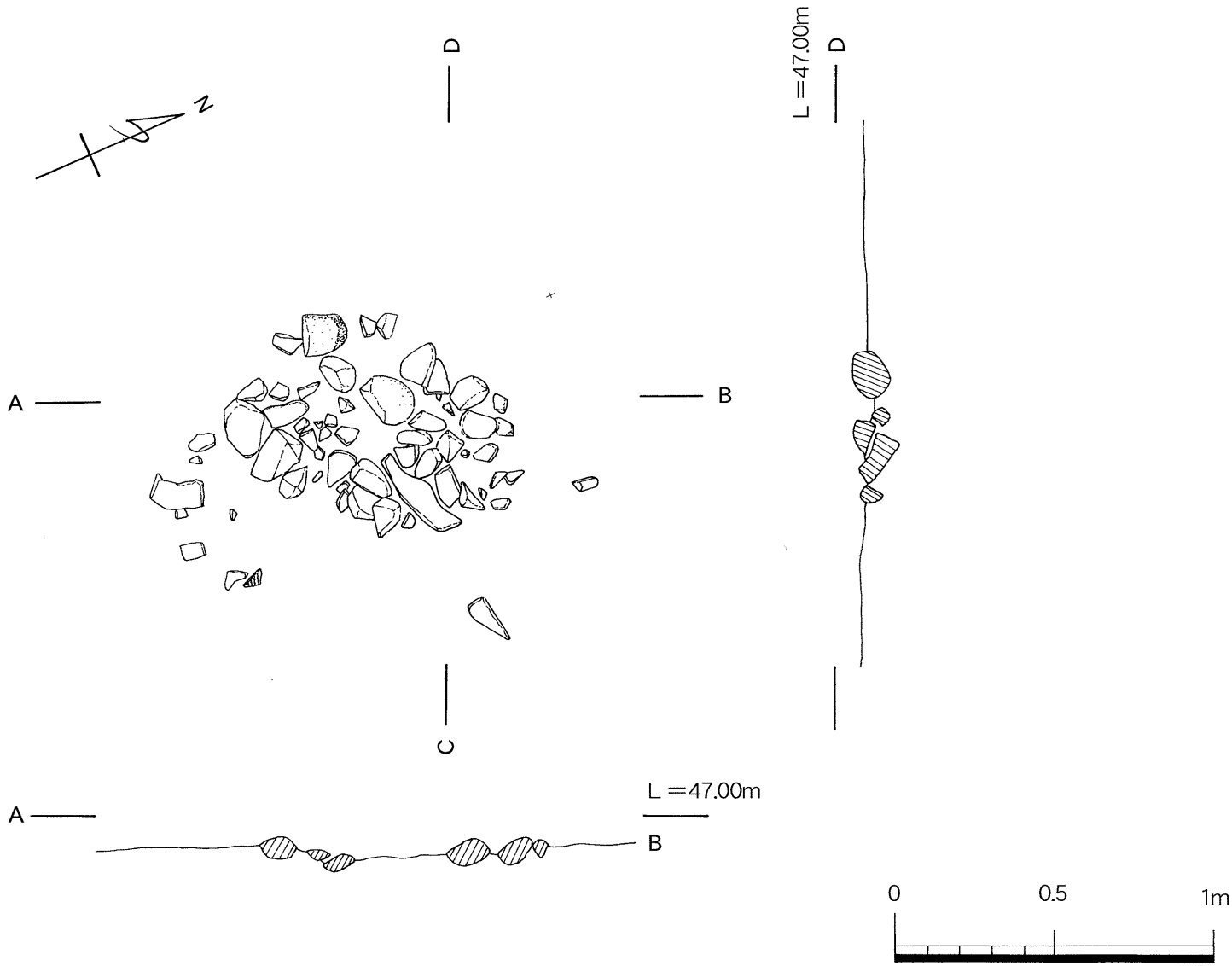
第18図

1号、2号集石遺構実測図



第19図

3号集石遺構実測図

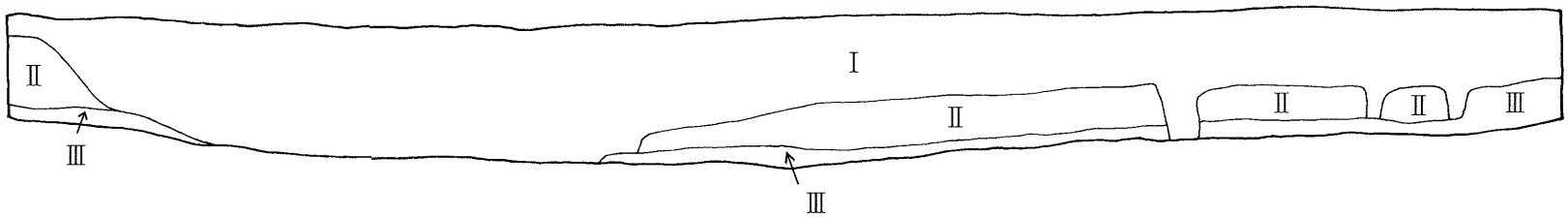


第20図

A地区G－5グリッド土層断面図

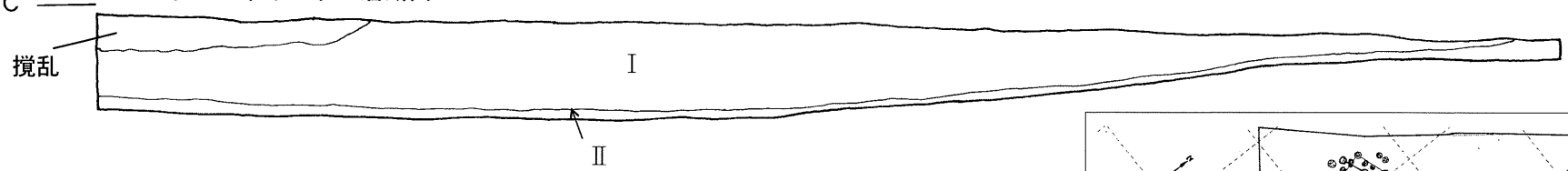
A ―― 2.5メートル・ポイント土層断面

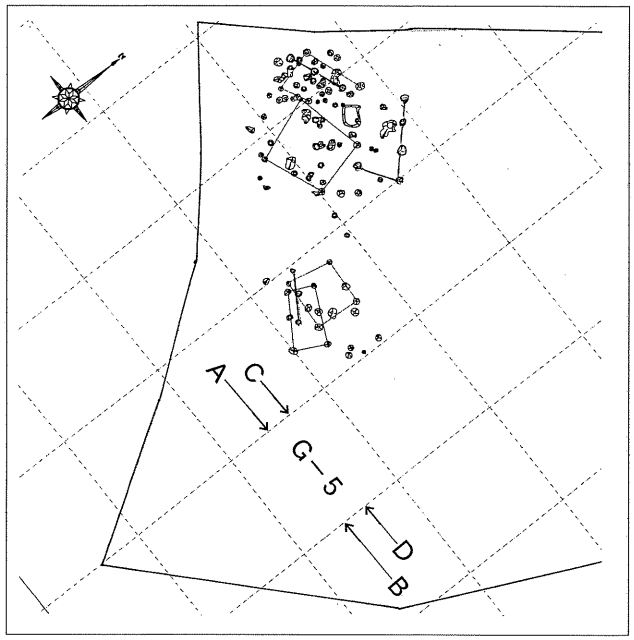
L =47.0m ―― B



C ―― 5メートル・ポイント土層断面

L =47.0m ―― D





〔G－5グリッド　2．5メートルポイント　土層注釈〕

Ⅰ：7．5YR　4／3　褐色　　遺物包含層
Ⅱ：10YR　4／4　褐色　　Ⅲ層より弱い粘質土
Ⅲ：10YR　4／4　褐色　　粘質土

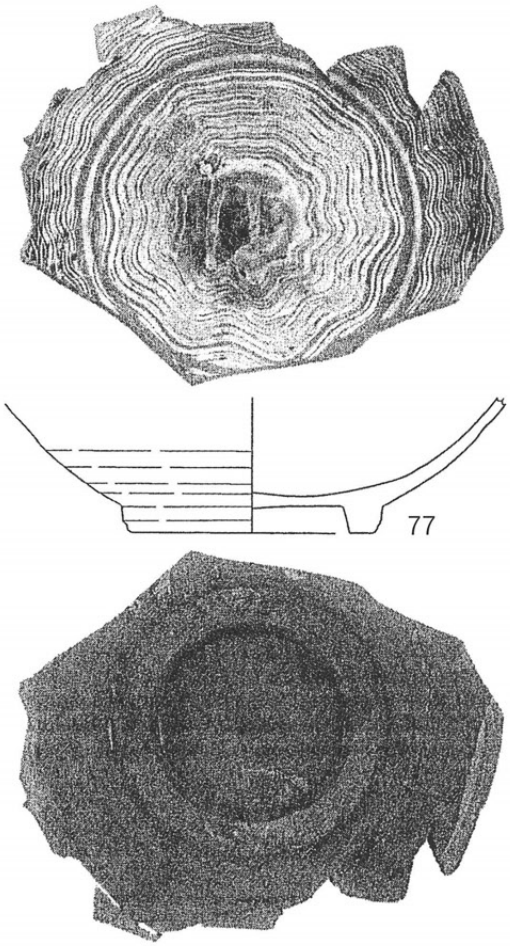
〔G－5グリッド　5メートルポイント　土層注釈〕

Ⅰ：5YR　2／1　黒褐色　柔らかい黒色土　遺物包含層
Ⅱ：7．5YR　3／2　黒褐色　　粘質土

第21図

Ａ地区出土遺物（その１）

32



77

0　　10cm

第22図

第２節　遺物

１．Ａ地区の遺物

Ａ地区から出土した遺物のほとんどは、攪乱層よりの出土であり、遺構に伴って検出されたものは皆無であった。縄文時代早期の貝殻文系土器については、Ｇ－５グリッドに比較的集中し、集石遺構も同グリッドから検出された。土師器や須恵器、中・近世の陶磁器なども多く検出された。本遺跡は、中世の城跡としての性格が強い遺跡として本調査を実施したが、結果的には縄文時代早期の貝殻文系土器が系統的に多量に出土した。縄文時代早期の貝殻文系土器が系統的に出土したとはいったものの中・近世までの遺物も一括して検出されたので、便宜的に時代毎に分類し、記述することとしたい。

⑴　土器

縄文時代早期（第22図～第28図）

Ⅰ類土器：貝殻文系角筒土器（No.１）

本遺跡からは、角筒土器はこの１点しか検出されなかった。器壁が４～５ミリと非常に薄く口唇部の狭い平坦面には、１～２ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを密に施してある。残存している破片は、四隅が山形に隆起する口縁部手前の部分ではないかと思われる。焼成は、非常に良い。口縁部直下には、隆起する角に向かって横方向の貝殻復縁による刺突線文を４列施す。その４列の刺突線文下部には、縦方向の刺突線文を１㎝間隔で施し、更に約２㎝の楔型突帯も縦位に貼り付けられる。楔型突帯の周りは、貝殻復縁により縁取る。外面、内面ともにヘラによる非常に丁寧なナデ調整が施されている。

Ⅱ類土器：貝殻文系円筒土器で押し引きを有するもの（No.２、38、39）

このタイプの土器は本遺跡からは、３点検出された。No.２は、緩やかに外反する口縁部分で口唇部には、縦方向のヘラ刻みを密に施す。その間隔は、２～３ミリ。外面の調整はわかりにくいが、内面は横方向のナデ調整を施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。その直下には、約２㎝の長さで貝殻復縁による押し引き文が連続して施され、この施文方法が数段に渡るものと考えられる。連続する押し引き文と押し引き文の間には、ヘラ状工具によるＶ字型の区切り線が付けられる。焼成は、非常に良好である。

No.38は、胴部の破片で押し引きというよりは、刺突線文が約２～３ミリ間隔で密に連続する。器壁は、No.２と比べると厚手となる。押し引きとまではいかないが、このタイプのバリエーションとしてとらえたい。外面はナデ調整。内面は、縦方向及び横方向の調整の跡が見られる。焼成は、良好である。

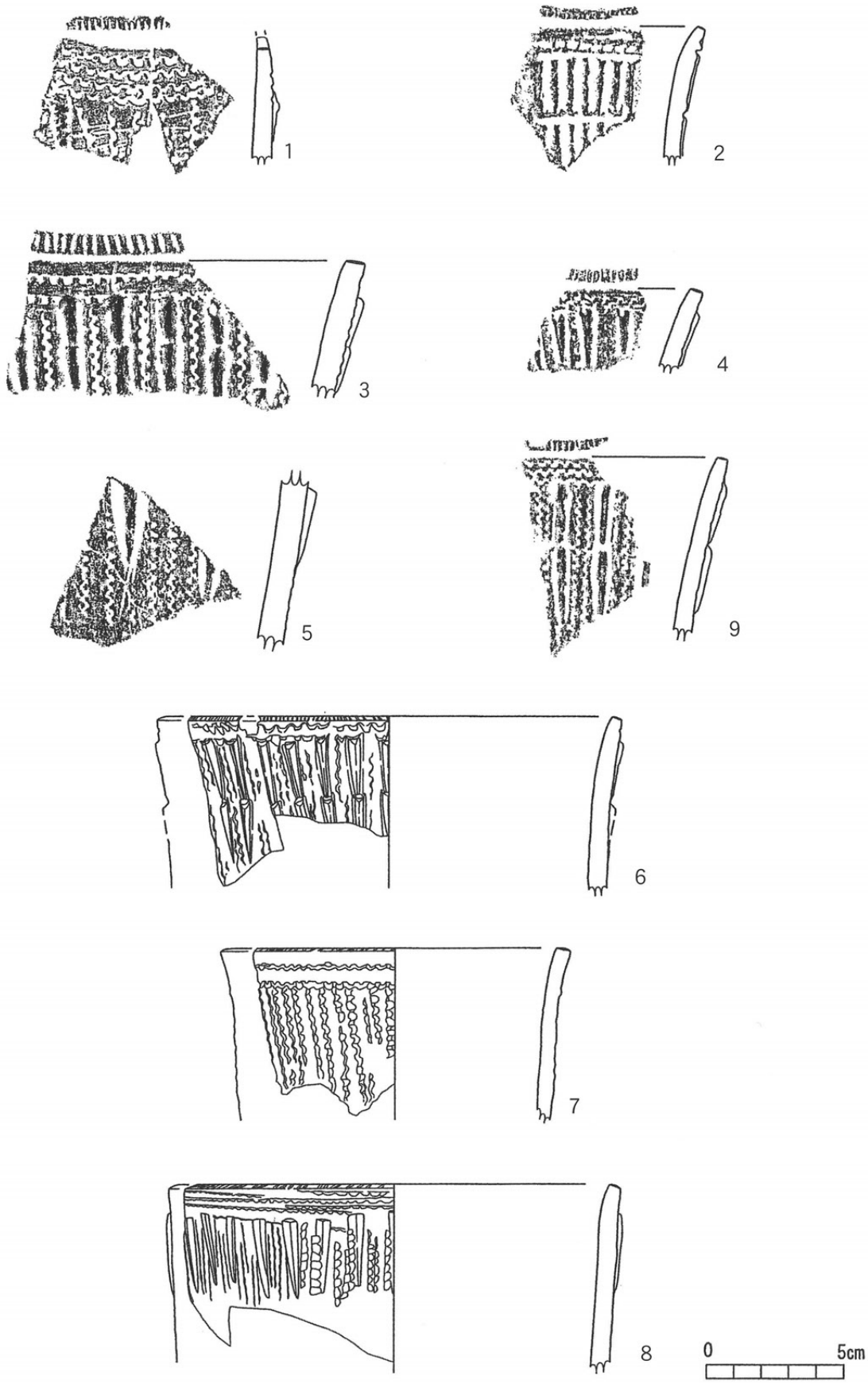
No.39も、胴部の破片で縦方向の貝殻復縁による押し引きが約２～３ミリ間隔で規則正しく密に連続する。器壁は、No.２と比べると厚手となる。外面・内面ともに調整の跡は判別できるが摩耗が激しい。焼成は、良好である。

Ⅲ類土器：貝殻文系円筒土器で器壁が薄いもの（No.４、６～９、11～13、15、17、18、21、22）

No.４は、円筒形土器の口縁部で全体に煤が多量に付着している。器壁は、約５ミリと薄く同様に狭い口唇部には、２ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを密に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。２列の刺突線文直下には約２㎝の楔型突帯が約１㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られ、楔型突帯の上部には串状工具の先でつけられたような穴の跡が見られる。楔型突帯と楔型突帯の間には縦方向の貝殻復縁刺突線文が１列規則正しく施文される。楔型突帯が何列に渡って施されるかは不明。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。

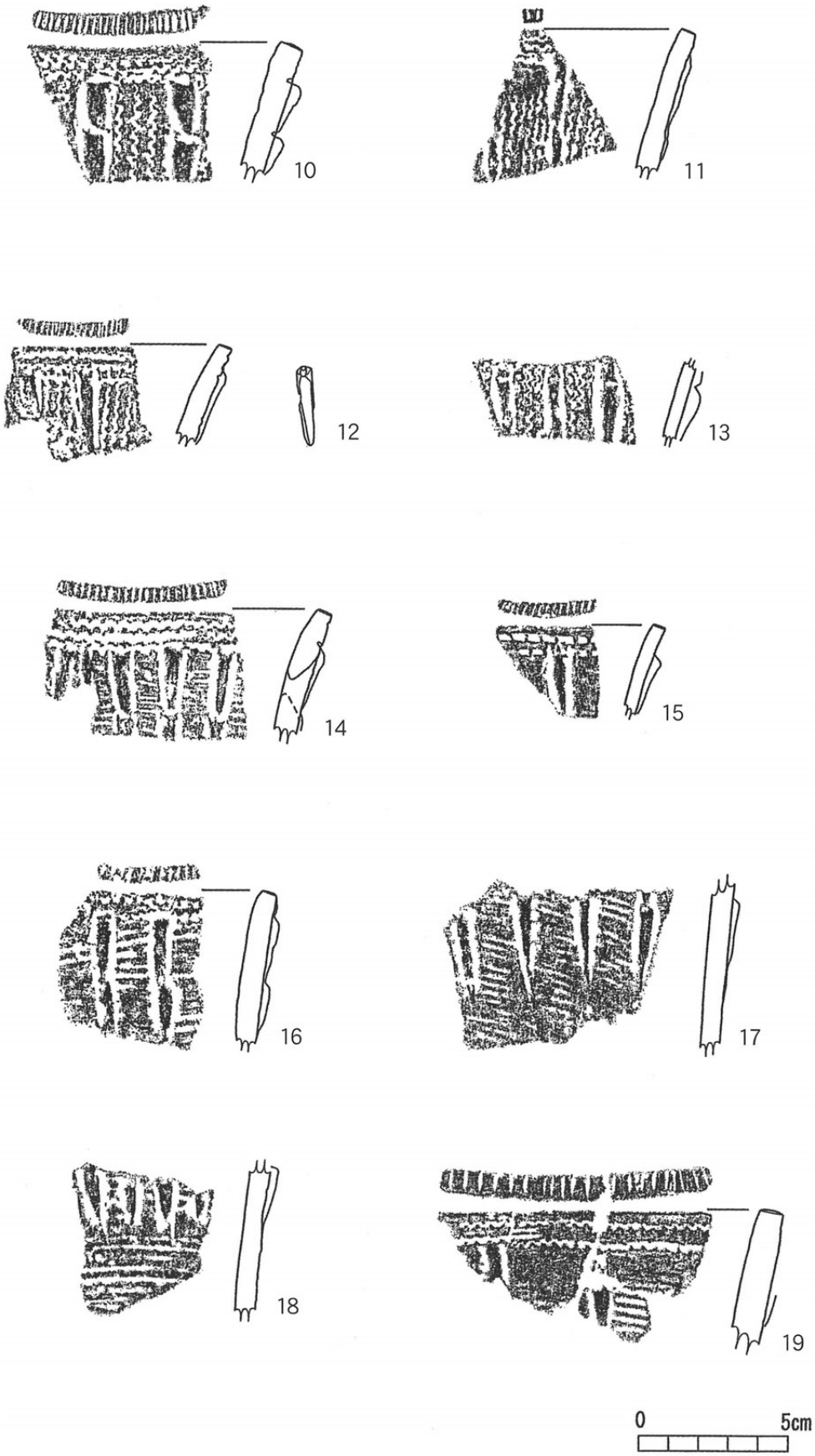
No.６は、復原口径で17.0㎝を測る。やや外反する口縁部で器壁は、５ミリで、口唇部には、No.４と同様に２ミリ間隔での縦方向のヘラ刻みを密に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が２

A地区出土遺物（その２）



第23図

A地区出土遺物（その３）



第24図

列施される。２列の刺突線文直下には約２㎝の楔型突帯が約１㎝の間隔で２段に貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により丁寧な縁取りが施される。楔型突帯と楔型突帯の間には縦方向の貝殻復縁刺突線文が２列規則正しく施文される。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。

No.７は、復原口径で12.8㎝を測る。やや外反する口縁部で器壁は、５ミリで、口唇部には、No.６と同様に３ミリ間隔での縦方向のヘラ刻みを密に施す。口縁部直下には、丁寧な横方向のナデ調整の跡に横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。２列の刺突線文直下には、横方向の貝殻条痕を地文として５ミリ間隔で規則正しく縦方向の貝殻復縁刺突線文が施される。内面は、口縁部直下はヘラによるナデ調整が行われ、その下部は条痕の跡が見られる。楔型突帯は施文されないが、施文方法などからⅢ類のバリエーションに含んで良いと思われる。焼成は、良好である。

No.８は、復原口径で16.5㎝を測る。やや外反する口縁部で器壁は、６ミリで、口唇部には、２ミリ間隔での縦方向のヘラ刻みを密に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が３列施される。３列の刺突線文直下には約３㎝の楔型突帯が約1.2～1.5㎝の間隔で１段貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、貝殻復縁により丁寧な縁取りが施される。楔型突帯と楔型突帯の間には縦方向の貝殻復縁刺突線文が３列規則正しく施文される。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。また、楔型突帯貼り付け面より下部では、横方向の貝殻条痕が見られる。焼成は、非常に良好である。

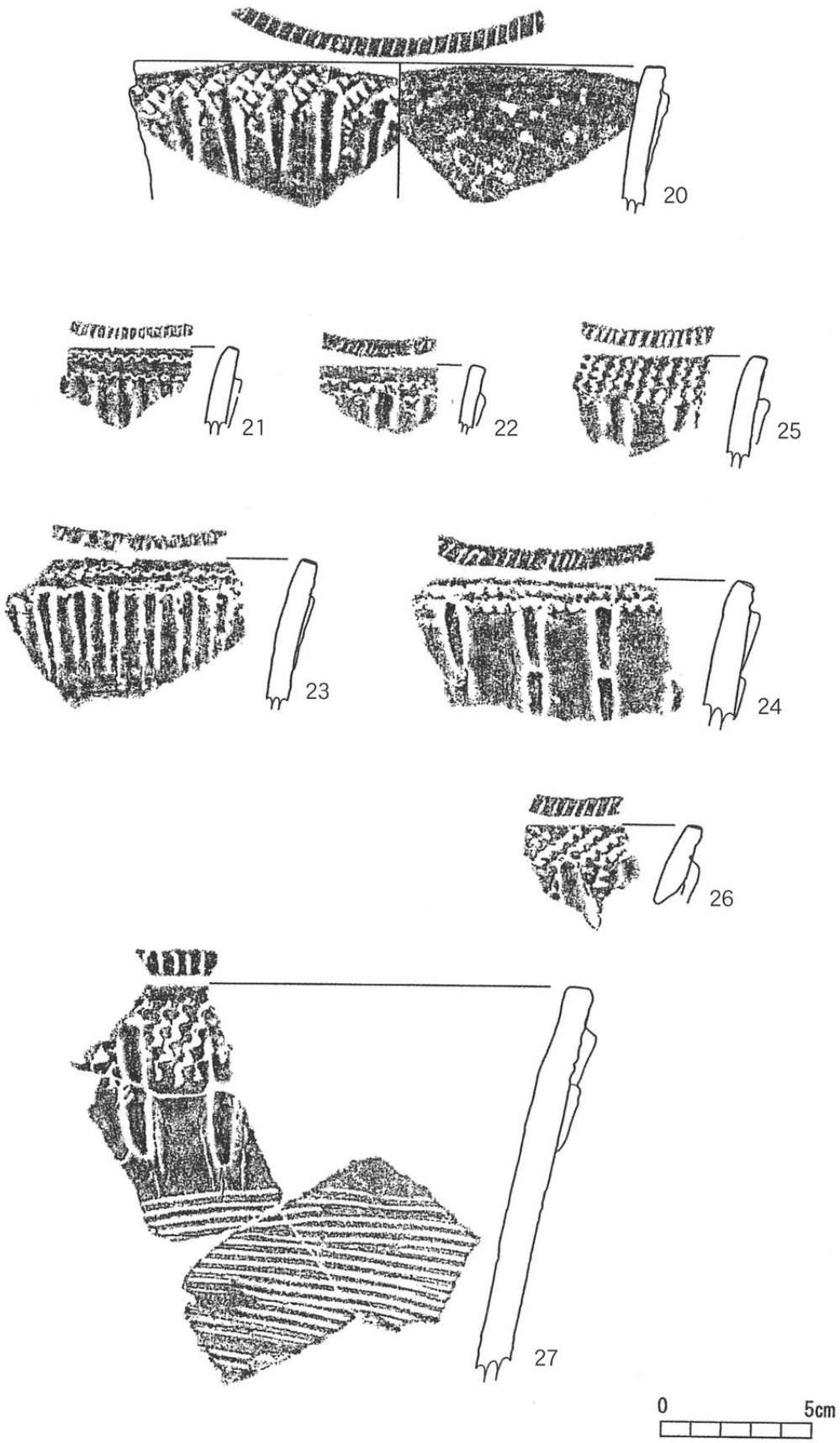
No.９は、円筒形土器の口縁部で器壁は、約４ミリと薄く同様に狭い口唇部には、２ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを密に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が３列施される。３列の刺突線文直下には約２㎝～2.5㎝の楔型突帯が約１㎝の間隔で２段に貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。楔型突帯と楔型突帯の間には、縦方向の貝殻復縁刺突線文が２列規則正しく施文される。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.11は、円筒形土器の口縁部で器壁は、６ミリと薄く同様に狭い口唇部には、２ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを密に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が３列施される。３列の刺突線文直下には約２㎝楔型突帯が約２㎝の間隔で２段に貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。楔型突帯と楔型突帯の間には、不明瞭ではあるが縦方向の貝殻復縁刺突線文が７列～８列規則正しく施文される。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.12は、円筒形土器の口縁部で器壁は、約５ミリと薄く同様に狭い口唇部には、２ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを密に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁　刺突線文が３列施される。３列の刺突線文直下には約2.5㎝の楔型突帯が約1.5㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られ、楔型突帯の上部には串状工具の先でつけられたような穴の跡が見られる。楔型突帯と楔型突帯の間には縦方向の貝殻復縁刺突線文が３列規則正しく施文される。楔型突帯が何列に渡って施されるかは不明。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.13は、円筒形土器の口縁部付近の破片で器壁は、約４ミリと薄い。残存状況から、約1.5㎝の楔型突帯が約1.2㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られ、楔型突帯の上部には串状工具の先でつけられたような穴の跡が見られる。楔型突帯と楔型突帯の間には縦方向の貝殻復縁刺突線文が２列規則正しく施文される。楔型突帯が何列に渡って施されるかは不明。内面・外面と

A地区出土遺物（その４）



第25図

も丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.15は、円筒形土器の口縁部で器壁は、約４ミリと薄く同様に狭い口唇部には、２ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを密に施す。口縁部直下には、横方向のヘラ状工具による刺突線文が２列施される。２列の刺突線文直下には約２㎝の楔型突帯が貼り付けられる。その間隔は不明。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。楔型突帯と楔型突帯の間はナデ調整が施され、縦方向の貝殻復縁刺突線文は見られない。楔型突帯が何列に渡って施されるかは不明。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.17は、円筒形土器の口縁部付近の破片で器壁は、約６ミリである。横方向の貝殻条痕の調整後に残存状況から推定すると、約２㎝の楔型突帯が約1.2㎝の間隔で２段に貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られ、楔型突帯の上部には串状工具の先でつけられたような穴の跡が見られる。内面は、縦方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.18は、円筒形土器の口縁部付近の破片で器壁は、約６ミリである。横方向の貝殻条痕の調整後に残存状況から推定すると、約1.5㎝の楔型突帯が約７ミリの間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。楔型突帯の下部も横方向の貝殻条痕による調整が施される。内面は、横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.21は、円筒形土器の口縁部で器壁は、約６ミリと薄く同様に狭い口唇部には、２ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを密に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。２列の刺突線文直下には長さは不明だが、楔型突帯が貼り付けられる。約９ミリ間隔で規則的に並び貼り付けられるが、何段の施文かは不明。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。楔型突帯と楔型突帯の間はナデ調整が施され、縦方向の貝殻復縁刺突線文は見られない。内面・外面とも非常に丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

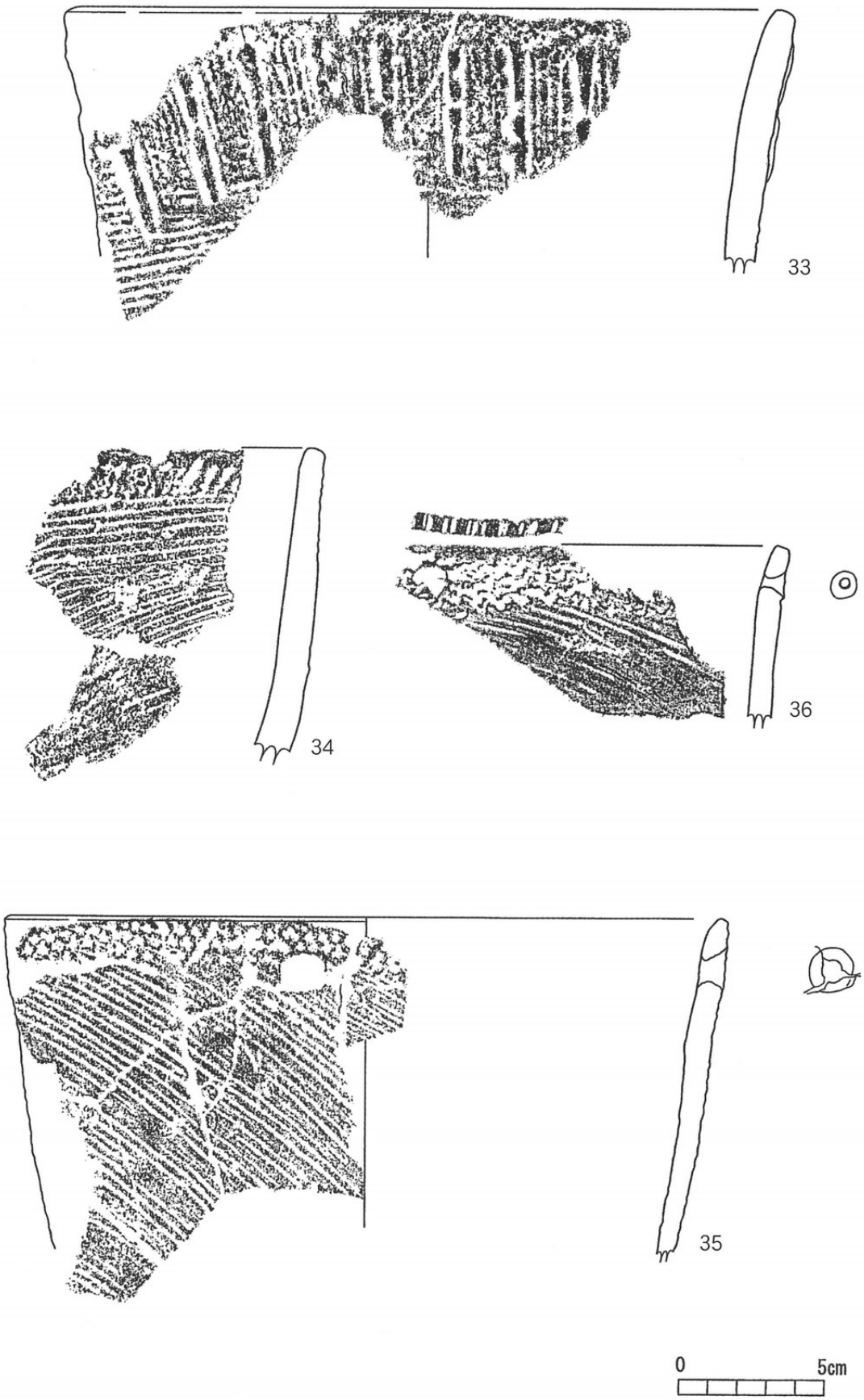
No.22は、円筒形土器の口縁部で器壁は、約４ミリと薄く同様に狭い口唇部には、不鮮明ではあるが等間隔で縦方向のヘラ刻みを密に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が１列施される。１列の刺突線文直下には長さは不明だが、楔型突帯が貼り付けられる。約８ミリ間隔で規則的に並び貼り付けられるが、何段の施文かは不明。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。楔型突帯と楔型突帯の間はナデ調整が施され、縦方向の貝殻復縁刺突線文は見られない。内面・外面とも非常に丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

Ⅳ類土器：貝殻文系円筒土器で器壁が厚手のもの（No.３、５、10、14、16、17～20、23～27、32、33、37）

No.３は、円筒形土器の口縁部で器壁は、約10ミリと厚手である。口唇部には４～５ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。２列に施された刺突線文直下には1.5～1.7㎝の楔型突帯が約1.2㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られ、楔型突帯と楔型突帯の間には縦方向の貝殻復縁刺突線文がほぼ中央に１列規則正しく施文される。楔型突帯が何列に渡って施されるかは不明。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.５は、円筒形土器の口縁部付近の破片で器壁は、約10ミリと厚手である。楔型突帯が何段貼り付けられていたかは、不明。楔型突帯は約2.5㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られ、楔型突帯と楔型突帯の間には縦方向の貝殻復縁刺突線文が３列規則正しく施文される。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。焼成は、良好である。

A地区出土遺物（その５）



第26図

No.10は、円筒形土器の口縁部で器壁は、約９ミリと厚手である。口唇部には、２ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを施す。約1.5㎝の楔型突帯が約２㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られ、楔型突帯の上部には串状工具の先でつけられたような穴の跡が見られる。楔型突帯と楔型突帯の間には縦方向の貝殻復縁刺突線文が４列規則正しく施文される。楔型突帯が何列に渡って施されるかは不明。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.14は、円筒形土器の口縁部で器壁は、約９ミリである。口唇部には２ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを規則的に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が３列施される。３列に施された刺突線文直下には、貝殻条痕による横方向の調整後に約1.8㎝の楔型突帯が約１㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られ、楔型突帯の上部にはヘラ状工具による穴の跡が見られる。楔型突帯が何列に渡って施されるかは不明。内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。完全には残存していないが、左下部分に補修孔の跡が見られる。焼成は、良好である。

No.16は、円筒形土器の口縁部で器壁は、約８ミリである。口唇部には約２ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを規則的に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。２列に施された刺突線文直下には、貝殻条痕による横方向の調整後に約２㎝の楔型突帯が約1.5㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。楔型突帯が何列に渡って施されるかは不明。内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.19は、円筒形土器の口縁部で器壁は、11ミリと厚手である。口唇部には約４ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを規則的に施す。口縁部直下には、ナデ調整の後に横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。２列に施された刺突線文直下には、貝殻条痕による横方向の調整後に約２㎝の楔型突帯が約３㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。楔型突帯が何列に渡って施されるかは不明。内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.20は、復原口径で17.6㎝を測る。やや外反する口縁部で器壁は、９ミリで、口唇部には４～５ミリ間隔での縦方向のヘラ刻みを施す。口縁部直下には、約１㎝の幅で斜位方向の貝殻復縁刺突線文が連続して施される。その刺突線文直下に2.5～３㎝の細長い楔型突帯が約1.0～1.2㎝の間隔で１段貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、丁寧なナデ調整が施される。内面・外面とも丁寧なナデ調整を施す。特に内面は、口縁部直下で横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、非常に良好である。

No.23は、円筒形土器の口縁部で器壁は、８ミリである。口唇部には不鮮明であるが縦方向のヘラ刻みを規則的に施す。口縁部直下には、ヘラナデ調整の後に横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。２列に施された刺突線文直下でもヘラナデ調整後に約３㎝強の楔型突帯が約６ミリの間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られ、その縁取りは突帯の切れた下部まで沈線状に連なる。楔型突帯が何列に渡って施されるかは不明。内面もヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.24は、円筒形土器の口縁部で器壁は、10ミリと厚手である。口唇部には３～４ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを規則的に施す。口縁部直下には、ナデ調整の後に横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。２列に施された刺突線文直下でもナデ調整後に約２㎝の楔型突帯が約２㎝の間隔で２段に貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。内面もヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.25は、円筒形土器の口縁部で器壁は、８ミリで、口唇部には３ミリ間隔ではっきりとした縦方向のヘラ刻みを施す。口縁部直下には、横方向の貝殻条痕による調整の後に約１㎝の幅で斜位方向の貝殻

復縁刺突線文が連続して施される。その刺突線文直下でも横方向の貝殻条痕上に楔型突帯が約1.5㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、丁寧なナデ調整が施される。内面は、口縁部直下で横方向の丁寧なヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、非常に良好である。

No.26は、円筒形土器の口縁部で器壁は、９ミリで、口唇部には３ミリ間隔ではっきりとした縦方向のヘラ刻みを施す。口縁部直下には、横方向の貝殻条痕による調整の後に約1.5㎝の幅で斜位方向の貝殻復縁刺突線文が連続して施される。その刺突線文直下でも横方向の貝殻条痕上に楔型突帯が約1.6㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、丁寧なナデ調整が施される。内面は、口縁部直下で横方向の丁寧なヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、非常に良好である。

No.27は、円筒形土器の口縁部から胴部にかけての破片で器壁は、11ミリと厚い。口唇部には３～４ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを規則的に施す。口縁部直下には、ナデ調整の後に幅３㎝に渡って斜位方向の貝殻復縁刺突線文が連続して施される。その刺突線文に約１㎝程オーバーラップして約２㎝強の楔型突帯が２段に２㎝の間隔で貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。楔型突帯の下部は横方向の貝殻条痕が施される。内面は口縁部直下でヘラナデ調整され、さらにその下部ではナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.32は、復原口径で20.2㎝、残存器高で20.2㎝を測る。やや外反する口縁部で器壁は、11ミリで、口唇部には２～４ミリ間隔での縦方向のヘラ刻みを施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。その刺突線文直下から胴部全体にかけては横方向の貝殻条痕が施される。口縁部直下の刺突線文下部には、横方向の貝殻条痕の上に約２㎝の楔型突帯が２㎝の間隔で２段貼り付けられる。それぞれの楔型突帯の周辺は、ヘラ工具による縁取りがなされ、楔型突帯の上部はヘラより鋭角に切り込みが入れられる。内面は、口縁部直下から胴部全体にわたり横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、非常に良好である。

No.33は、復原口径で25.2㎝、残存器高で8.8㎝を測る。やや外反する口縁部で器壁は、12ミリと厚手である。口唇部でのヘラ刻みは摩耗が激しく確認できない。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が３列施される。その刺突線文直下に約2.5㎝の楔型突帯が２㎝間隔で２段に貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ工具による縁取りがなされている。楔型突帯と楔型突帯の間には、縦方向の貝殻復縁刺突線文が４～５列施される。楔型突帯の貼り付け部より下位は、横方向の貝殻条痕の調整痕が見られる。口縁部直下から胴部全体にわたり横方向のヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.37は、円筒形土器の口縁部で器壁は、10ミリと厚手である。口唇部には３～４ミリ間隔で縦方向のヘラ刻みを規則的に施す。口縁部直下には、横方向の貝殻復縁刺突線文が２列施される。２列に施された刺突線文直下には横方向の貝殻条痕が施されその上部に約2.3㎝の楔型突帯が1.5～1.7㎝の間隔で２段に貼り付けられる。楔型突帯の周辺は、ヘラ状工具により縁取られる。内面もヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

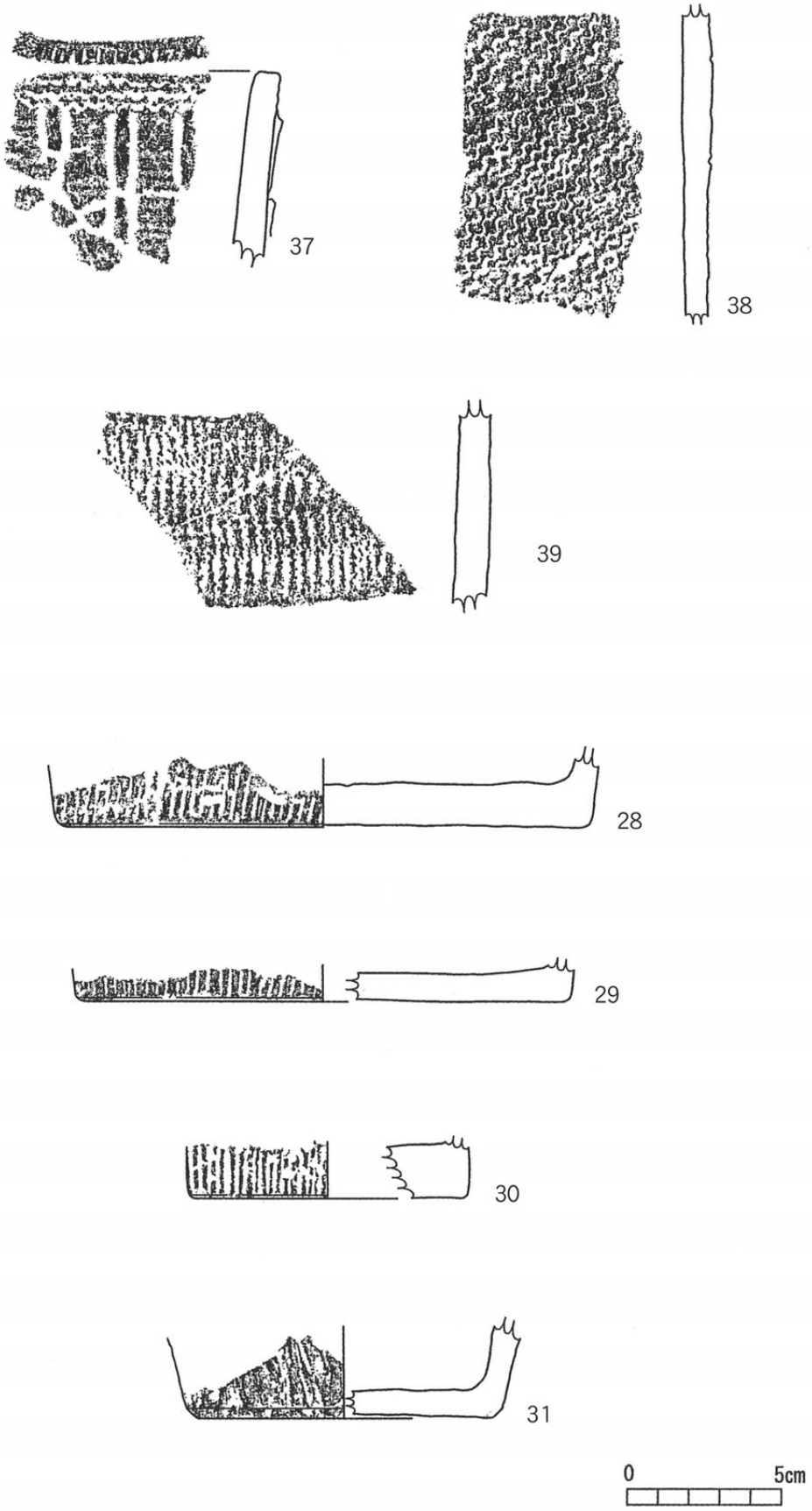
Ⅴ類土器：貝殻文系円筒土器の底部（No.28～31）

No.28は、復原底径で17.4㎝を測る。底部外面には、縦方向の短沈線が２ミリ間隔で規則正しく施される。接地面は正円形を呈し内面の接合、整形はヘラナデによる。底部外面は、ナデ調整である。焼成は、良好である。

No.29は、復原底径で16.1㎝測る。底部外面には、縦方向の短沈線が２ミリ間隔で規則正しく施される。接地面は正円形を呈し内面の整形はナデ調整による。底部外面は、ヘラナデ調整である。焼成は、良好である。

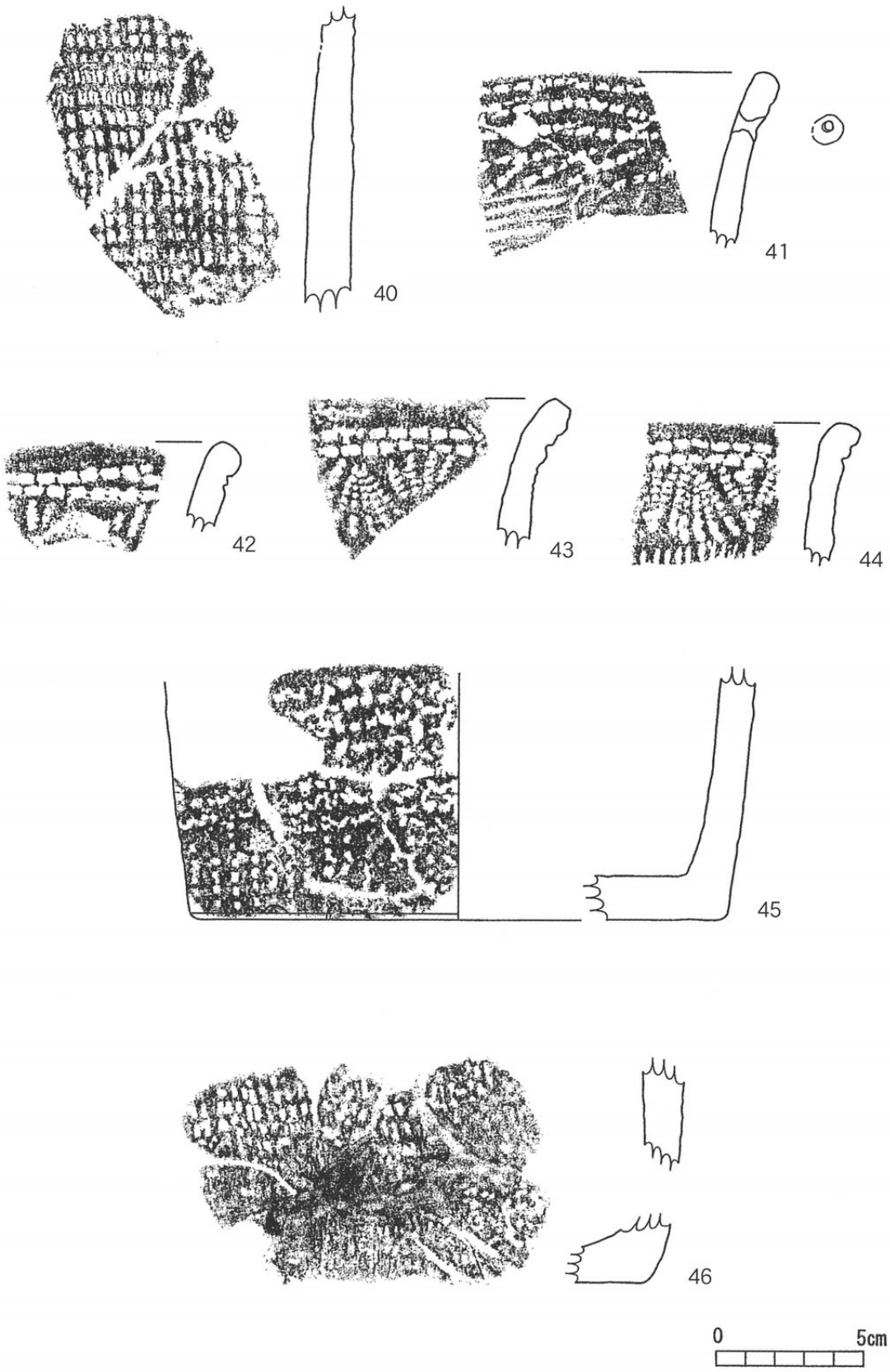
No.30は、復原底径で9.0㎝測る。底部外面には、縦方向の短沈線が１ミリ強の間隔で規則正しく施さ

A地区出土遺物（その６）



第27図

A地区出土遺物（その７）



第28図

れる。接地面は正円形を呈し内面の整形は指ナデ調整による。底部外面は、ナデ調整である。焼成は、良好である。

No.31は、復原底径で10.4㎝測る。底部外面には、縦方向のヘラ状工具による調整痕が残る。短沈線は見られない。接地面は正円形を呈し内面の整形は指ナデ調整による。底部外面の調整は観察できず。焼成は、良好である。

Ⅵ類土器：貝殻文系円筒土器（No.34～36）

No.34は、口縁部から胴部にかけての破片で口縁部に約1.5㎝の幅で斜位方向の貝殻復縁刺突線文を３～４ミリ間隔で密に施す。その下部には、横方向の貝殻条痕を施し、更にその下部は斜位方向の貝殻条痕を施す。外面には、一部煤が付着している。内面は、口縁部直下がヘラナデ調整でその下部は、ケズリの跡が見られる。焼成は、良好である。

No.35は、口縁部から胴部にかけての破片で復原口径で25.0㎝を測る。口縁部に３列の横方向の貝殻条痕を施す。その下部には、斜位方向の貝殻条痕を全面施す。口縁部直下で、直径約１㎝の補修孔の跡が見られる。内面は、ヘラナデ調整の跡が見られる。焼成は、良好である。

No.36は、口縁部の破片である。口唇部に不規則な縦方向のヘラ刻みが施される。口縁部には幅約２㎝で斜位方向のの貝殻条痕を施す。その下部には、斜位方向の貝殻条痕を全面施す。口縁部直下で、直径約８ミリの補修孔の跡が見られる。内面は、口縁部直下でヘラナデ調整その下部でナデ調整の跡が見られる。焼成は、良好である。

Ⅶ類土器：円筒系土器で刺突文及び貝殻復縁文を有するもの（No.40～46）

No.40は、胴部の破片で胴部全面に貝殻による連続する刺突文を施す。全体的に煤が付着している。内面は、ナデ調整がみられる。外面に関しては、摩耗が激しく判別できず。焼成は、良好である。

No.41は、口縁部で、口縁部直下に横方向の貝殻刺突文が２列施される。その下部には、約１㎝の幅で斜位方向の刺突文が連続して施される。さらにその下位には、横方向の貝殻条痕が施される。口縁部左側には、直径約５ミリの補修孔の跡が見られる。内面は、ケズリ調整の跡が見られる。焼成は、良好である。

No.42は、口縁部で、口縁部直下に横方向の貝殻刺突文が２列施される。その下部には、縦方向の刺突文が連続して施される。内面は、ナデ調整の跡が見られる。焼成は、良好である。

No.43は、口縁部やや肥厚する。口縁部直下には、横方向の貝殻刺突文が２列施される。その下部には、４条～５条の刺突文を扇型に施文し、それを上下逆にしたものとを交互に連続して施しているようである。内面は、ナデ調整の跡が見られる。焼成は、良好である。

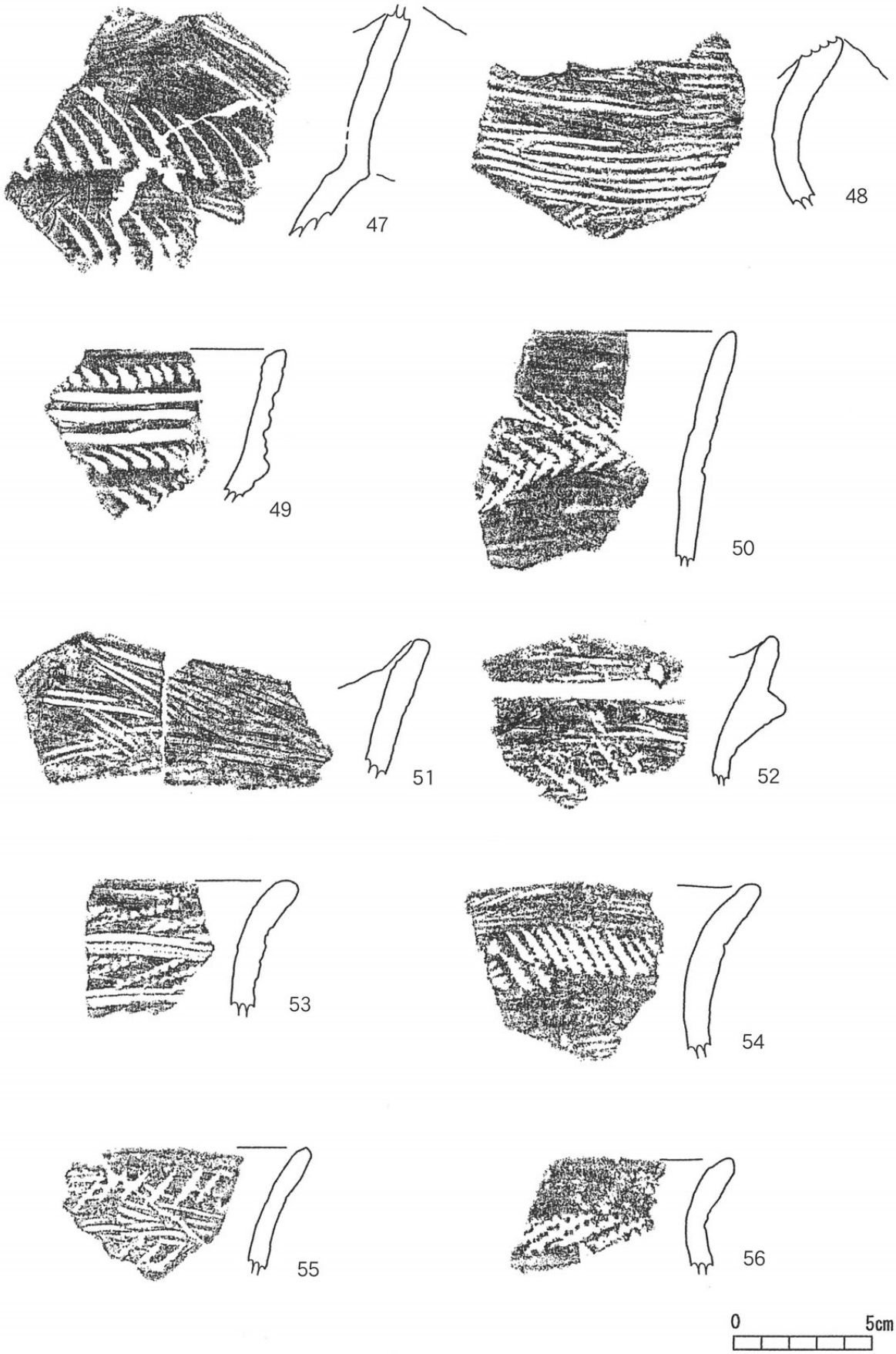
No.44は、口縁部やや肥厚する。口縁部直下には、横方向の貝殻刺突文が２列施される。その下部には、４条～５条の刺突文を扇型に施文し、それを上下逆にしたものとを交互に連続して施しているようである。さらに、その下部には縦方向の刺突文が約２ミリ間隔で密に施してある。内面は、ナデ調整の跡が見られる。焼成は、良好である。

No.45は、このⅦ類土器の底部と思われる。復原底径で18.2㎝を測る。底部外面には、長さ2.5㎝程の縦方向の貝殻刺突文が約４ミリ間隔で施される。その上部には、横方向の貝殻刺突文が全面に渡り施される。接地面は正円形を呈し内面の整形はナデ調整による。底部外面は、ナデ調整後の施文のようである。焼成は、良好である。

No.46もこのⅦ類土器の底部と思われる。底部外面には、一部摩耗が激しいが縦方向の貝殻刺突文が約３ミリ間隔で施される。接地面は正円形を呈し内面の整形はナデ調整による。焼成は、良好である。

縄文時代後期（第29図）

A地区出土遺物（その８）



第29図

Ⅰ類土器：口縁部断面三角形またはくの字のもの（No.47、49，52）

No.47は口縁部付近の破片で腰部でくの字を呈する。くの字に肥厚する腰部の上下に貝殻復縁刺突文が斜位に施される。くの字上部では、横方向の貝殻条痕が見られる。内面は、ヘラナデ調整の跡が見られる。焼成は、良好である。

No.49は口縁部の破片で腰部でくの字を呈する。口縁部には、斜位方向の貝殻刺突文が連続して施され、その下部に３条の横方向の沈線が施される。くの字に肥厚する腰部の上下には、貝殻復縁刺突文が斜位に施される。外面の調整は、一部ナデ調整が確認される。内面は貝殻条痕による調整が施される。焼成は、良好である。

No.52は口縁部の破片で口縁上端で山形に尖り、腰部でくの字を呈する。口縁部には、横方向の貝殻条痕が施される。くの字に肥厚する腰部の上部には、約５ミリのはっきりとした沈線が施され、下部には、貝殻復縁刺突文が斜位に施される。内面の調整は、貝殻条痕による。焼成は、良好である。

Ⅱ類土器：口縁上端が山形で条痕のみ有するもの（No.48、51）

No.48は、摩耗が激しいが口縁部の破片で口縁上端で山形に隆起する。施文は横方向の貝殻条痕のみである。内面は、貝殻条痕による調整が見られる。焼成は、良好である。

No.51は、口縁部の破片で口縁上端で山形に隆起する。施文は隆起する口縁部付近では、斜位の貝殻条痕の跡が見られ、その下部では横方向の貝殻条痕が見られる。内面は、貝殻条痕による調整が見られる。焼成は、良好である。

Ⅲ類土器：口縁部が平坦で単一文様のもの（No.50、54～56）

No.50は、口縁部の破片で平坦な形状をとる。口縁部直下は、横方向のヘラナデ調整を施し、その下部で逆くの字型の貝殻復縁刺突線文を連続して施す。内面は、横方向の貝殻条痕による調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.54は、口縁部の破片で平坦な形状をとる。口縁部直下は、横方向の貝殻条痕調整を施し、その下部で斜位の貝殻復縁刺突線文を連続して施す。内面は、横方向の貝殻条痕による調整とヘラナデ調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.55は、口縁部の破片で平坦な形状をとる。口縁部直下は、横方向の貝殻条痕調整を施し、その下部で斜位の貝殻復縁刺突線文を連続して施す。内面は、ヘラケズリよる調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

No.56は、口縁部の破片で平坦な形状をとる。口縁部直下は、横方向のヘラナデ調整を施し、その下部で斜位の貝殻復縁刺突線文を連続して施す。内面は、横方向の貝殻条痕による調整の跡がみられる。焼成は、良好である。

Ⅳ類土器：口縁部が平坦で組み合わせ文様のもの（No.53）

No.53は、口縁部の破片で平坦な形状をとる。口縁部直下には斜位方向の貝殻刺突線文を施し、その下部に２条の横方向の沈線を施す。更にその下部には同じく斜位方向の貝殻刺突線文を施し、２条の横方向の沈線を施す。内面は、横方向の貝殻条痕による調整の跡が見られる。焼成は、良好である。

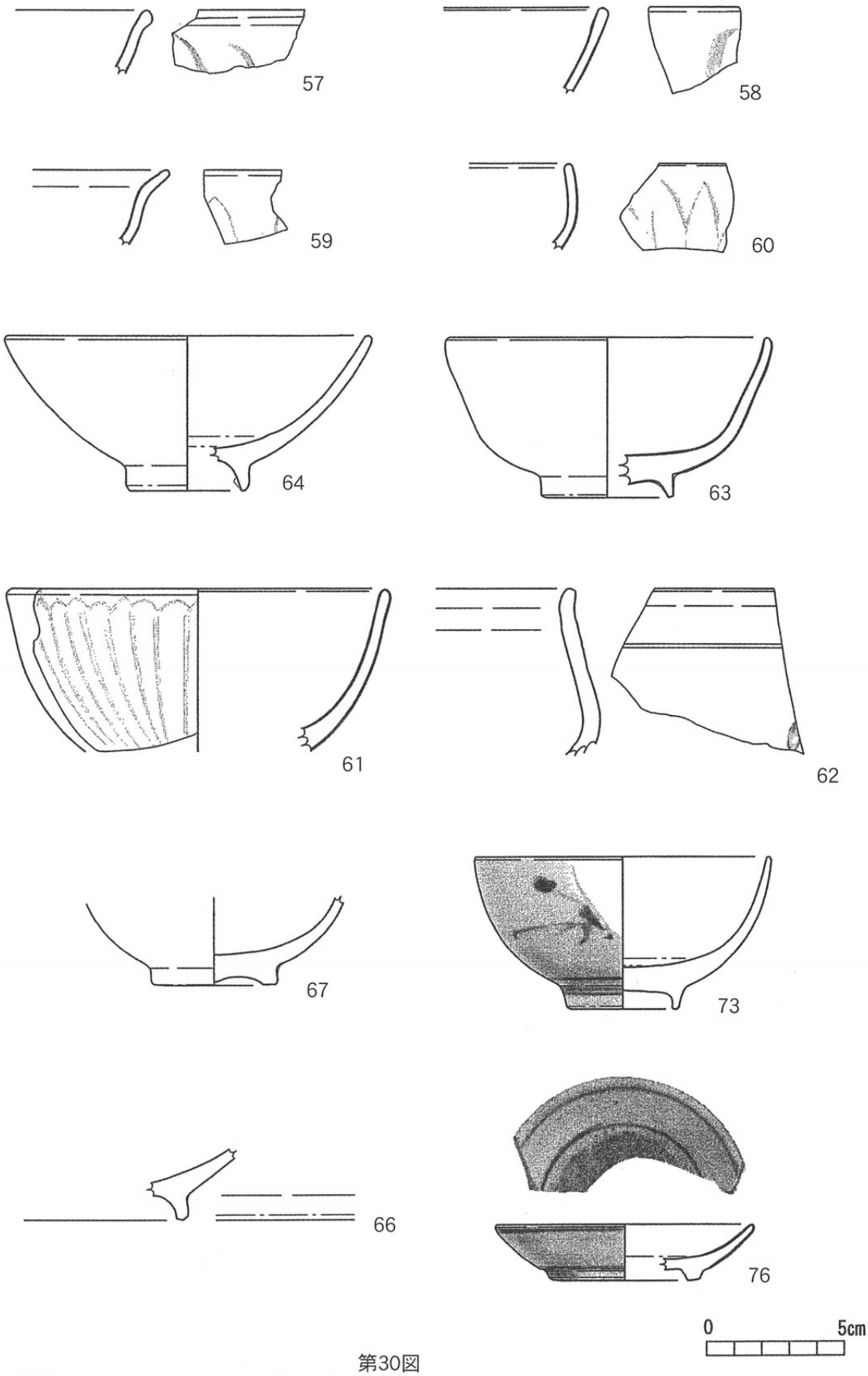
⑵　陶磁器〔中・近世〕（第30図～第31図）

Ⅰ類（青磁No.57～61）

第Ⅰ類の磁器は、輸入磁器である。いずれも蓮弁が施されているが、その施文の方法から時代差があるようである。

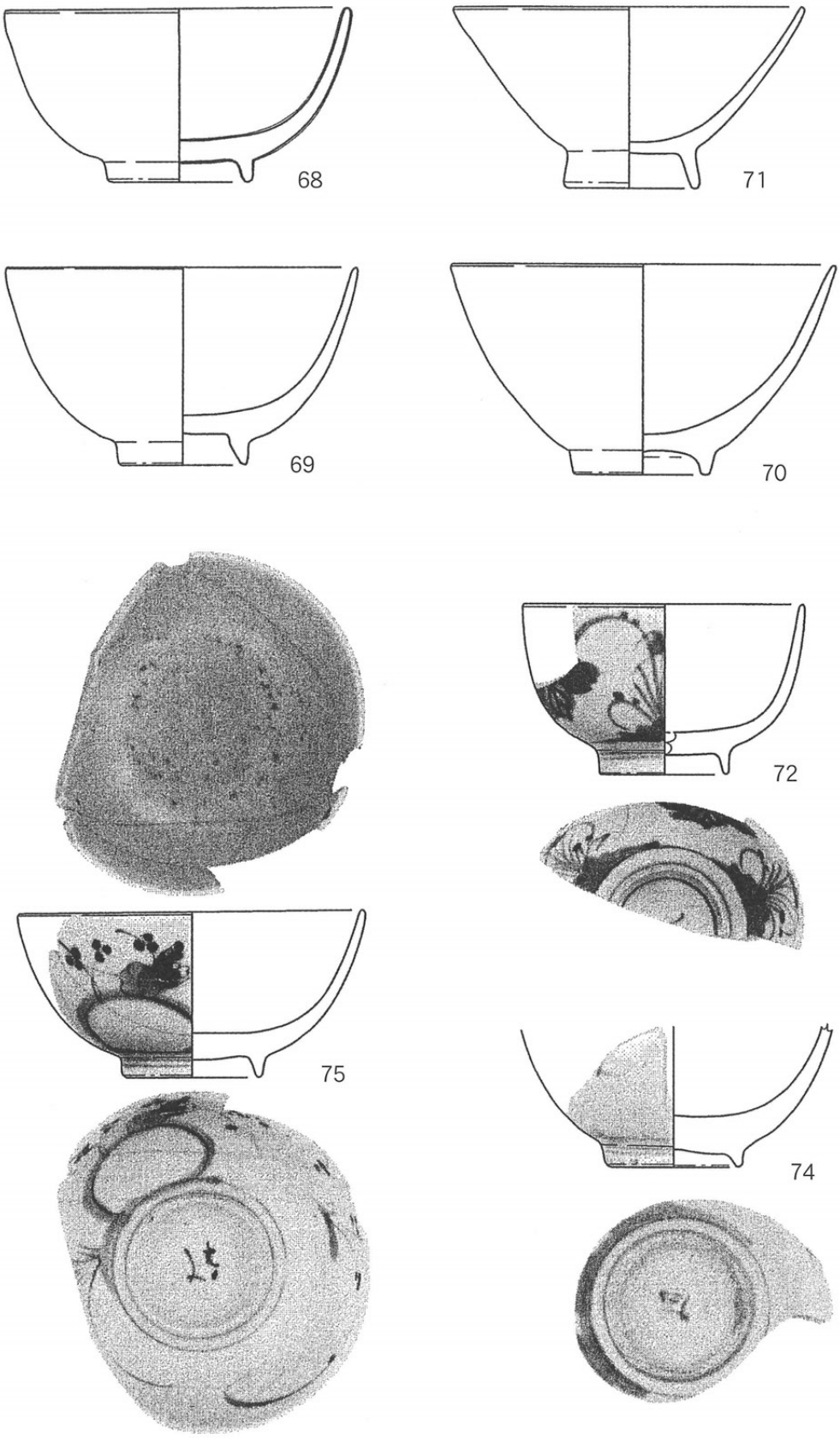
No.57は、碗の口縁部上部の破片で口縁部がやや肥厚し、ゆるやかな外反が認められる。外面・内面とも貫入が認められ、外面には間隔の広い蓮弁？が認められる。

A地区出土遺物（その９）



第30図

A地区出土遺物（その10）



第31図

No.58は、同じく青磁碗の口縁部付近の破片である。ごく少量な残存部分であるが蓮弁が認められる。No.57よりも更にその間隔は広いようである。内外面とも施釉の跡はみられるが、貫入はない。

No.59は、口縁部が逆くの字に外反する坏の破片である。外面に若干の貫入が認められ、約1.5㎝間隔で比較的密な蓮弁文を施す。

No.60は、青磁碗の口縁部破片で、残存部分は少量であるが連続する蓮弁文がよく確認される。外面には、貫入が認められる。

No.61は、唯一復原可能な口縁部から胴部の破片である。復原口径は、14㎝で残存器高は、5.9㎝を測る。この５つの中では、最も密に蓮弁文が連続して施されている。内外面とも施釉が施され、貫入も認められる。

Ⅱ類（陶磁器類No.62～71、77）

No.62は、陶器碗の口縁部破片である。口縁部直下で若干くびれを呈し、ゆるやかに外反する。くびれ部の直下には沈線が認められる。ほんのわずかであるが模様も確認できる。

No.63は白緑色の施釉が施してあり、青磁のようにもみられるが磁器の口縁部から底部の約１／８ほどの破片である。高台の接地部分は、釉の掻き取りの跡が見られる。復原口径で11.7㎝、高台径で4.8㎝、器高5.85㎝を測る。

No.64は、ケズリだしの高台を有する碗で、復原口径10.4㎝、高台径3.8㎝、器高5.7㎝を測る。高台部分以外は、オリーブグリーン色の施釉を施し、高台外面には、ロクロナデ調整の跡が見られる。

No.65は、ラセットゴールド色の施釉が内外面に施される。内面の底部と高台の接地部分では、釉の掻き取りの跡が見られる。復原口径で13.4㎝、復原高台径で4.5㎝、器高5.6㎝を測る。内外面とも貫入も見られる。

No.66は、No.65と同系統の磁器の底部と思われる。碗の底部であるが、残存部分が少量であるため復原直径は、わからず。内外面に貫入が認められる。

No.67は、透明釉の碗で底部付近の破片である。復原高台径は4.6㎝で底部外面には、ロクロナデの跡が見られる。内外面とも施釉部分には、顕著な貫入の跡が見られる。

No.68は、透明釉の碗で１／４の口縁部から底部までが残存する磁器の碗である。復原口径は、11.4㎝で、復原高台径は4.1㎝、器高6.4㎝を測る。高台の接地部分には、釉の掻き取りの跡が見られる。

No.69は白緑色の施釉が施してあり、青磁のようにもみられるが磁器の口縁部から底部にかけ２／３が残存する。高台の接地部分は、釉の掻き取りの跡が見られる。 復原口径で11.3㎝、高台径で4.7㎝、器高5.75㎝を測る。

No.70は、透明釉の碗で１／４の口縁部から底部までが残存する磁器の碗である。復原口径は、12.5㎝で、復原高台径は4.4㎝、器高6.9㎝を測る。高台の接地部分には、釉の掻き取りの跡が見られる。

No.71は、ほぼ完形品である。白磁系の碗で口径11.4㎝、器高5.95㎝、高台径4.4㎝を測る。内外面とも施釉が施してあり、外面の高台くびれ部分には、金色の色絵の跡が見られる。底部裏面には、染付の跡と「有田」の文字が読みとれる。

高台接地部分では、釉の掻き取りの跡が見られる。

No.77は、陶器の大皿である。口縁部は残存していない。残存器高で7.6㎝、高台径13.8㎝を測る。内面は、レンガ色の施釉と波状のハケ目が施してある。目痕も８ヶ所認められる。外面は、一部ロクロナデ部分に施釉が施され、底部付近は、ヘラケズリ調整の跡が見られる。

Ⅲ類（染付No.72～76）

No.72は、口縁部から底部までの約１／６程度が残存する染付磁器である。復原口径で9.2㎝、器高

5.55㎝、高台径4.3㎝を測る。内外面とも施釉が施され、底部外面にも染付がわずかだが認められる。外面は、草花文で高台外面にも横方向２条の染付が見られる。

No.73は、口縁部から底部までの約１／３程度が残存する染付磁器である。復原口径で10.8㎝、器高5.55㎝、高台径4.05㎝を測る。内外面とも施釉が施され、外面は、草花文で高台外面にも横方向２条の染付が見られる。

No.73は、口縁部から底部までの約１／３程度が残存する染付磁器である。復原口径で10.8㎝、器高5.55㎝、高台径4.05㎝を測る。内外面とも施釉が施され、外面は、草花文で高台外面にも横方向２条の染付が見られる。

No.74は、底部付近が残存する染付磁器である。残存器高4.6㎝、高台径4.4㎝を測る。内外面とも施釉が施され、外面は、草花文で高台外面にも横方向２条の染付が見られる。

No.75は、口縁部から底部までの約２／３程度が残存する染付磁器である。復原口径で11.35㎝、器高5.45㎝、高台径4.5㎝を測る。内外面とも施釉が施され、外面は、草花文で高台外面にも横方向２条の染付が見られる。高台部分の接地部分には、釉の掻き取りの跡が見られる。

No.76は、口縁部から底部までの約１／３程度が残存する染付磁器の皿である。復原口径で9.4㎝、器高2.05㎝、復原高台径5.4㎝を測る。内外面とも施釉が施され、内外面とも横方向２条の染付が見られる。高台部分の接地部分には、釉の掻き取りの跡が見られる。

⑶　石器（第32図～第33図）

石器に関しては、第Ⅱ層目から出土したものが大半で、攪乱層からの出土である。石鏃、剥片石器、磨石などが出土した。器種毎に分けて記述することとしたい。

１．石鏃（No.80～82）

No.80は、石鏃というよりは、未製品に近い。先端部は、欠損している。石材はチャートで最大長3.15㎝、最大幅2.3㎝、最大厚0.65㎝を測る。No.81は、明瞭な脚部も抉りも認められない。石材はチャートで最大長2.1㎝、最大幅1.65㎝、最大厚0.5㎝を測る。No.82は、厚みのある石鏃で石材は、不明である。最大長2.0㎝、最大幅1.45㎝、最大厚0.95㎝を測る。

２．小型剥片石器（No.78～79、83）

No.78は、二次加工が認められる剥片石器である。石材は、チャート最大長6.35㎝、最大幅3.8㎝、最大厚1.35㎝を測る。No.79は、No.82の石鏃と石材は酷似しているようであるが不明である。最大長3.2㎝、最大幅1.75㎝、最大厚1.3㎝を測る。No.83は、石材がチャートで最大長2.45㎝、最大幅1.3㎝、最大厚0.6㎝を測る。

３．磨石（No.84～87）

No.84は、磨石と使用されていた以外にも石皿としても兼用されていたようである。両面に敲き打痕が見られる。石材は砂岩で最大長12.4㎝、最大幅11.7㎝、最大厚6.25㎝を測る。No.85は、縁辺部にいくつかの破損部分が認められるが敲石的な特徴ではない。石材は砂岩で最大長10.2㎝、最大幅8.85㎝、最大厚2.85㎝を測る。No.86は、片面を特に磨石とし使用した痕跡が強く敲石としても兼用されていたようである。石材は、砂岩で最大長7.35㎝、最大幅6.3㎝、最大厚2.95㎝を測る。No.87は、両面とも均等に使用されておりそのほかの兼用の痕跡は伺えない。石材は、チャートで最大長6.7㎝、最大幅6.2㎝、最大厚2.7㎝を測る。

４．敲石（No.88～92）

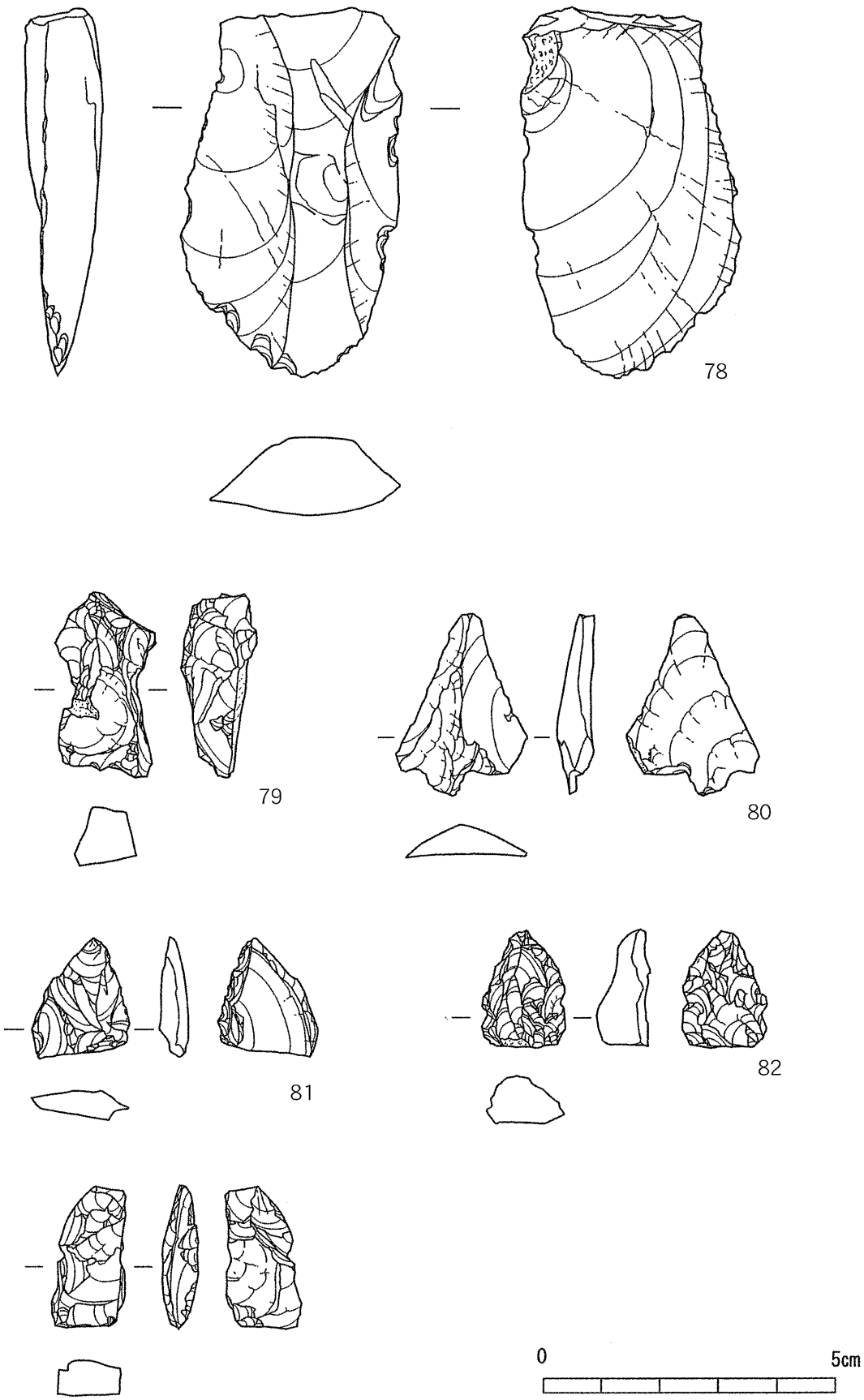
No.88は、欠損しているため元来の大きさは不明であるが、使用痕があまり認められない敲石である。石材は、砂岩で残存長10.1㎝、最大幅8.95㎝、最大厚4.45㎝を測る。No.89は、上部が若干欠損してい

るものの下部に顕著な敲き痕が認められる敲石である。石材は、砂岩で残存長11.8㎝、最大幅7.15㎝、最大厚4.85㎝を測る。No.90は、欠損部の内完形品の敲石で下部に顕著な敲き痕が認められる。石材は、砂岩で最大長12.0㎝、最大幅4.7㎝、最大厚3.9㎝を測る。No.91は、側部と上部が欠損する敲石であるが、下部に顕著な敲き痕が認められる。石材は、砂岩で、残存長9.25㎝、残存幅4.8㎝、最大厚4.5㎝を測る。No.92は、磨石としても兼用されていたような痕跡のある敲石で、下部にかなり激しい敲き痕が認められる。石材は、頁岩で最大長12.35㎝、最大幅5.8㎝、最大厚3.7㎝を測る。

2．Ｂ地区の遺物

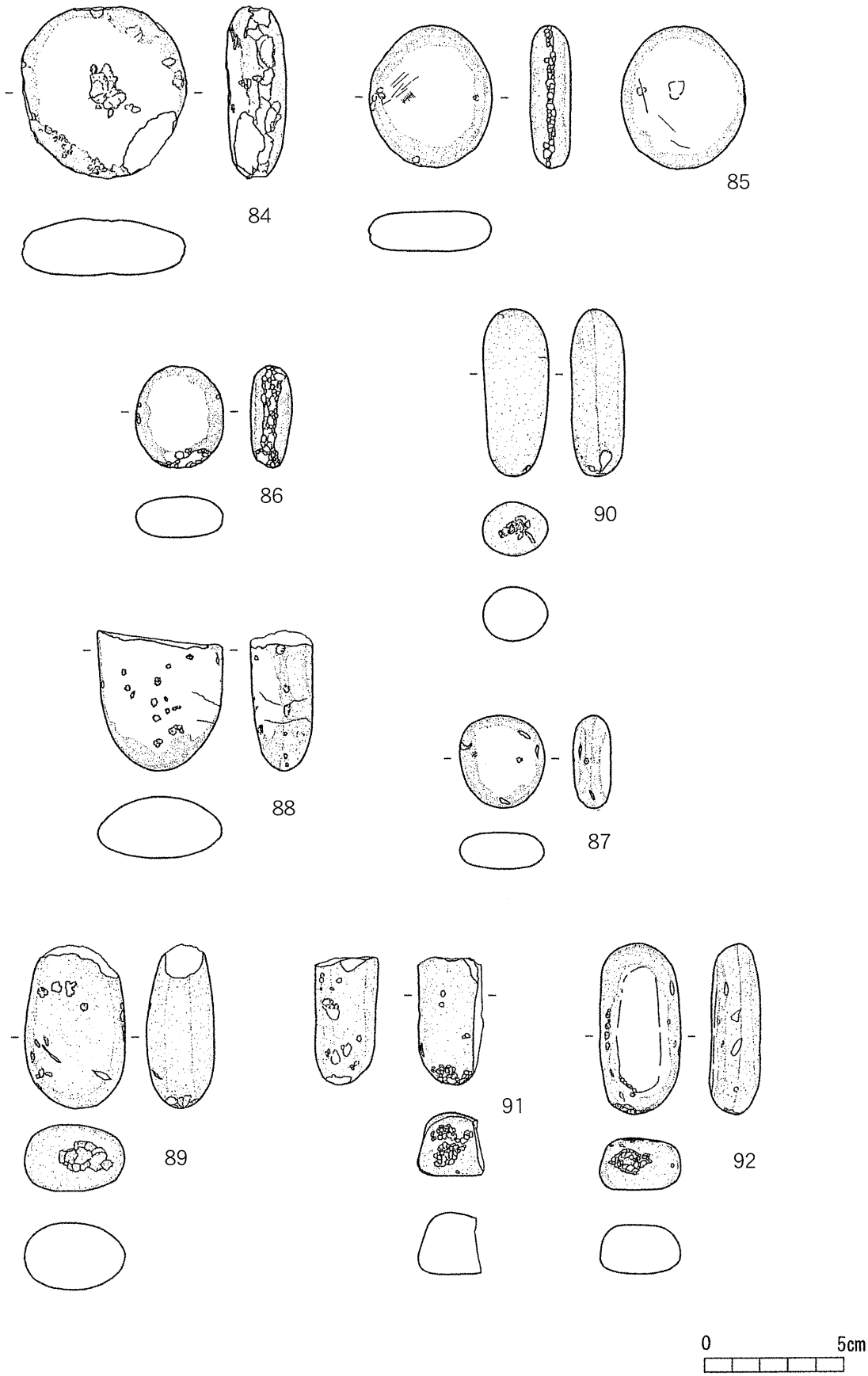
Ｂ地区から出土した遺物は、すでに造成されたこの地形に流れ込んだと思われる古銭と陶磁器片が数点検出されたが、特筆すべきものはないので本報告書には掲載しないこととする。

A地区出土遺物（その11）



第32図

A地区出土遺物（その12）



第33図

第３表　出土遺物観察表（土器その１）

掲載番号	遺物番号	出土地区	器種	部位	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	備考
1	1870	A区	角筒土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む"	良好	ナデ	ヘラナデ	7.5YR 5/4 にぶい褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	口唇部に刻み目 口縁部に３列の貝殻復縁刺突文 楔型突帯
2	1144	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	－	横方向のナデ	7.5YR 4/2 灰褐色	7.5YR 4/2 灰褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 口縁部直下は、押し引き
3	1370	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 雲母・長石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ	横方向のヘラナデ	5YR 3/3 暗赤褐色	5YR 4/4 にぶい赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
4	1362	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	7.5YR 3/1 黒褐色	7.5YR 4/2 灰褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 楔型突帯
5	G－5 グリッド	A区	深鉢型土器	胴部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ	ナデ	5YR 4/2 灰褐色	5YR 4/4 にぶい赤褐色	楔型突帯 突帯間に貝殻復縁刺突文
6	G－5 グリッド	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ	横方向のナデ	5YR 4/3 にぶい赤褐色	7.5YR 3/1 黒褐色	口唇部に刻み目 口縁部に３列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
7	1981	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	横方向のナデ	ヘラナデ 縦方向の条痕	7.5YR 3/2 黒褐色	7.5YR 3/1 黒褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 口縁部直下は、押し引き
8	1914	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ 横方向の貝殻条痕	ヘラナデ	10YR 3/2 黒褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に３列の貝殻復縁刺突文 １段の楔型突帯
9	1284 701	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ	口縁部付近はヘラナデ その直下は、ナデ	10YR 4/3 にぶい黄褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
10	1999	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	口縁部付近はヘラナデ その直下は、ナデ	7.5YR 4/3 褐色	7.5YR 4/3 褐色	口唇部に刻み目 口縁部に３列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
11	G－5 グリッド	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒、雲母を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	7.5YR 4/2 灰褐色	7.5YR 4/3 褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
12	1375	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	7.5YR 3/1 黒褐色	7.5YR 4/3 褐色	口唇部に刻み目 口縁部に３列の貝殻復縁刺突文 楔型突帯
13	1943	A区	深鉢型土器	胴部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	5YR 4/3 にぶい赤褐色	10YR 3/2 黒褐色	楔型突帯 突帯間に貝殻復縁刺突文
14	1912	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	－	ヘラナデ	7.5YR 3/2 黒褐色	5YR 4/4 にぶい赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に３列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
15	1648	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	10YR 3/2 黒褐色	7.5YR 3/1 黒褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 楔型突帯
16	1921	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ヘラナデ	7.5YR 3/2 黒褐色	7.5YR 4/3 褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
17	G－5 グリッド	A区	深鉢型土器	胴部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ヘラナデ	7.5YR 4/2 灰褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	楔型突帯
18	G－5 グリッド	A区	深鉢型土器	胴部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ヘラナデ	5YR 5/4 にぶい赤褐色	7.5YR 4/2 灰褐色	楔型突帯
19	1119 190	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 石英・角閃石を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	5YR 4/2 灰褐色	7.5YR 4/3 褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 楔型突帯
20	G－5 グリッド	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	10YR 4/2 灰黄褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	口唇部に刻み目 口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 楔型突帯
21	1870	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	7.5YR 3/1 黒褐色	5YR 3/2 暗赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 楔型突帯
22	1357	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 雲母・長石・石英を含む	良好	ナデ	横方向のナデ	7.5YR 4/3 褐色	2.5Y 3/1 黒褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 楔型突帯
23	1941	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・角閃石を含む	良好	ヘラナデ	ヘラナデ	7.5YR 4/3 褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 楔型突帯
24	751	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	5YR 4/3 にぶい赤褐色	5YR 4/4 にぶい赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
25	1930	A区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ヘラナデ	5YR 4/3 にぶい赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 楔型突帯

第４表　出土遺物観察表（土器その２）

掲載番号	遺物番号	出土地区	器種	部位	胎土	焼成	調整		色調		備考
							外面	内面	外面	内面	
26	13 ？？	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	－	ヘラナデ	2.5Y 3/1 黒褐色	7.5YR 4/3 褐色	口唇部に刻み目 口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 楔型突帯
27	1033 1034	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ 横方向の貝殻条痕	ヘラナデ	7.5YR 4/3 褐色	5YR 4/4 にぶい赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
28	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	底部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	5YR 5/4 にぶい赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	底部外面に刻み目
29	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	底部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	ヘラナデ	ナデ	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	底部外面に刻み目
30	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	底部	細砂粒、雲母を含む 長石を含む	良好	ナデ	ナデ	7.5YR 5/4 にぶい褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	底部外面に刻み目
31	1898	Ａ区	深鉢型土器	底部	細砂粒、雲母を含む 長石を含む	良好	－	－	5YR 5/4 にぶい赤褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	
32	1986	Ａ区	深鉢型土器	完形品	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ヘラナデ	7.5YR 4/2 灰褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に２列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
33	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ナデ	5YR 4/4 にぶい赤褐色	10YR 5/4 にぶい黄褐色	口唇部に刻み目 口縁部に３列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
34	1960	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ヘラナデ ヘラケズリ	10YR 4/2 灰黄褐色	7.5YR 4/2 灰褐色	口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 胴部は、斜位の貝殻条痕
35	1969	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英を含む	良好	斜位の貝殻条痕	ヘラナデ	7.5YR 4/2 灰褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 胴部は、斜位の貝殻条痕 補修孔の跡あり
36	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・角閃石を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ヘラナデ	7.5YR 4/2 灰褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 胴部は、斜位の貝殻条痕 補修孔の跡あり
37	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ヘラナデ	5YR 4/4 にぶい赤褐色	5YR 4/4 にぶい赤褐色	口唇部に刻み目 口縁部に３列の貝殻復縁刺突文 ２段の楔型突帯
38	1942	Ａ区	深鉢型土器	胴部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ	ヘラケズリ	7.5YR 4/2 灰褐色	5YR 4/3 にぶい赤褐色	斜位の連続した貝殻刺突文
39	1928 1864	Ａ区	深鉢型土器	胴部	細砂粒を含む 長石・角閃石を含む	良好	ナデ	ナデ	10YR 5/3 にぶい黄褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	貝殻復縁による押し引き
40	Ｇ－５ グリッド	Ａ区		胴部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	－	ナデ	7.5YR 3/1 黒褐色	5YR 4/4 にぶい赤褐色	連続する貝殻刺突文
41	1964	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ケズリ	7.5YR 3/1 黒褐色	7.5YR 4/2 灰褐色	口縁部に横方向の刺突文 胴部は、横方向の貝殻条痕 補修孔の跡あり
42	1949	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む	良好	－	ナデ	7.5YR 3/2 黒褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	口縁部に横方向の刺突文 胴部は、縦方向の刺突文 口縁部は、肥厚する
43	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	－	ナデ	7.5YR 4/2 灰褐色	10YR 4/2 灰黄褐色	口縁部に横方向の刺突文 胴部は、縦方向の刺突文 口縁部は、肥厚する
44	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	－	ケズリ	10YR 4/2 灰黄褐色	7.5YR 4/2 灰褐色	口縁部に横方向の刺突文 胴部は、縦方向の刺突文 口縁部は、肥厚する
45	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	底部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ	ナデ	10YR 3/2 黒褐色	2.5Y 4/1 黄灰色	底部外面に縦方向の刺突文 その上部は、横方向の刺突文
46	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	底部	細砂粒を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	－	7.5YR 4/3 褐色	7.5YR 4/3 褐色	縦方向の刺突文
47	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英を含む	良好	横方向の貝殻条痕	ヘラナデ	10YR 5/3 にぶい黄褐色	10YR 3/2 黒褐色	口縁部断面が逆くの字 腰部に貝殻復縁刺突文
48	1598	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒・雲母を含む	良好	ナデ	ケズリ	2.5Y 4/1 黄灰色	10YR 4/3 にぶい黄褐色	口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 胴部は、横方向の貝殻条痕
49	861	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒を含む 長石・石英・角閃石を含む	良好	ナデ	横方向の貝殻条痕	5YR 4/4 にぶい赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	口縁部断面が逆くの字 腰部に貝殻復縁刺突文 ３条の横方向の沈線
50	1816 1674	Ａ区	深鉢型土器	口縁部	細砂粒・雲母を含む 長石・角閃石を含む	良好	－	横方向の貝殻条痕	2.5Y 4/2 暗灰黄色	7.5YR 4/2 灰褐色	口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 胴部は、横方向の貝殻条痕

第５表　出土遺物観察表（土器その３）

掲載番号	遺物番号	出土地区	器　種	部　位	胎　　土	焼成	調　整		色　調		備　　考
							外　面	内　面	外　面	内面	
51	1853 1988	Ａ区	深鉢型 土　器	口縁部	細砂粒・雲母を含む	良好	ナデ	横方向の貝殻条痕	5YR 4/4 にぶい赤褐色	5YR 5/4 にぶい赤褐色	山形に隆起する口縁部 貝殻条痕
52	1668	Ａ区	深鉢型 土　器	口縁部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	横方向の貝殻条痕	7.5YR 4/3 褐色	7.5YR 4/3 褐色	山形に隆起する口縁部 貝殻条痕 腰部に横１条の沈線
53	Ｇ－５ グリッド	Ａ区	深鉢型 土　器	口縁部	細砂粒・雲母を含む	良好	ナデ	横方向の貝殻条痕	7.5YR 4/3 褐色	7.5YR 4/3 褐色	口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 その下位に横２条の沈線
54	1700	Ａ区	深鉢型 土　器	口縁部	細砂粒・雲母を含む 長石・角閃石を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	7.5YR 4/3 褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 その下位に横方向の貝殻条痕
55	1791 1784	Ａ区	深鉢型 土　器	口縁部	細砂粒・雲母を含む 長石・石英を含む	良好	ナデ	ヘラナデ	7.5YR 4/2 灰褐色	5YR 4/4 にぶい赤褐色	口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文 その下位に横方向の貝殻条痕
56	1628 1624	Ａ区	深鉢型 土　器	口縁部	細砂粒・雲母を含む 長石を含む	良好	ヘラナデ	横方向の貝殻条痕	7.5YR 4/3 褐色	10YR 3/2 黒褐色	口縁部に斜位の貝殻復縁刺突文

第６表　出土遺物観察表（石器）

掲載番号	遺物番号	出土地区	器　種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	石　材	備　　考
78	表採	Ａ区	剥片石器	6.35	3.8	1.35	28.6	チャート	
79	50	Ａ区	剥片石器	3.2	1.75	1.3	6.2	不　明	
80	84	Ａ区	石　鏃	3.15	2.3	0.65	2.2	チャート	
81	511	Ａ区	石　鏃	2.1	1.65	0.5	1.4	チャート	
82	42	Ａ区	石　鏃	2	1.45	0.95	2.2	不　明	
83	表採	Ａ区	剥片石器	2.45	1.3	0.6	2	チャート	
84	Ｇ－５グリッド	Ａ区	磨　石	12.4	11.7	6.25	800	砂　岩	
85	80	Ａ区	磨　石	10.2	8.85	2.85	385	砂　岩	
86	73	Ａ区	磨　石	7.35	6.3	2.95	170	砂　岩	
87	16	Ａ区	磨　石	6.7	6.2	2.7	160	チャート	
88	Ｇ－５グリッド	Ａ区	敲　石	10.1	8.95	4.45	510	砂　岩	
89	81	Ａ区	敲　石	11.8	7.15	4.85	535	砂　岩	
90	Ｇ－５グリッド	Ａ区	敲　石	12	4.7	3.9	300	砂　岩	
91	54	Ａ区	敲　石	9.25	4.8	4.5	300	砂　岩	
92	Ｇ－５グリッド	Ａ区	敲　石	12.35	5.8	3.7	405	チャート	

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　火山灰分析（株式会社 古環境研究所）

１．はじめに

南九州地方日南市域には、姶良カルデラや阿多カルデラさらに鬼界カルデラなど、南九州に分布する火山に由来する数多くのテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）の堆積が認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を露頭や遺跡で求めることで、地層や遺物さらに遺構などの年代を知ることができるようになっている。そこで、起源や年代の不明なテフラが認められた上城跡においても、採取された試料を対象に屈折率測定を行って、示標テフラとの同定を行うことになった。

２．屈折率測定

⑴　測定試料と測定方法

屈折率測定の対象となった試料は、発掘調査担当者により採取された試料（Ａ区Ⅱ層）である。屈折率測定の方法は、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による。

⑵　測定結果

屈折率の測定結果を、表１に示す。Ａ区Ⅱ層には、無色透明の火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの形態としては、平板状のバブル型のガラスが多く含まれており、ほかに軽石型ガラスも認められる。火山ガラスの屈折率(n)は、1.498-1.500である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.728－1.733である。これらのことから、このテフラは、2.4～2.5万年前*1に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良入戸火砕流堆積物（A-Ito，荒牧，1969，町田・新井，1976，1992，松本ほか,1987，池田ほか，1995）の可能性が非常に高いと考えられる。

*１　放射性炭素（^{14}C）年代.

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究. 第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」，p.138-148.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による^{14}C年代. 第四紀研究，34，p.377-379.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス. 東京大学出版会，276p.

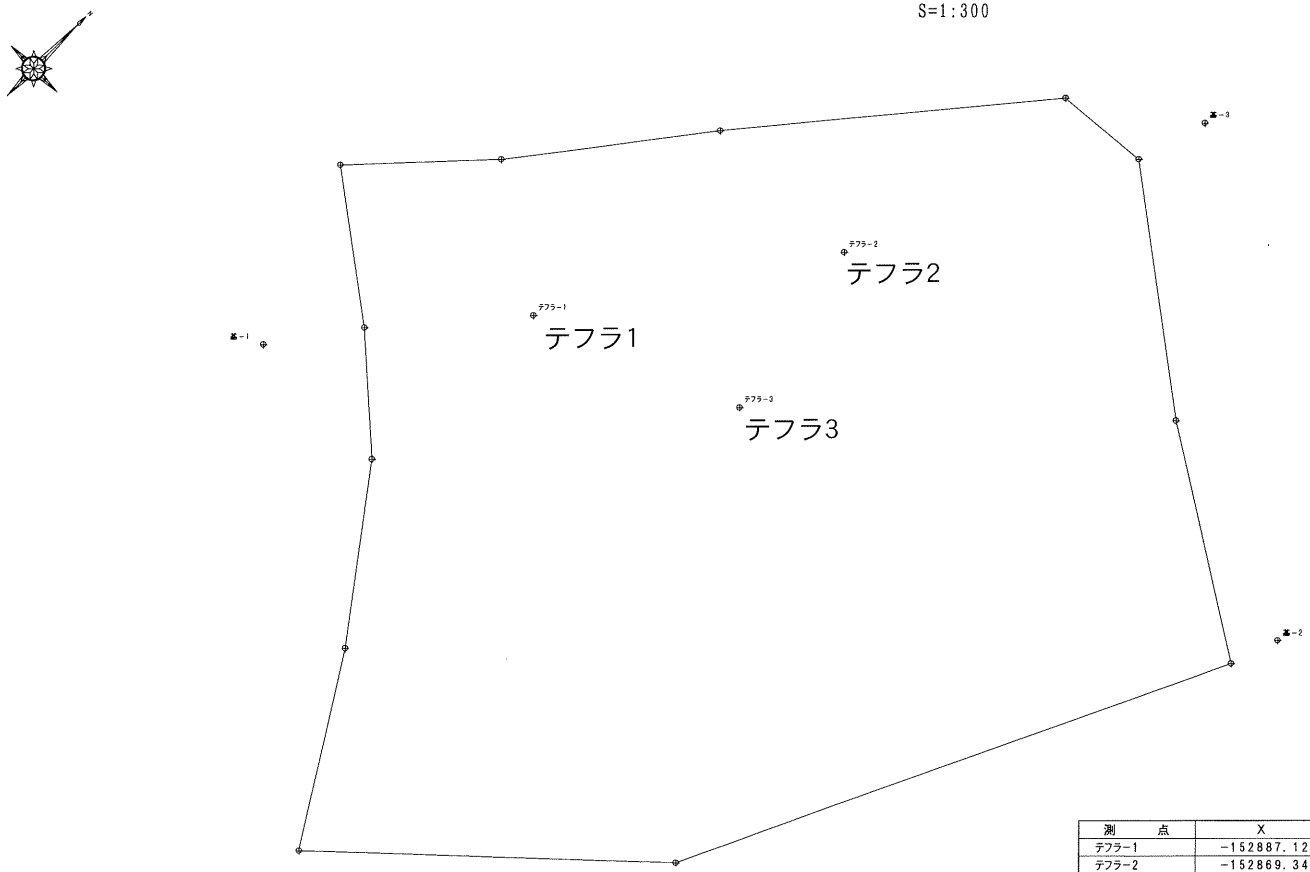
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代. 第四紀研究，26，p.79-　83.

表１　上城跡における屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス				重　鉱　物	
		量	形態	色調	屈折率(n)	組　成	屈折率
Ａ区	Ⅱ層	+++	bw>pm	透明	1.498-1.500	opx>cpx(ho)	opx：1.728-1.733

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．bw：バブル型，pm：軽石型ガラス．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．

テフラ分析用試料採取地点

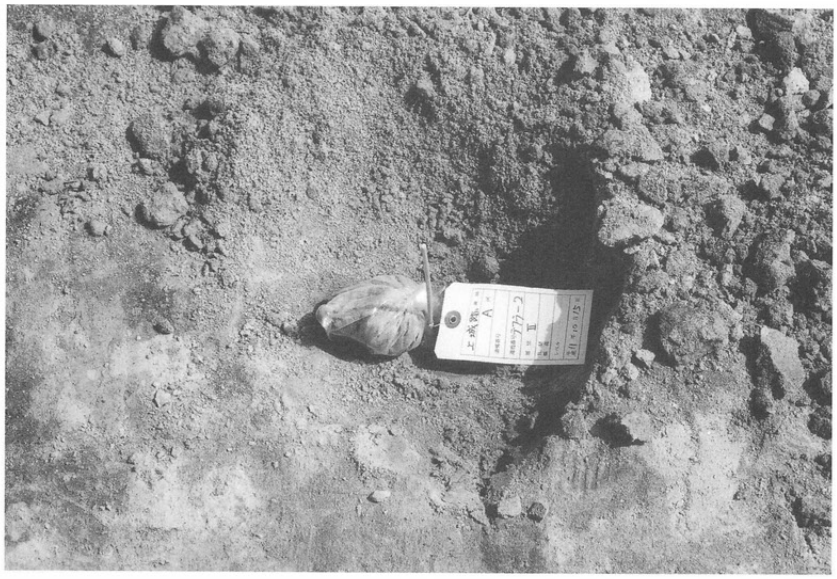


測　　点	X	Y
テフラ−1	−152887.129	33025.457
テフラ−2	−152869.341	33037.247
テフラ−3	−152881.715	33039.720

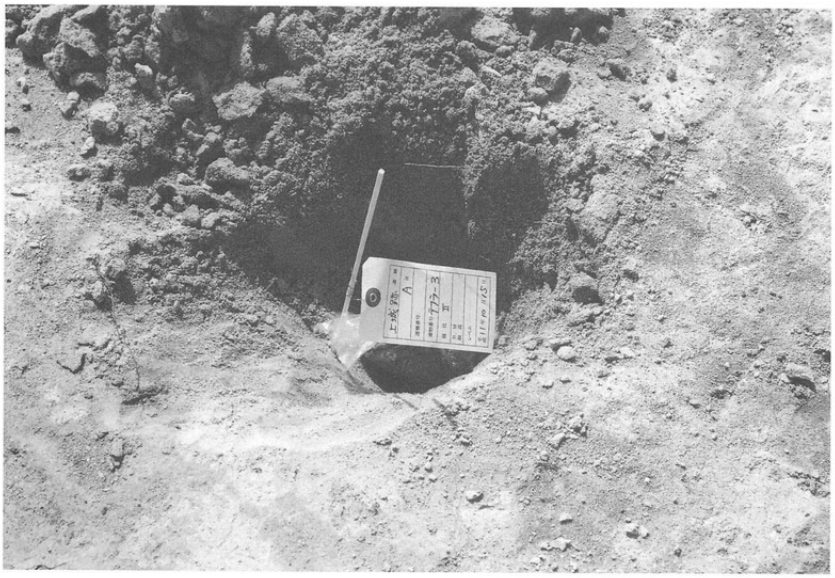
第34図

テフラ分析用試料採取状況

①テフラ１



②テフラ２



③テフラ３

図版２

第２節　古式須恵器の蛍光Ｘ線分析

１　はじめに

（大谷女子大学　　三辻利一）

20世紀初頭の放射線やＸ線に関する物理学的研究から、放射化分析法や蛍光Ｘ線分析法などの種々の分析方法が開発された。これらの方法を考古遺物に適用して考古学に有意な情報を引き出そうとする新しい研究が30年ほど前から、日本でも活発に行われるようになった。考古学者は当初、これらの新しい分析法で考古遺物を分析すれば、直ちに、考古学に役立つ情報が得られると勘違いした。自然科学者の多くも、そう勘違いした節がある。当時、開発されていたのは分析法であって、考古学への適用法はこの時点ではまだ、開発されていなかったのである。この点が勘違いされていたのである。したがって、土器を分析しても直ちに、産地が推定できる訳がなかったのである。土器の素材はどこにでもある粘土である。当然、土器の生産地は多いと考えられる。全国各地の多数の生産地の土器を分析しない限り、産地推定法を開発する糸口は見つからないであろう。生産地である窯跡が全国各地に残っており、そこから基礎研究のための土器片が大量に出土するのは須恵器しかない。須恵器は古代最大の窯業生産の産物であり、その窯跡は北限は青森県の五所川原窯群から、南限の徳之島のカムイヤキ窯群にいたるまで、全国には数千基の窯跡はあるといわれている。産地推定にはどの元素に着目して分析すればよいのか、また、産地を推定するにはどのようにすればよいのかといった基礎研究をする上に、須恵器ほど好条件を備えた古代土器は他にない。当然、全国各地の窯跡出土須恵器片を大量に分析するには１０年を越える長期間にわたる研究が必要であろうと筆者は考えた。予想通り、30年近くもかかって、須恵器産地推定法は出来上がった。すでに、10万点近い試料が分析されている。そして、この方法を使って、産地推定のデータも数多く、蓄積されている。胎土分析のデータを歴史研究にまで拡張しようとすると、さらに数多くの、産地推定のデータを蓄積しなければならない。このような意気込みで、筆者は年間、数千点のペースで分析作業を進めている。

須恵器産地推定法ができても、それをどのように適用していくかについてはまだ、確定した訳ではない。時代によって、生産地の数も違うし、生産と供給の仕方も異なるので、種々の適用法が考えられる。古墳時代には須恵器の大生産地は和泉陶邑だけで、地方の生産地の規模は小さい。地方窯周辺の古墳出土須恵器については、地元産か陶邑産かを問う２群間判別分析法が有効な一つの方法であることを筆者は提案した。この方法で陶邑産の古式須恵器が全国各地の古墳へ供給されていることが示された。同時に、地方窯の製品は畿内へは供給されていないことも示された。陶邑産の古式須恵器は一方的に地方の古墳へ供給されていたことは、古式須恵器は政治色の強い土器であることを示している。九州では陶邑産の古式須恵器が最も多く検出されているのは福岡県である。それについで、佐賀県、大分県と宮崎県があげられる。宮崎市には松ヶ迫窯という古い須恵器窯が見つけられているが、出土破片の量は少ない。それと呼応するように、宮崎県内の遺跡からも松ヶ迫窯の製品は検出されていない。宮崎市周辺の古墳から今後出土する可能性は十分あると考えられるが、他の地域にまで供給するほどの生産力はもっていなかったと推察される。宮崎県は西都原古墳群にみられるように、古墳の数も多い。しかし、須恵器窯の数は福岡県、熊本県、大分県に比べて非常に少ないことは興味深い。このことは古代史の上では重要な意味をもっていると考えられる。このことと関連して、宮崎県内の古墳や住居跡から出土する古式須恵器は何処から供給されたものかは興味のあるところである。本報告では、日南市の狐塚古墳はじめ、２，３の遺跡出土の古式須恵器の蛍光Ｘ線分析の結果について報告する。

２　分析法

須恵器片試料はまず、表面を研磨して付着物を除去したのち、タングステンカーバイド製の乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末にするのは試料を均質化するためである。つぎに、一定形状の測定用試料

を作成するため、粉末試料を塩化ビニル製のリングを枠にして高圧をかけてプレスし、内径20㎜、厚さ５㎜の錠剤試料を作成した。蛍光Ｘ線分析は相対分析であり、そのために、標準試料を含めて、すべての試料は一定形状にすることが必要である。錠剤試料は蛍光Ｘ線分析用の小型試料容器に固定された。48個の小型試料容器は自動試料交換機に並べられた。48試料中の１個は必ず、標準試料としての岩石標準試料、JG-1である。JG-1を含む多くの標準試料は日本地質調査所で調整されており、ケイ酸塩系の試料の標準試料として、広く使用されている。標準試料とはすでに、多くの含有元素の分析値が多くの研究者によってだされており、かつ、その分析値が公表されている試料である。

分析値は標準試料と実試料の蛍光Ｘ線強度の比較から求められ、通常、％やppm濃度で表示される。しかし、土器の産地推定のように、指紋分析をする場合には蛍光Ｘ線強度の比較だけで十分である。筆者は蛍光Ｘ線強度の比較からJG-1による標準化値を求め、データ解析を行っている。本報告でもその方法が使用された。

3　分析結果

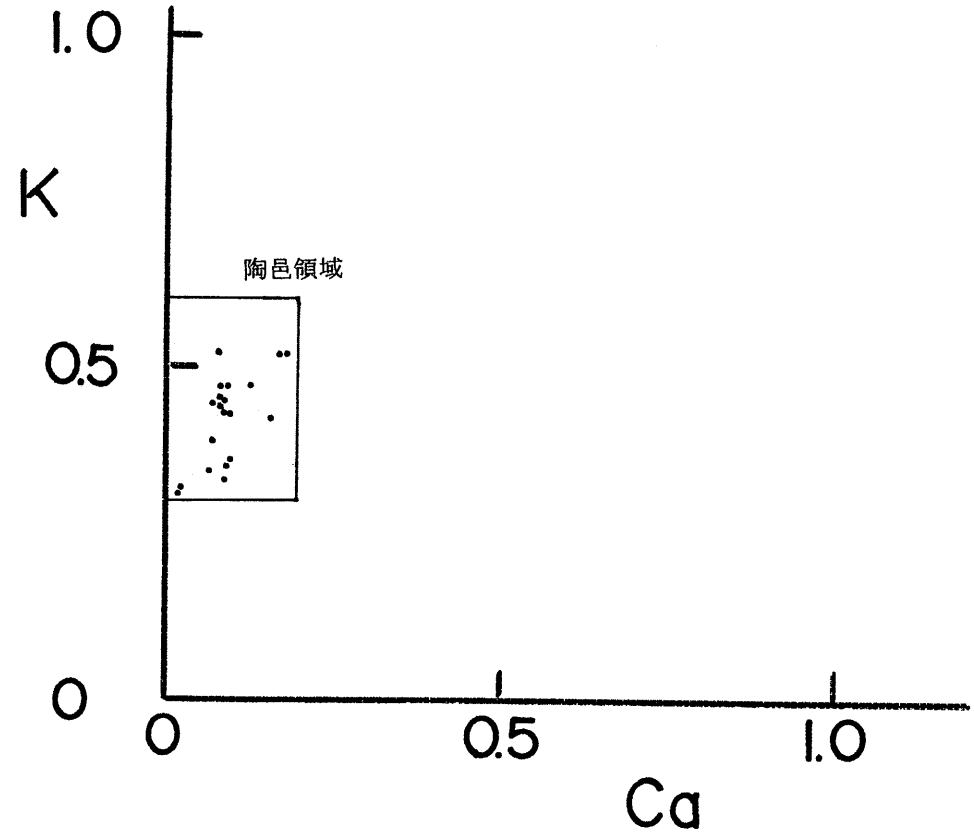
今回分析した試料の分析データは表１にまとめられている。全分析値はJG-1による標準化値で表示されている。このままでは分析データは理解し難い。図形化して考察を進める。通常、K-Ca、Rb-Srの両分布図が作成される。全国各地の窯跡出土須恵器を大量に分析した結果、K、Ca、Rb、Srの４元素が有効に地域差を表すことが見つけられたからである。今回分析した狐塚古墳出土の古式須恵器の両分布図を図１に示す。両図には陶邑領域を描いてあるが、これは陶邑内の50基ほどの窯跡から任意に選択した145点の試料を包含するようにして描いたものである。全国どこの窯群の須恵器も窯群ごとに、このように両分布図ではまとまって分布する。そして、その分布領域が地域によって異なる。つまり、地域差がある訳である。当然、地方窯周辺の古墳から陶邑産の須恵器が出土すれば、両分布図で陶邑領域に分布するはずである。このように、産地推定とは指紋合わせのようにして、生産地（窯群）に対応させるのである。それで指紋分析という。そして、有効に地域差を表す上記、４元素を指紋元素と呼ぶ。図１をみると、狐塚古墳の古式須恵器はほとんどが両分布図において陶邑領域に対応し、陶邑産の須恵器である可能性が高いことを示している。この可能性を確認するために、通常、２群間判別分析が行われる。この方法では産地の可能性がある二つの母集団を選択し、両母集団の全試料について両群の重心からのマハラノビスの汎距離という統計学上の距離を指紋元素を使って計算する。各重心から正負の両方向にある等距離を等価に扱うため、二乗して負符号を消去して使用するのが普通である。１群、２群からのマハラノビスの汎距離の二乗値をD^2（1）、D^2（2）とかく。上記の計算の結果はD^2（陶邑）、D^2（松ヶ迫）を両軸にとった両対数方眼紙上にプロットされる。この図を判別図という。この図上に両群の領域をえがき、古墳出土須恵器がこの領域内に分布するかどうかで産地が推定される。この領域を決めるために、各母集団の試料は５％の危険率をかけたホテリングのＴ２検定にかけられる。その結果、得られた条件がD^2（X）＜10である。（X）は母集団名である。これが（X）母集団に帰属するための必要条件である。さらに、両群の全試料の分布から十分条件も求められる。この判別分析の結果は図２に示されている。また、上に説明したようにして、この図における陶邑領域も示してある。そうすると、狐塚古墳の須恵器はすべて、陶邑領域に分布し、松ヶ迫領域に分布する試料は１点もないことがわかる。図１から予想されたように、陶邑産と推定された訳である。つぎに、他の遺跡出土の古式須恵器の両分布図を図３に示す。K-Ca分布図ではNo.１，３，６が、また、Rb-Sr分布図でもNo.１，３，４，６の４点が陶邑領域をずれることがわかる。これらの試料の判別分析の結果は図４に示されている。図３からも予想されるように、No.１，３，４，６の４点の試料は陶邑領域をずれ、陶邑産ではないことを示す。D^2（陶邑）、D^2（松ヶ迫）の計算値も表１に示してある。D^2（X）＜10の条件で陶邑産であることを判定した。上城遺跡の５点の試料のうち、No.３，４，６の３点が産地不明となった。また、曽和田遺跡のNo.１の試料はD^2

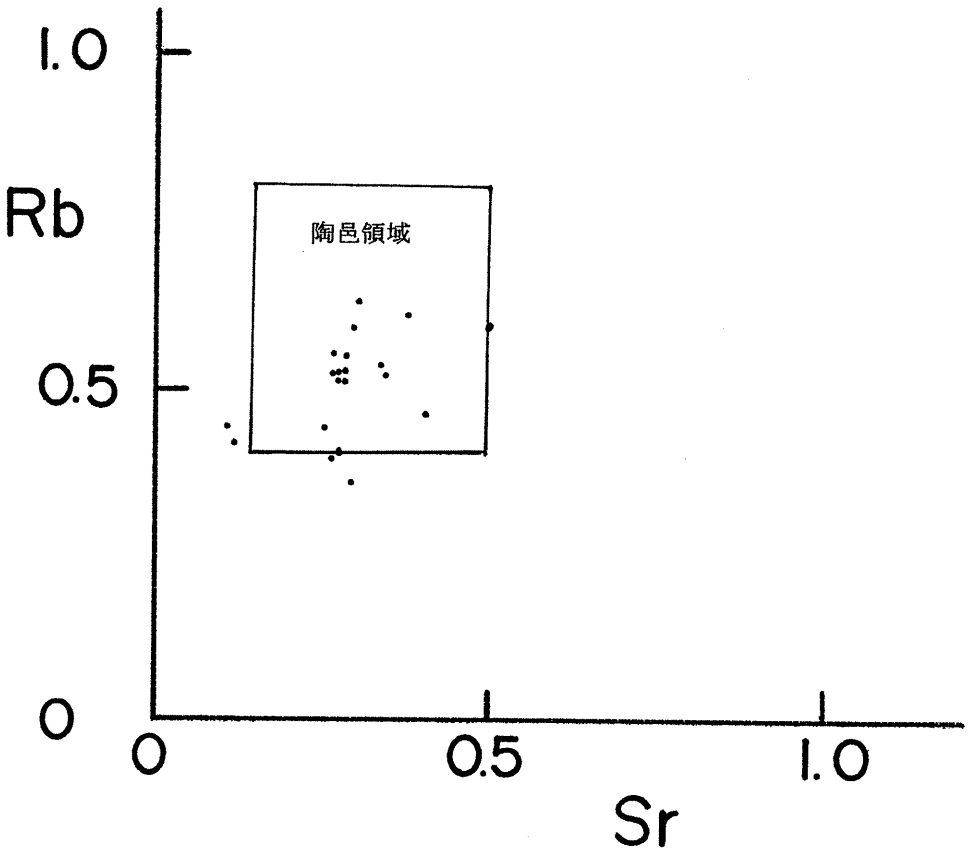
（陶邑）＜10を満足するものの、判別図での分布位置が陶邑領域ではないので、産地不明とした。図３の両分布図をみると、No.１，３，４の３点の試料は近接して分布しており、さらに、Fe、Na因子でも類似しており、同一産地の製品である可能性が高い。今後、この生産地が何処かを探査することが必要である。そのためにも、土器型式などの考古学的観察の比較も必要であろう。産地推定の結果から、狐塚古墳と大園遺跡の須恵器はすべて、陶邑産であり、上城遺跡の須恵器の中に、産地不明の須恵器が多いことは一体、何を意味するのだろうか？　さらに、曽和田遺跡と上城遺跡の須恵器の中に、同一産地の製品と推定される須恵器が含まれていることは一体、何を示唆しているのだろうか？　このような視点から、未分析の古式須恵器の胎土分析を進めることによって、新たな展望が開かれることと思われる。これが胎土分析の研究である。

第７表　古式須恵器の分析データ一覧表

遺　跡　名	資料ナンバー	K カリウム	Ca カルシウム	Fe 鉄	Rb ルビジューム	Sr ストロンジューム	Na ナトリウム	D^2 (陶　邑)	D^2 (松ヶ迫)	生産地 推定結果
曽和田遺跡	1	0.605	0.174	1.67	0.703	0.565	0.461	8.70	6.2	不　明
上城跡遺跡	2	0.408	0.184	3.52	0.546	0.355	0.204	6.90	192.0	陶　邑
上城跡遺跡	3	0.642	0.256	1.45	0.813	0.503	0.324	13.60	197.0	不　明
上城跡遺跡	4	0.573	0.133	1.67	0.681	0.528	0.409	11.50	10.3	不　明
上城跡遺跡	5	0.417	0.161	3.41	0.531	0.334	0.209	3.90	108.0	陶　邑
上城跡遺跡	6	0.264	0.096	2.49	0.400	0.243	0.089	12.60	117.0	不　明
狐塚遺跡	7	0.341	0.066	2.20	0.436	0.255	0.134	4.70	35.1	陶　邑
狐塚遺跡	8	0.360	0.098	2.65	0.399	0.281	0.166	4.60	34.5	陶　邑
狐塚遺跡	9	0.321	0.020	2.44	0.441	0.111	0.064	5.30	80.0	陶　邑
狐塚遺跡	10	0.518	0.182	2.80	0.594	0.501	0.485	3.50	35.1	陶　邑
狐塚遺跡	11	0.418	0.163	2.66	0.456	0.409	0.335	5.20	67.0	陶　邑
狐塚遺跡	12	0.354	0.093	2.66	0.392	0.273	0.173	4.90	35.0	陶　邑
狐塚遺跡	13	0.485	0.069	3.63	0.545	0.267	0.174	2.40	56.8	陶　邑
狐塚遺跡	14	0.516	0.172	3.06	0.609	0.376	0.220	2.60	51.7	陶　邑
狐塚遺跡	15	0.439	0.079	2.41	0.510	0.285	0.221	1.00	26.9	陶　邑
狐塚遺跡	16	0.427	0.101	2.02	0.518	0.351	0.289	2.30	12.4	陶　邑
狐塚遺跡	17	0.446	0.081	2.45	0.511	0.280	0.222	0.96	27.7	陶　邑
狐塚遺跡	18	0.444	0.070	2.27	0.519	0.271	0.170	1.20	37.1	陶　邑
狐塚遺跡	19	0.445	0.079	2.31	0.523	0.273	0.198	0.80	28.8	陶　邑
狐塚遺跡	20	0.471	0.079	2.40	0.546	0.288	0.195	1.20	34.1	陶　邑
狐塚遺跡	21	0.313	0.018	2.44	0.420	0.116	0.052	5.50	80.8	陶　邑
狐塚遺跡	22	0.520	0.078	1.97	0.634	0.305	0.281	2.80	50.3	陶　邑
狐塚遺跡	23	0.326	0.091	2.54	0.362	0.298	0.146	9.00	41.0	陶　邑
狐塚遺跡	24	0.468	0.126	2.70	0.594	0.304	0.199	1.10	31.5	陶　邑
狐塚遺跡	25	0.469	0.087	2.41	0.525	0.292	0.205	1.10	27.5	陶　邑
狐塚遺跡	26	0.445	0.079	1.90	0.535	0.339	0.263	3.00	23.0	陶　邑
影平遺跡	27	0.495	0.134	2.18	0.604	0.400	0.296	0.68	9.8	陶　邑
大園遺跡	28	0.463	0.140	2.26	0.537	0.382	0.273	0.88	20.0	陶　邑
大園遺跡	29	0.482	0.063	2.54	0.500	0.262	0.087	3.80	75.2	陶　邑
大園遺跡	30	0.413	0.063	2.70	0.525	0.252	0.133	1.10	35.6	陶　邑
大園遺跡	31	0.412	0.063	2.63	0.528	0.240	0.130	1.00	36.9	陶　邑

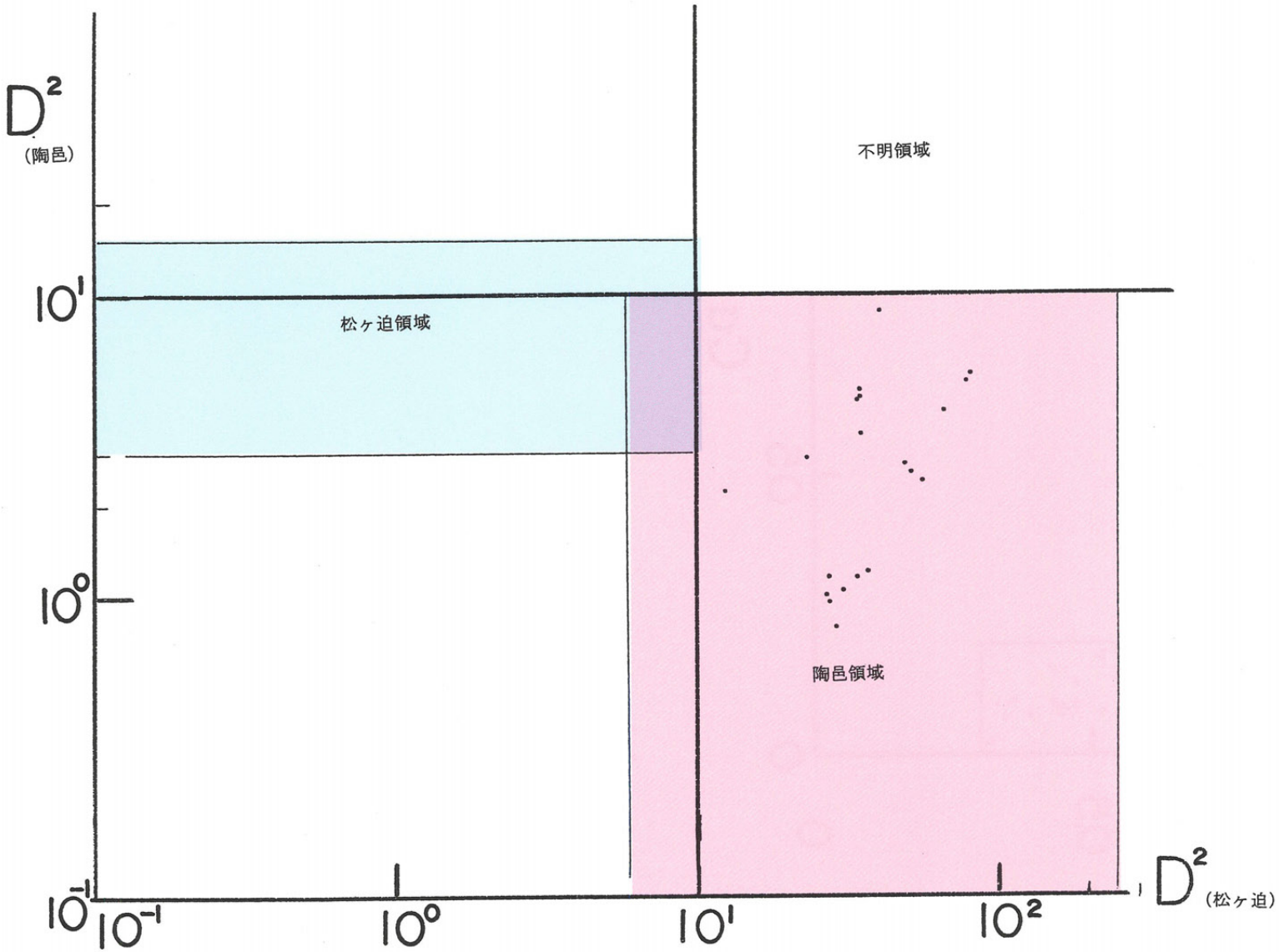
狐塚古墳出土古式須恵器の両分布図





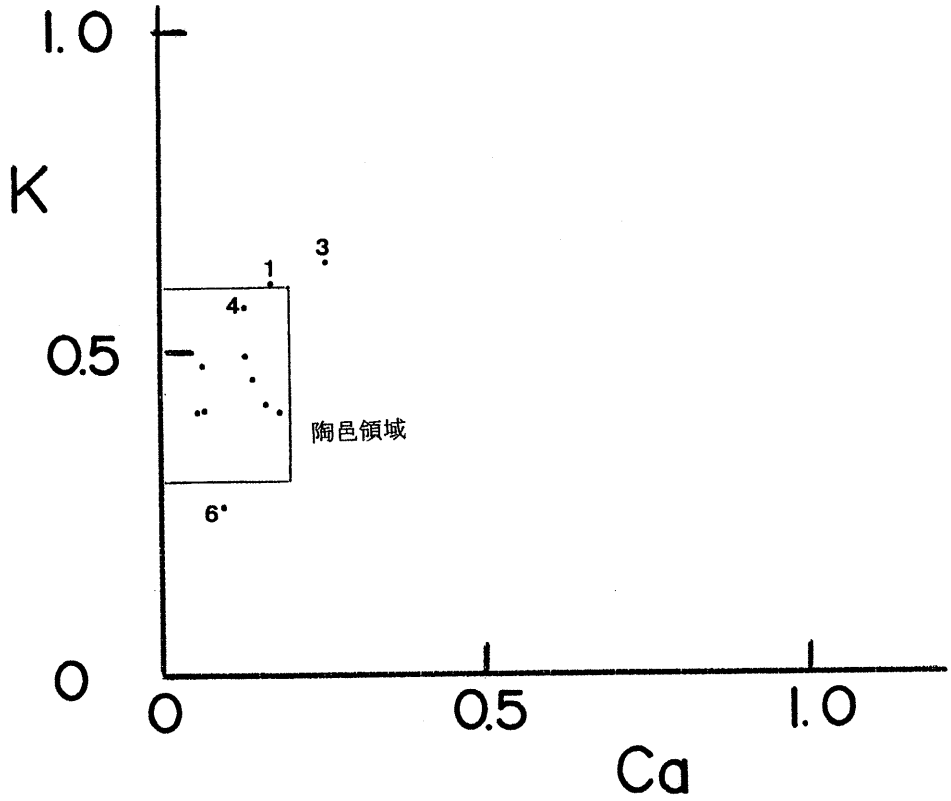
第35図

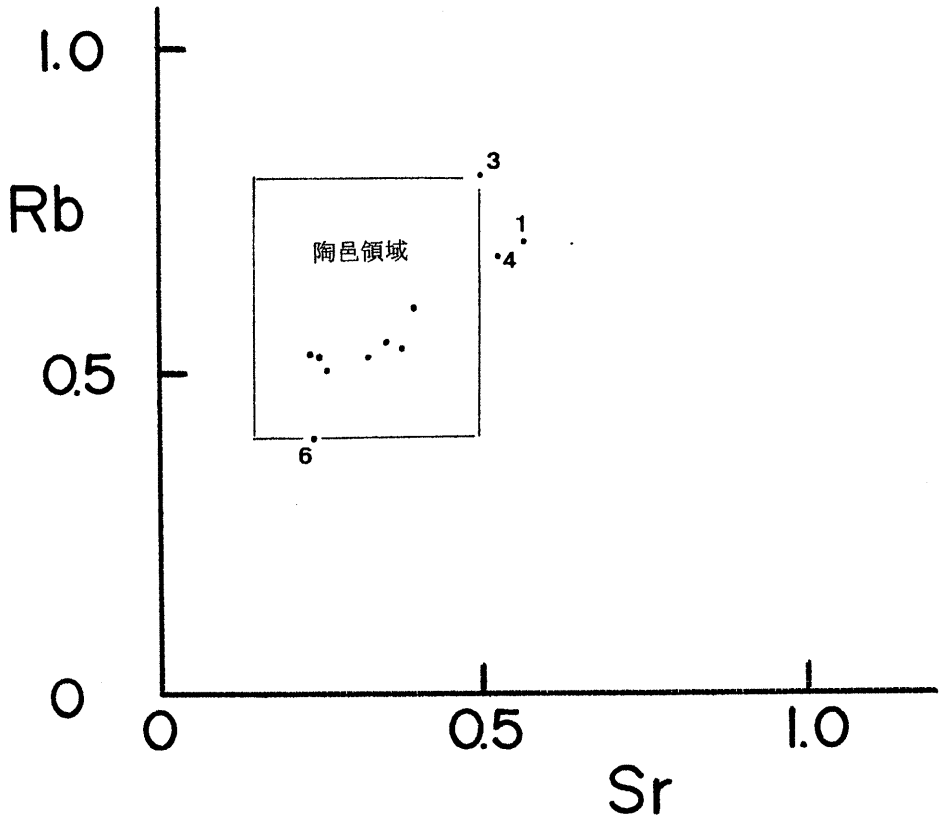
狐塚古墳出土古式須恵器の判別図



第36図

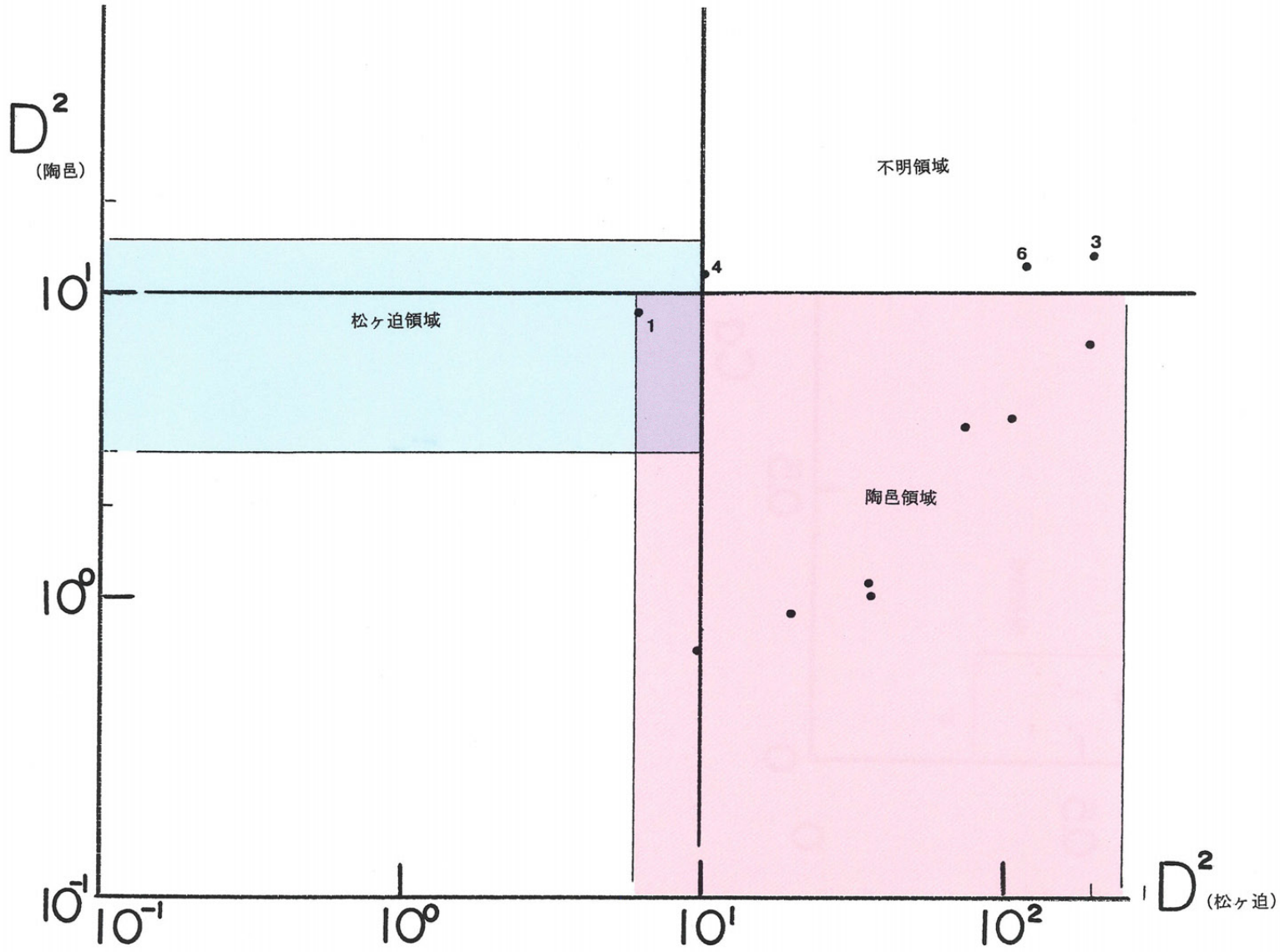
上城跡遺跡及びその他の遺跡出土古式須恵器の両分布図





第37図

上城跡遺跡及びその他の遺跡出土古式須恵器の判別図



第38図

第Ⅴ章　まとめにかえて

第１節　遺構

本遺跡からは、中世の堀立柱建物が７棟と縄文時代早期の集石遺構３基が検出された。

堀立柱建物は、その棟軸と形態から２タイプに分けられる。まず一つ目は、東軸を東西にとり１軒＊２軒からなるものである。これは、主に１号堀立柱建物から６号堀立柱建物までが該当する。もうひとつのタイプは、軸棟を南北にとり１軒＊３軒のタイプとなる。これらの堀立柱建物の柱穴内からは、時代を確定させるべき遺物は検出できなかったが、前述の資料から中世の城跡に関連する堀立柱建物であろうと思われる。上城跡は、伊東氏と島津氏が飫肥城の支配権を巡って度々その合戦の舞台として登場してくるが、城跡本体部分は、既に墓地として造成済みであったため今回検出された堀立柱建物は、関連した建物ではないかと思われる。

集石遺構については、３基検出されたが１号及び２号集石遺構については散石に近い状態での検出にとどまった。３号集石遺構のみ原型で検出されたが、堀込みや敷石などを有したものではなかった。日南市内では、これまで川辺ヶ野遺跡で７基ほどのタイプ別の集石遺構が検出できている。今後の資料の増加を待って本市における集石遺構の考察は行うこととしたい。

第２節　遺物

本遺跡からは、縄文時代早期、後期、中・近世の遺物が主体として検出された。以下時代別にまとめることとしたい。

縄文時代早期については、貝殻文系の土器が主に出土した。Ⅰ類、Ⅲ類、Ⅳ類はいわゆる加栗山式土器として捉えてよいのではないかと思われる。Ⅰ類は、１点しか検出されていないが、その施文方法や器壁が非常に薄いこと等から加栗山式土器の角筒土器の特徴そのものを備えているものではないかと思われる。Ⅲ類とⅣ類は、便宜上器壁の厚さにより分類をしたが、その施文方法から加栗山式土器の円筒土器の範疇に含まれるのではないかと思われる。また、Ⅴ類のNo.31を除いては、底部外面に縦方向の沈線を施す施文方法から、この加栗山式土器の底部ではないかと思われる。

第Ⅱ類は、施文方法が貝殻復縁の押し引きによることから、吉田式土器の範疇に含まれるのではないかと思われる。

第Ⅵ類は、口縁部に貝殻復縁による刺突文を施し、その下部に貝殻条痕を施文することから前平式土器の範疇に含まれるのではないかと思われる。

第Ⅶ類時は、刺突文と貝殻復縁による施文を組み合わせるものであるが、いわゆる下剥峯式土器の範疇に含まれるのではないか。宮崎県内及び隣接する鹿児島県内の遺跡縄文時代早期の遺跡では、加栗山式土器や吉田式土器、前平式土器などと共伴して出土することのある形式の土器である。

加栗山式土器の指標となった加栗山遺跡では、この型式の土器は竪穴住居や連結土坑などが同時に検出されており、拠点・中核的機能を備えた遺跡との位置づけができるが、本遺跡からは、そういった遺構の検出はされず今後の調査による資料の増加を待ちたい。

本市において縄文時代早期の貝殻文系土器が系統的に出土した例は、今回が初めてである。宮崎市から清武町、田野町にかけては、連結土坑や集石遺構を備えた遺跡が検出されている。大隅半島における縄文時代早期の遺跡の空白地帯となっていた本市においては、今回の調査結果は、非常に貴重な発見といえる。ただし、基地機能を有した遺跡とまではいかなかったのが残念である。

縄文時代後期の市来式土器については、1995年調査の「上講遺跡」にてまとまった形で出土しており、その報告書の中では施文方法や口縁部の形態から10タイプに分けて記述してある。本報告書でも４タイプに分けて

記述しているが、「上講遺跡」も本遺跡も攪乱層からの検出となっている。従って、遺構などを伴っていないのでタイプの違いが時期差によるものか地域差によるものか言及は、今後の本市の資料の増加を待つこととしたい。

中・近世の陶磁器類については、小さな破片を合わせると2000点以上にもなるが、形式的に分類できる遺物は、わずかであった。特徴的なものを本報告書には、掲載した。

Ⅰ類の青磁では、No.61，No.62が15世紀頃ではないかと思われる。その他の青磁については、蓮弁文の施文法などから17世紀～18世紀までのものと思われる。 Ⅱ類の陶磁器では、No.64～No.67は、薩摩焼で特にNo.65とNo.66は、その京都焼模倣のものではないかと思われる。この遺物と同系統のものが本市の堂之元遺跡から検出されている。No.71は、その器形や金色の染色を使用すること底部に「有田」の文字があることなどから19世紀後半の磁器である。Ⅲ類の染付は、No.76の小皿を除いた碗すべては、肥前系磁器で器形や施文から17世紀半ばから後半にかけて染付である。

石器については、出土地点や層位がまちまちであるため時代の断定は、むずかしいが共伴する土器などから考慮すると縄文時代早期ないしは、縄文時代後期のものではないかと思われる。

この他、本遺跡からは須恵器の破片なども検出された。本報告書を刊行するにあたり、大谷女子大学の三辻教授のご厚意によりその胎土分析を行うことができた。分析結果については、三辻氏がその分析結果の中に述べてあるとおりで筆者が付け加えることはない。今後は、本市を含めた県内の胎土分析結果資料が更に増加し、研究の一助となることを願って本報告書の締めとしたい。

《参考文献》

九州近世陶磁器学会　2002年　『九州陶磁の編年』「九州近世陶磁学会10周年記念」

鹿児島県教育委員会　1977年　『桑ノ丸遺跡－九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』

鹿児島県教育委員会　1982年　『小山・谷ノ口・宮後・上城城跡』「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（20)』

鹿児島県教育委員会　1981年　『加栗山遺跡－九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』

加世田市教育委員会　1977年　『栫ノ原遺跡』「加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書」

知覧町教育委員会　1983年　『永野遺跡』「知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書」

指宿市教育委員会　1978年　『岩本遺跡』「指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書」

志布志町教育委員会　1984年　『倉園Ｂ遺跡』「志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（７)」

西之表市教育委員会　1978年　『赤木遺跡・下剥峯遺跡・大四郎遺跡・内和遺跡』「西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書」

宮崎県教育委員会　1983年　『前平地区遺跡』「宮崎県文化財調査報告書　第26集」

田野町教育委員会　1985年　『芳ヶ迫第２遺跡　芳ヶ迫第３遺跡・札ノ元遺跡』「田野町埋蔵文化財発掘調査報告書　第２集」

田野町教育委員会　2002年　『スグノ山第２遺跡Ｆ地区』「田野町埋蔵文化財発掘調査報告書　第４３集」

宮崎県埋蔵文化財センター　1998年　『荒迫遺跡』「宮崎フリーウェイ工業団地造成事業に伴う発掘調査報告書」

宮崎県埋蔵文化財センター　1998年　『市位遺跡』「希望ヶ丘西区画整理事業に伴う発掘調査報告書」

宮崎県埋蔵文化財センター　1999年　『牧の原第２遺跡』「総合農業試験場畑作園芸支場整備事業に伴う発掘調査報告書」

宮崎県埋蔵文化財センター　1999年　『内屋敷遺跡』「県立小林高等学校生徒寮建設に伴う発掘調査報告書」

宮崎県埋蔵文化財センター　1999年　『鶴野内中水流遺跡』「特定交通安全施設整備事業に伴う発掘調査報告

書」
宮崎県埋蔵文化財センター　1999年　『神殿遺跡Ｂ，Ｃ地区、南平第３遺跡、南平第４遺跡、中ノ原遺跡』「一般国道218号線高千穂バイパス建設に伴う発掘調査報告書」
宮崎県埋蔵文化財センター　2000年　『上の原第２遺跡、上の原第１遺跡、上の原第４遺跡、白ヶ野第３遺跡Ａ地区』「時屋地区農地保全整備事業に伴う発掘調査報告書」
宮崎県埋蔵文化財センター　2000年　『竹ノ内遺跡』「一般県道清武インター線道路改良事業に伴う発掘調査報告書」
宮崎県埋蔵文化財センター　2002年　『柿迫遺跡・龍泉寺遺跡』「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第54集」
宮崎県埋蔵文化財センター　2002年　『本城跡』「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第60集」
宮崎市教育委員会　1998年　『二月田遺跡、芋字遺跡』「県営担い手育成基盤事業　富吉地区に伴う発掘調査報告書」
宮崎市教育委員会　1999年　『熊野第２遺跡』
宮崎市教育委員会　1999年　『東宮遺跡』「東宮土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書」
宮崎市教育委員会　1999年　『下郷遺跡』
宮崎市教育委員会　2000年　『黒太郎遺跡』
都城市教育委員会　1995年　『丸谷地区遺跡群　上大五郎遺跡』「丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書」
都城市教育委員会　1996年　『加治屋遺跡２』
都城市教育委員会　1996年　『丸谷地区遺跡群　中大五郎第１遺跡、中大五郎第２遺跡、本池遺跡、前畑遺跡』「丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書」
都城市教育委員会　1997年　『大浦遺跡』「道路建設事業「臨時地方道整備事業」に伴う発掘調査報告書」
鹿児島県立埋蔵文化財センター　1997年　『神野牧遺跡』「県道鹿屋環状線改修工事に伴う発掘調査報告書」
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2000年　『沖田岩戸遺跡』「高柳中小河川改修工事に伴う発掘調査報告書」
鹿児島県立埋蔵文化財センター　1996年　『小牧３Ａ遺跡・岩本遺跡』「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書15」
鹿児島市教育委員会　2001年　『大龍遺跡』「鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（32・33）」
日南市教育委員会　1995年　『上講遺跡』「日南市埋蔵文化財発掘調査報告書　第５集」
日南市教育委員会　1998年　『大園遺跡』「農村資源活用農業構造改善事業日南市都市農村交流センター建設に伴う発掘調査報告書」
日南市教育委員会　1999年　『堂之元遺跡、川辺ヶ野遺跡、上鶴遺跡、木落遺跡』「九州電力株式会社宮崎支店66kv飫肥～福島線送電線新設工事に伴う発掘調査報告書」
日南市教育委員会　2001年　『楠原坂ノ上遺跡』「日南市埋蔵文化財発掘調査報告書　第14集」

上城跡遺跡　着工前　全景

図版３

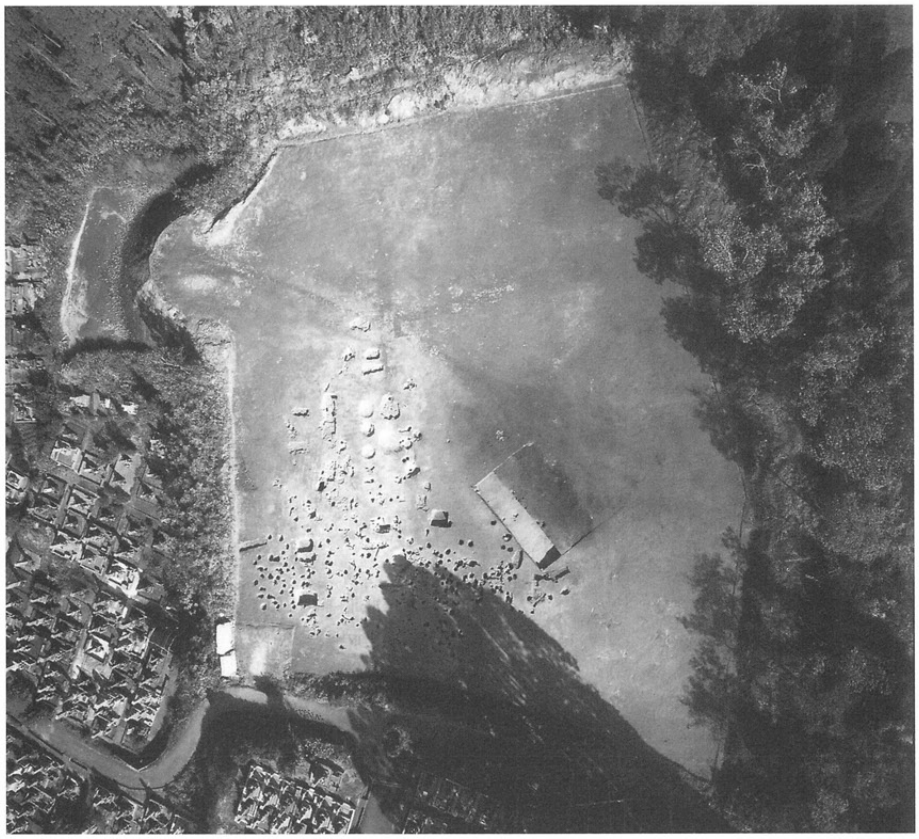
上城跡遺跡　Ａ地区　着工前

図版４

上城跡遺跡　着工後　全景

図版５

上城跡遺跡　Ａ地区　着工後



図版６

Ａ地区　樹根等除去作業状況

①樹根掘り起こし状況前

②樹根掘り起こし直後の状況

③樹根の埋土に包含される遺物の検出

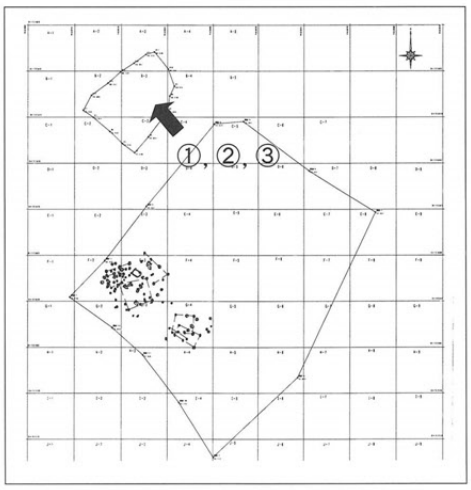
図版７

B地区　遺構・遺物検出状況

①B地区　着工前

②B地区　着工前　遠景

③B地区　着工前　近景



図版8

Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況（その１）

Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況　全景

Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況　近景

Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況　近景

図版９

Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況（その２）

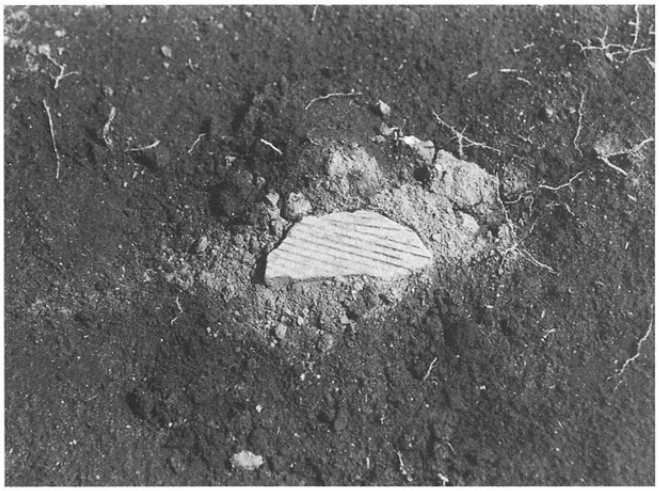
Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況　近景

Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況　近景

Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況　近景

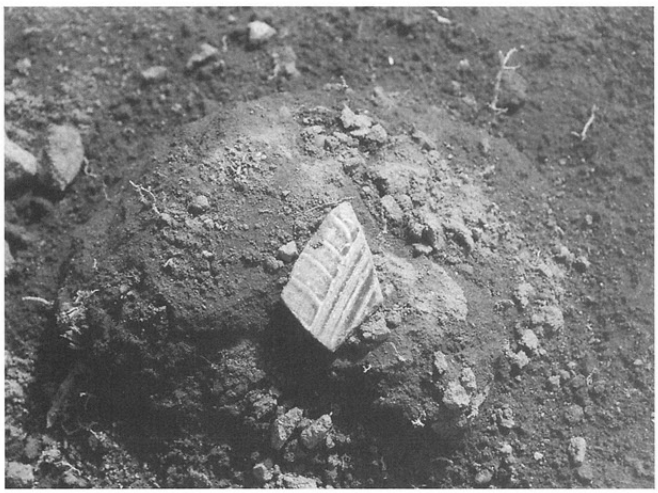
図版10

Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況（その３）



Ａ地区　Ⅰ層目　石検出状況

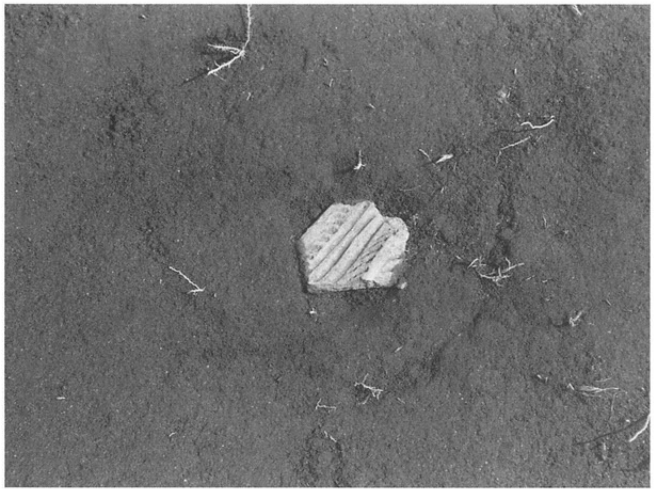
Ａ地区　Ⅰ層目　石検出状況



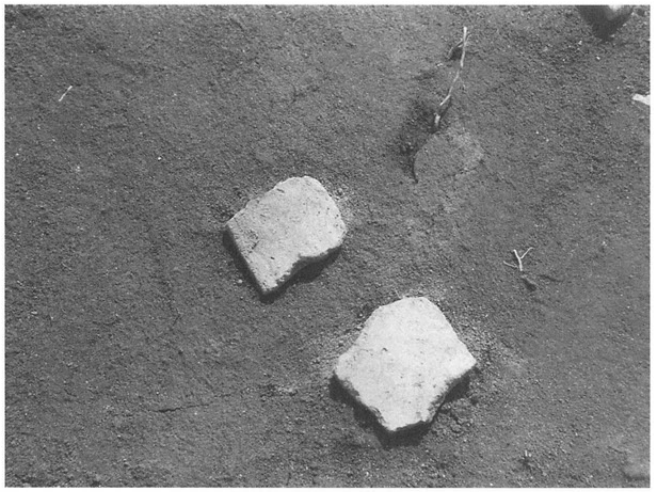
Ａ地区　Ⅰ層目　石検出状況

図版11

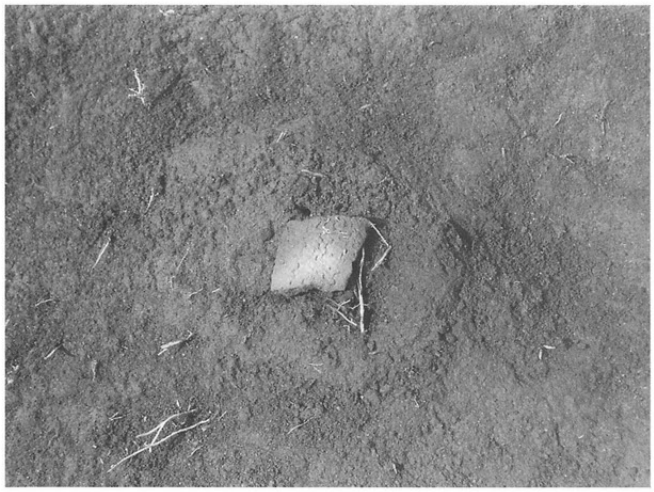
Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況（その４）



Ａ地区　Ⅰ層目　縄文土器検出状況



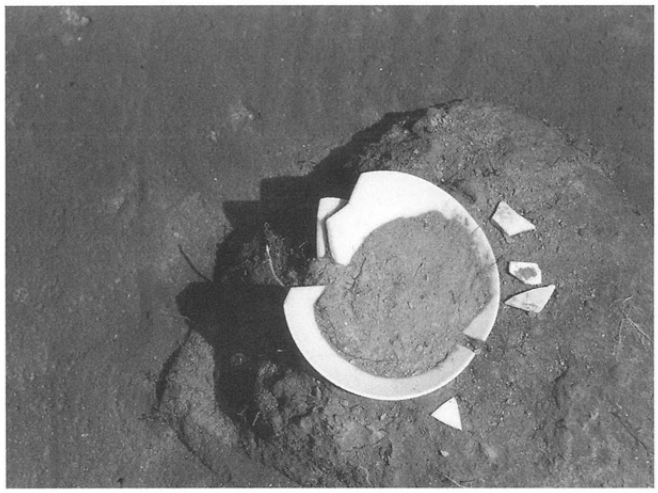
Ａ地区　Ⅰ層目　縄文土器検出状況



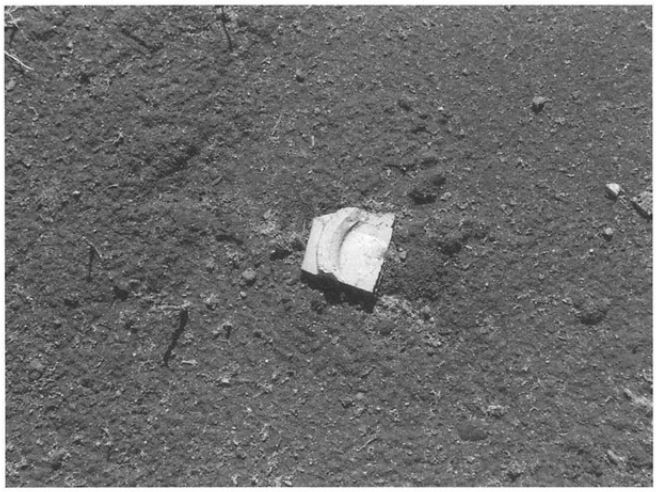
Ａ地区　Ⅰ層目　縄文土器検出状況

図版12

Ａ地区　Ⅰ層目　遺物検出状況（その５）



Ａ地区　Ⅰ層目　白磁茶碗検出状況



Ａ地区　Ⅰ層目　染付検出状況

Ａ地区　Ⅰ層目　磁器茶碗検出状況

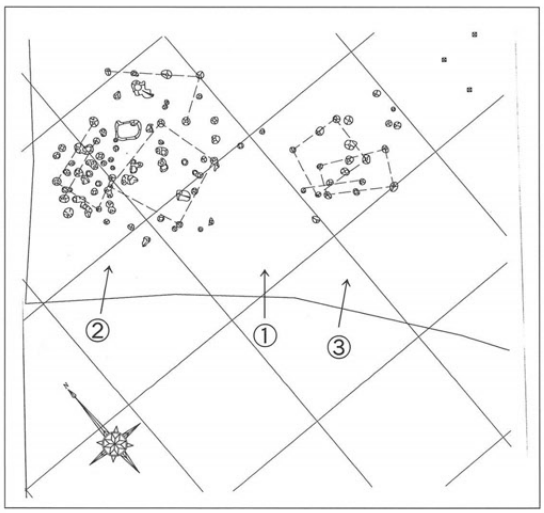
図版13

Ａ地区　ピット群検出状況

①ピット群検出状況　全景

②１号堀立柱建物跡及び２号堀立柱建物跡検出状況　近景

③３号堀立柱建物跡及び４号堀立柱建物跡検出状況　近景

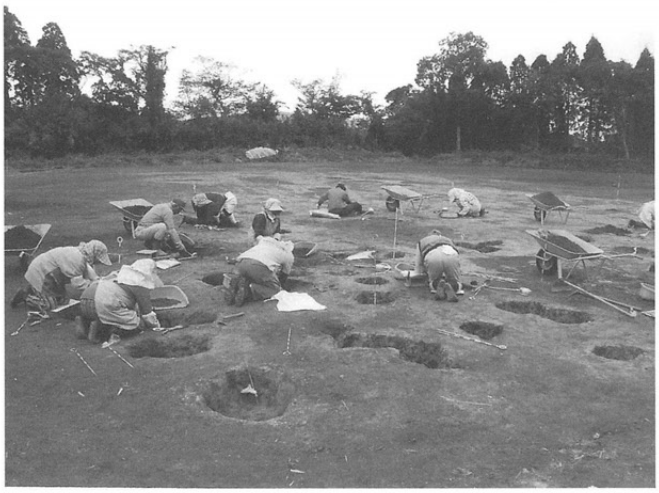


図版14

Ａ地区　ピット群検出作業風景

①ピット群検出作業風景

②ピット群検出作業風景



③ピット群検出作業風景

図版15

A地区ピット内遺物検出状況

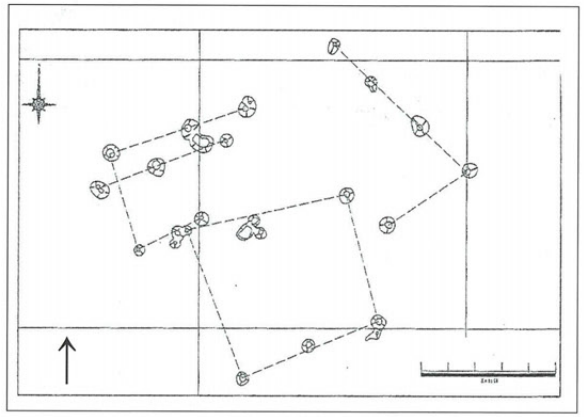
ピット内　磁器検出状況

ピット内　転石検出状況

ピット内　礎石検出状況

図版16

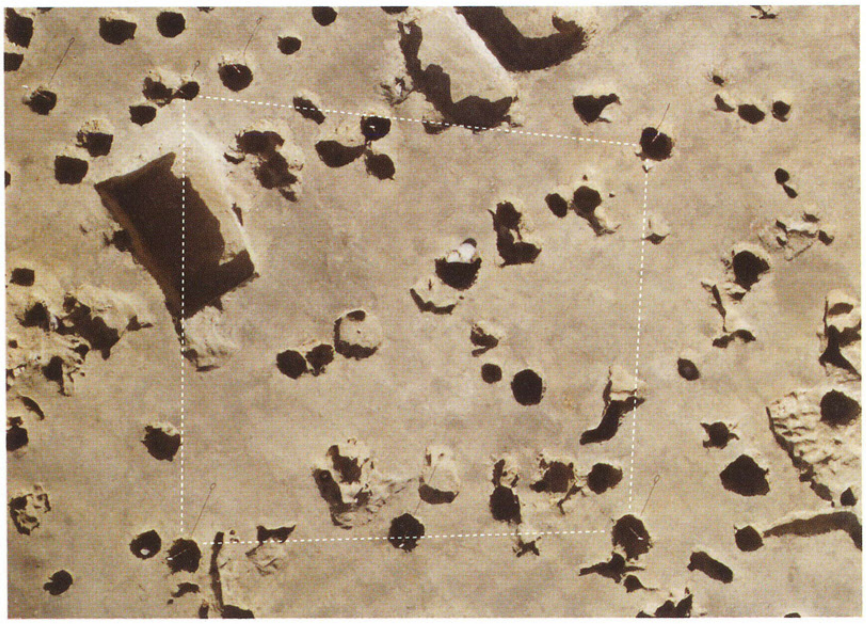
A地区　1号堀立柱建物及び2号堀立柱建物



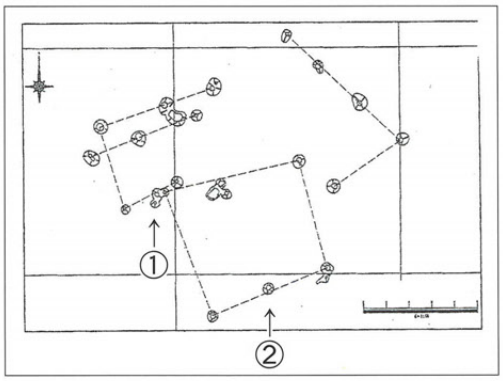
図版17

Ａ地区　１号堀立柱建物及び２号堀立柱建物

①１号堀立柱建物

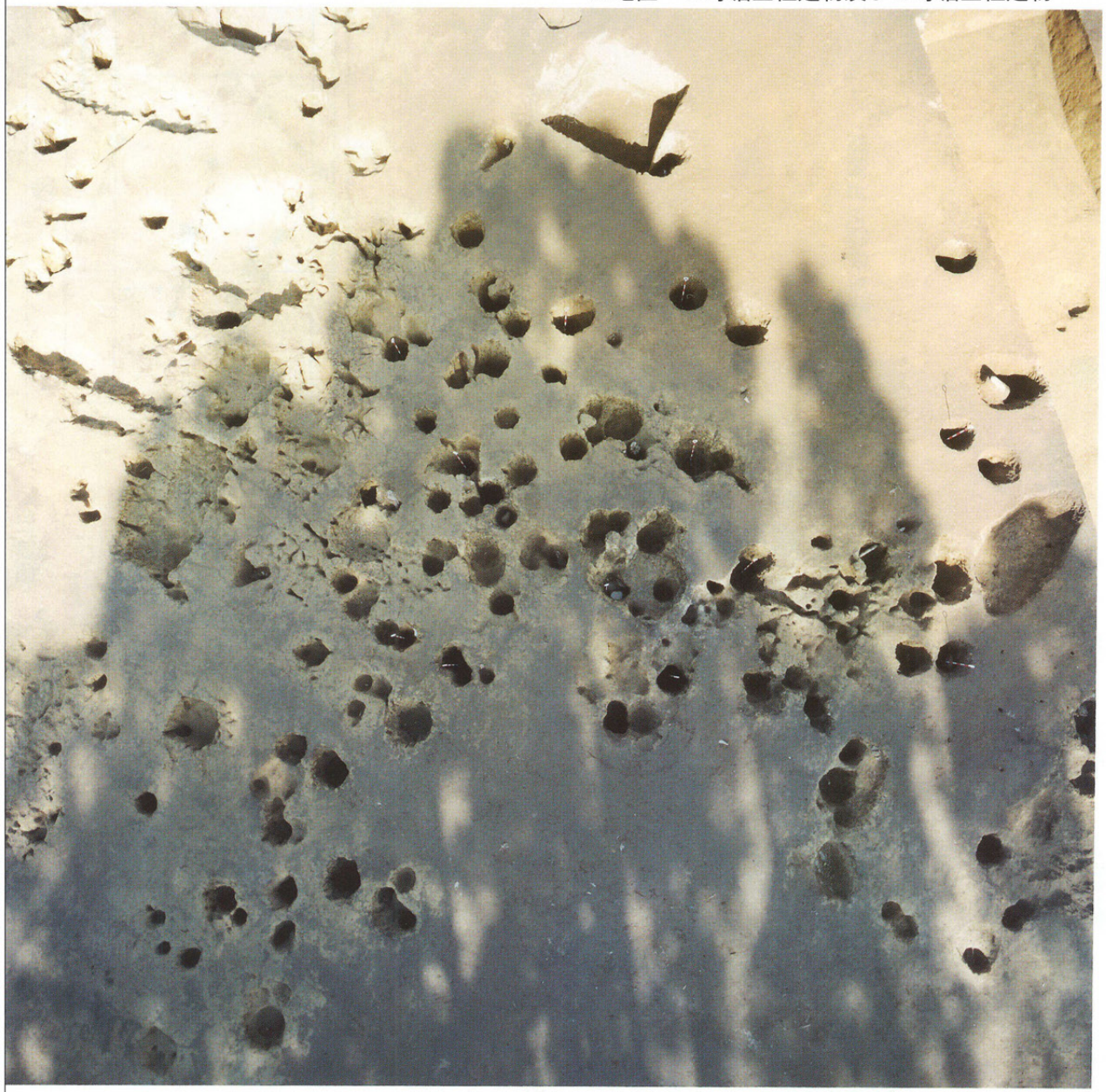


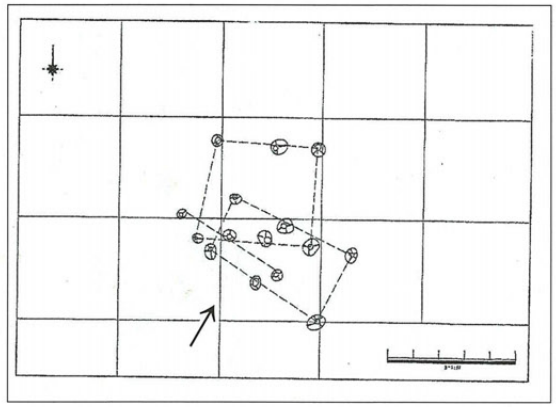
②２号堀立柱建物



図版18

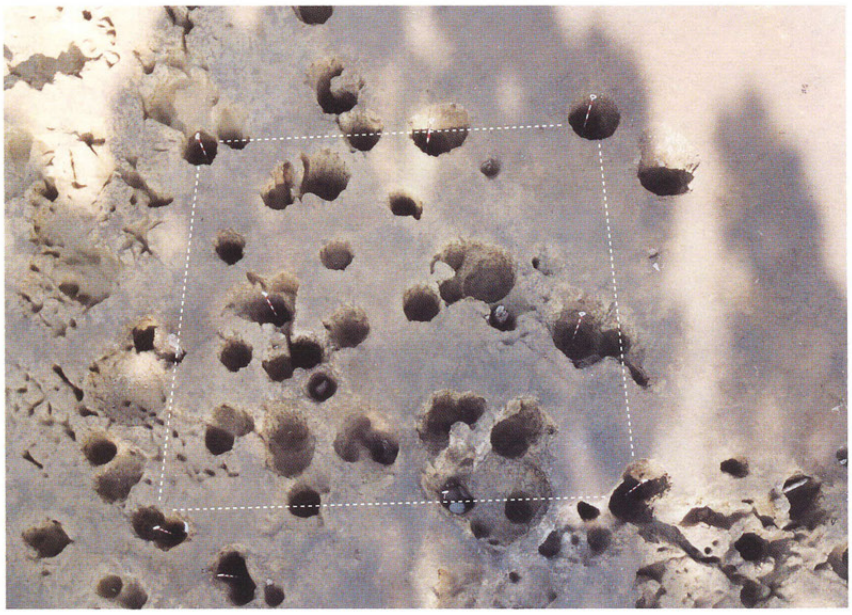
Ａ地区　３号堀立柱建物及び４号堀立柱建物



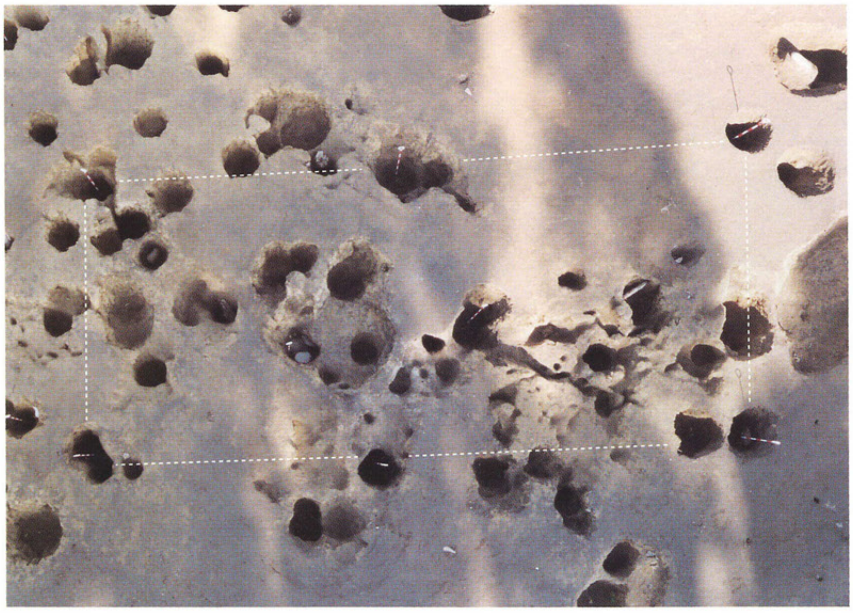


図版19

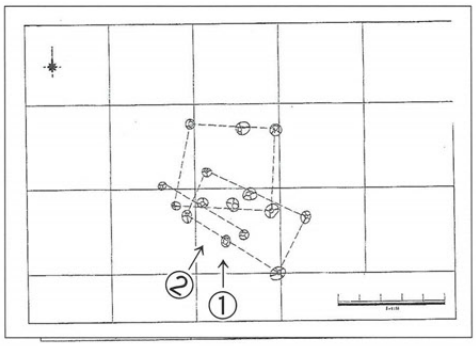
A地区　3号堀立柱建物及び4号堀立柱建物



①3号堀立柱建物



②4号堀立柱建物

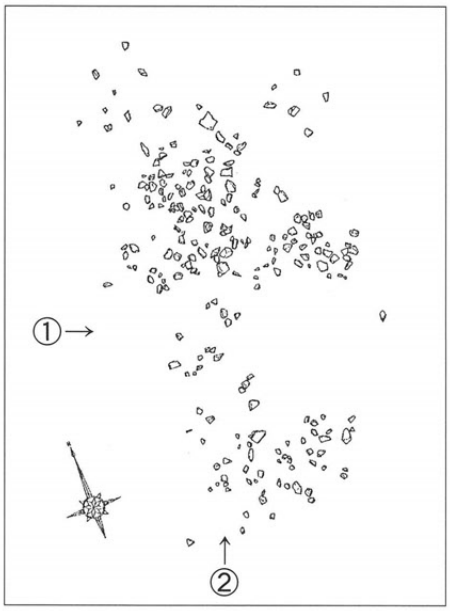


図版20

Ａ地区　１号集石遺構及び２号集石遺構検出状況（その１）

①１号集石遺構

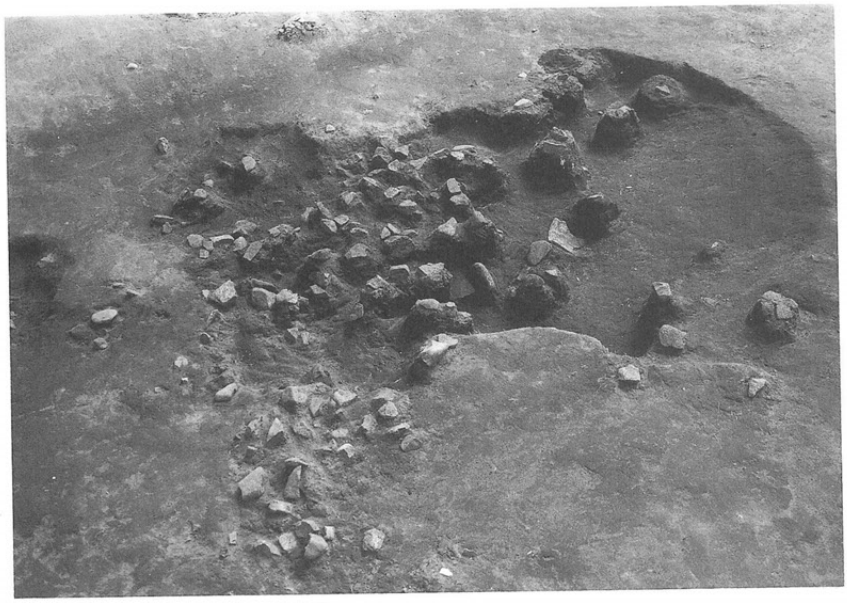
②２号集石遺構



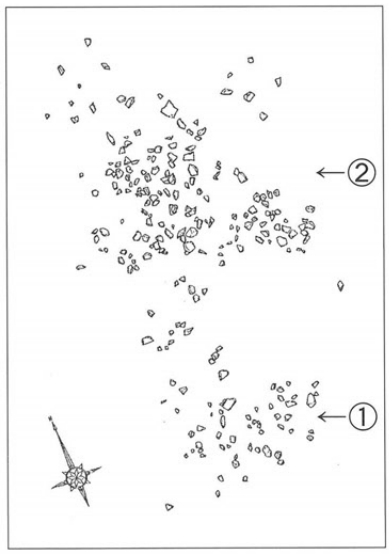
図版21

1号集石遺構及び2号集石遺構検出状況（その2）

①1号集石遺構



②2号集石遺構



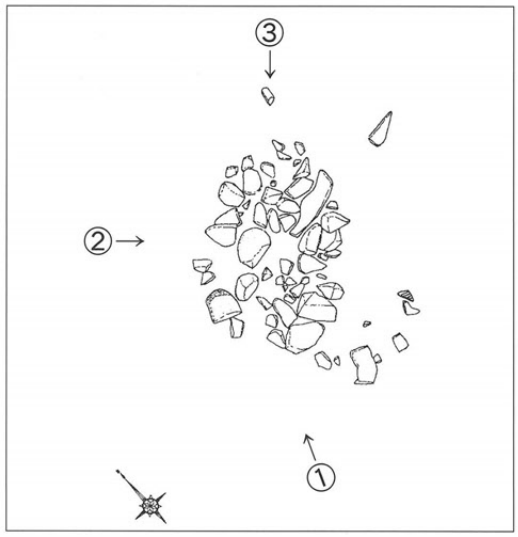
図版22

3号集石遺構検出状況

①3号集石遺構検出状況

②3号集石遺構検出状況

③3号集石遺構検出状況



図版23

Ａ地区　Ｇ－５グリッド　遺物検出状況（その１）

遺物検出状況　1

遺物検出状況　2

遺物検出状況　3

図版24

Ａ地区　Ｇ－５グリッド　遺物検出状況（その２）

遺物検出状況　1

遺物検出状況　2

遺物検出状況　3

図版25

Ａ地区　Ｇ－５グリッド　完堀状況

①作業風景

②完堀状況

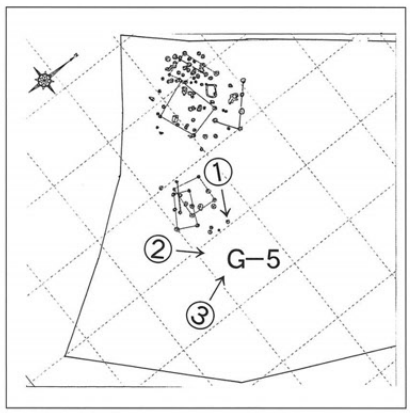
図版26

A地区　G－5グリッド　土層断面

①土層断面　その1

②土層断面　その2

③土層断面　その3



図版27

Ａ地区　出土遺物（その１）

32

77

図版28